# ろーるぷれいしてください

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ろーるぷれいしてください

【Ｎコード】
Ｎ６５７７Ｕ

【作者名】
ワシワシ

【あらすじ】
高校生六人組が、異世界に召喚されました。世界を救って欲しいと巫女に頼まれ、快諾する者もいれば、難色を示す者も。主人公は後者だったが、代わりに途方もない代償が彼女に課されることに。ダークファンタジー、主人公に容赦ない悪夢のような異世界です。息抜き作品のため、描写は少ないです。残酷描写、暴力表現が多く、主人公の性格が悪いため、気分が悪いと思ったらブラウザバックしてください。なお、この作品には、現在ネット上から削除した過去の作品の文章や現行の自サイト文章を一部加筆修正リサイクルして

います。元作品を知る方、そっとしておいてやってください。ぶつ切りながら、完結しました。ありがとうございました。

## はじまりはさいあく

「この世界を救ってください」

その第一声に、はあ？　と聞き返したくなったのを飲み込んだ自分は相当自制心が効いていたと思う。

わけがわからない。

今日は高校三年春の修学旅行だった。

やったら重いバッグをひいひい運んで、バスに乗った。

気がついたら光に包まれ、白いひらっひらの衣装をきた銀髪青眼の女の子が、両指を祈りのポーズに組み合わせて、先ほどの第一声を投げかけてきた。

この娘、頭がおかしいのか。

そもそもここどこ？

水が四方からざあざあ流れて、なにやらＴＨＥ聖域！　という感じのお部屋だ。

私の周囲には、クラスメイトの王子こと八王子夜音（はちおうじないと）、熱血双子の和久井碧空（わくいりく）、和久井憂空（わくいゆあ）、かしましい桐島聖涙（きりしまあくあ）、と私がひそかにＤ○Ｎ四人衆と思う四人組と、幼馴染の仁王大輔（におうだいすけ）が、いつものごとく目えあけてんのかお前とつっこみたくなるほっそい目でぬぼーっと立っている。

大輔のあだ名は大仏。

身長百九十センチにして、頭は角刈り、威圧感は半端ではない。

しかし、この男、虫も殺せないし、感動系映画やアニメを見れば、横で見ている私がドン引きするくらい無言で号泣するし、感受性高すぎてお前大丈夫かと尋ねたくなるような草食系男子の見本市に並べてやりたい以下略

とにかく、大仏なのだ。

で、目の前の頭大丈夫か？　な娘だが、王子こと八王子夜音に目

をつけたらしい。こいつ、見た目まさに王子だからな！

「あの、御願いです。異界の勇者さま。どうかこの世界を救ってください」

中略。

めんどうなので実況説明はすっ飛ばします。

お察しのとおり、あのけったいな娘は、このフォなんたら国のお姫様で、巫女で、とにかく私ら高校生六人を拉致して、更にこの世界を魔物の手から救えとか、わけの分からん要求をつきつけて、しかも魔王を倒さないと元の世界には帰れませんとかどれだけなのという酷い条件をのうのうと口にして、私は納得がいかねえです。

更には、この国の第一王子とかいうワイルド系男子に機関銃のごとく不満をたたきつけた桐島聖涙は、「ふ。この俺にこんな口をきいた女は初めてだ。お前、面白いな」とお持ち帰りされてしまった。彼女はわめいた割りには、まんざらでもなさそうだった。私の汚れた心がそう思わせたのかもしれん。本当にすみません。

で、現在。

私達拉致された組はお持ち帰りされた彼女以外は、ひとまず客室に通され、現状について話あった結果、私はふるぼっこにされました。

つまり、私は、私達を拉致しやがった奴らのいないところで、まず一致団結せねばと、口火を切ったんです。

で、みんなにどうにかして奴らの要求を聞かず、穏便な手段で帰りましょうと提案したわけですが。

敵は身内にいた。

ぼっこぼこにされました。

「こんなこと言いたくないけれど、佐々木さんって、協調性がねえ

よな」

これは熱血双子弟の和久井碧空。

「そうだよ。みんな困ってるんだよ。あたしたちにできることがあるなら、彼らを助けてあげたい。佐々木さんも協力してほしい。ね？」

これは熱血双子の姉の方和久井憂空。まるで私が聞き分けのない子供みたいな言い方をされました。

「佐々木さん、憂空さんのいうとおりだよ。俺たちにできることがなるなら、全力を尽くそう。魔王を倒せば帰れるというし、目的と手段が一致しているんだから、あとは俺たちが努力すればいいだけだよ」

これは八王子夜音。理論的に諭そうという雰囲気がぷんぷんにおうが、ちょ、なんで。

おかしいのは私か！　私なのか！！

拉致されたんだぞ！

なんで、拉致した奴らの要求どおりに動こうとするわけ！？

悪者は私か！？　聞き分けがないのは私なのか！！？

大輔、援護射撃しろ！！　そう思って、ぎっと大輔を見上げたが、奴は草食系すぎた。おろおろと辺りを見渡し、しかも胃のあたりをおさえてるう！

大輔ぇ！！

お前って奴は、お前って奴は！！　役に立たない！！

見た目は羅王なのに！！　中身が残念すぎる！！！

そんなお前のことが好きだけれど、今はあああっ　今はしんどいぞ、大輔ぇ！！

そんなわけで、私は協調性がない、聞き分けがない、身勝手、独りよがり、性格が悪い、色々なレッテルをべたべた貼られた上に、身内の裏切りで巫女で王女なユリア姫に、一人納得していないものがいる旨密告されたついでに、現在、地下で肉体的にぼっこぼこにされていた。

具体的には、一人だけ別室に案内されて、更に水の回廊が複雑に張り巡らされた地下に連れていかれ、騎士と思しき甲冑姿の男たちに、いきなり、ぱーんされた。

つまり、顔面にパンチだ。

何が起こったのか、本当に分からなかった。

鼻血が出た。

鼻骨もおそらく折れた。

腹に遠慮のない拳が叩き込まれて、床にぶっとぶ。

火花が目の前に散った。

痛い。

本当に痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い！！！

なにこれ。

なにこれ。

なにこれ。

内臓を押し上げる痛みに、私は血の混じった黄色い吐しゃ物を床に撒き散らした。

息ができない。

苦しい。痛い。

怖い。

痙攣するかのように脚も手も震え、次に来る一撃を恐れるあまり、歯の根が合わない。内股に生温かい感覚が広がり、私は失禁していた。

何も考えられない。痛いのが怖いというそれだけしか頭にない。
もう止めて。痛いことをしないで。
腹を守らなければ、頭を守らなければ、と生存本能だけで必死にかばう部位を、蹴倒され、柔らかな急所を晒した。
ごめんなさい。
私が悪かったです。
許してください。
多分そんなことを言った。前歯が折れて、うまく言葉になったか分からない。
土下座したと思う。
でも相手は異世界人だ。言葉が通じるのはなんたら加護のおかげで云々かんぬん説明を受けたが、日本の様式美が通じる相手ではなかったのか。
また襲う痛み。
死んじゃう。
というか、死なないのが不思議だ。

「こいつ、意外と頑丈ですね」

異世界人その一が言った。

「ふむ。腐っても世界の膜を越えてきた者だ。なんらかの異能を授かっているのだろう」
「回復力ですかね？　とりあえず、姫さまに逆らった制裁は充分与えましたので、そろそろ××しましょう」
「ああ。許可する」

わけが、分からない。
白刃が。
翻る。

振り下ろされる。
死ぬの？
わたし、死ぬの？
冗談でしょう。
止めて。

ゆっくりと、時間がまるで間延びしたかのように、私はその白い刃の奇跡を網膜に焼き付けた。

だいすけ。
だいすけ。
こわいよう。
いたいよう。
だいすけたすけて。

「――何をしているんですか！？」

そうしたら、本当に、大輔が来てくれた。
図体でかいくせに、中身バンビの大輔が来てくれた。
なぜとか、経緯とか、全然分からない。
でも、来てくれた。

「さつきちゃん！？」

大輔は顔面まっさおにして、こちらに駆けつけてくる。
そして。

あ：：ｋね：ｒ：：え「@」ｐ個：寺宝ｇｙｔｆｒｙｘｄｖｂｈんじゃえいおｒ「あｒｐｐば；、あ

わたしはこえにならないひめいをあげた。
だいすけがたおれる。
だいすけのおなかからけんがつきでている。
はいごから、にこやかにわらう金髪のおとこが汗をぬぐうしぐさで、
「いやあ、先輩がた、気をつけてくださいよ。ねずみが一匹、地下に向かったって、姫様がおっしゃるんで、慌てて俺が追ってきたんですよ」
何か言ってる。
やだ。
いやだ。
大輔。
「だいしゅけ？」
舌が回らなかった。
指先が芋虫みたいにもつれ、ぶるぶると定まらぬ指先で、大輔に触れた。あたたかい。
でも、返事がない。
かちかちかちかちうるさいと思ったら、私の歯の根があわない音だった。
大輔はおとなしい子で、身体が大きいのに心ねの優しい奴だったから、近所の悪がきどものかっこうのターゲットだった。
いつも苛められていて、私がかばってた。
私のほうが小さいけれど、大輔は弟みたいなもので、もう半分以

上身内だった。
お菓子作りが趣味の大輔。
女の子の特有のマシンガントークが苦手でいつもおたおたしていた大輔。
フランダースの犬を見て号泣する大輔。
身体が大きくて、見た目威圧感が凄いために、よく変な勧誘にあっては、なみだ目になっていた大輔。
おなかから、剣を生やしているよ。
もう一度、触れようとしたら、後頭部にものすごい衝撃があった。
何か硬いもので殴られたのだ。
文字通り、目玉が飛び出そうになる。
それから、私も切りつけられた。
私は折り重なるように大輔の身体の上に倒れた。

## このせかいのなまえ

何度も何度も背中を切りつけられる。
背中が熱い。
もう悲鳴を上げることすらできない。
縮こまり、必死に大輔の上に覆いかぶさった。
死んじゃうよ。
死んじゃうよ。
大輔が死んじゃうよ。
私の身体じゃ、大きな大輔を庇い切れない。
止めて。
許してください。
謝ります。
私が調子に乗っていました。
だから。
御願いです。
もう止めて。

「あら？　まだねずみ退治が済んでいないの？」

鈴の音を転がすようなその声に、間断なく切りつけるその動きが止まった。

「殿下方。このような不浄のところに、御身をお運びになってはなりません」
「まあ、黒の万騎長は、見かけによらずこうるさいこと」
「しかし、私は姫殿下に剣を捧げ、その御身を守護する者でありますれば、」

「もうっ」
「ユリアよ、そう目くじらを立てるな。この男は、そこな魔導師と違って、頭が石でできておるのだ」

更に、もう一人、聞き覚えのある男の声。

「殿下方！」
「なんでもよろしい。はやく、その魔物の手先を片付けておしまいなさい。異界から招いた六人のうち、二人は裏切り者と私の託宣に出ています。きっとこの二人ね。ナイト様はお優しいから、こ奴が帰りたいといえば、ご意思をお曲げになってしまわれるかもしれないもの」
「そのとおりだ。アクアを帰すわけにはいかん。先に、揃いの六を四に削れ。はじめの数を損なえば、帰還は不可能になる」

場違いに涼やかな男と女の笑い声が朗々と反響する。
そして、私は、めった刺しにされた。
何度も何度も、鋭い灼熱の痛みが身体を穿つ。
駄目だ。
大輔まで届いてしまう。
駄目。
止めて。
御願いします。お願いします。

「ふん、この女、命乞いしているな。実に見苦しい！」
「本当ですわ、お兄様。ナイト様と同じ世界からきたとは到底思えない愚物ですわ！」
「アクアの足元にも及ばん、醜い女だな。さっさと片付けろ」

止めて。

やめて。
私は謝った。
許されない。
今度は祈った。
助けてください。
誰か助けてください。
神様、御願いだから、助けてください。
でも、誰も助けてくれない。
誰も、救いの手なんて現れない。
秘めた力が目覚めるなんてこともない。
ただぐちゃぐちゃにされる。
まるでずた袋に穴をあけるみたいに、ぐちゃぐちゃに突き刺される。
痛い。
痛い。
いた
い
あ

「ああ、もう死んだか？　反応がないな。伝統にならい、皮袋に詰め、星の河（ユルドゥズ）に流せ」
「まあ、死んだ寵姫と同じ処遇にしてやるなんて、お兄様お優しいですわね」
「ふ。ユリアよ、いつまでも不浄の場にお前のような者があるのはやはり似合わん。黒の万騎長のいうとおり、そろそろ退散しようではないか」
「殿下方、ぜひともに」
「黒の万騎長が心配顔ですので、殿下方、僕が上までご案内いたしますよ」
「魔導師長よ、任せたぞ」

そして私は目覚めた。

皮袋の中で目覚めた。
皮袋の外は水。
濁流の中に、私は目覚めた。
この苦痛を、言語にあらわすことができない。
呼吸ができない。
頭が破裂する。
眼球の奥の血管が爆発するような痛み。
死ぬことができない。
袋の中に詰め込まれたまま、身動きもとれず、何度も水中で、何か硬いものにぶつかる。
そのたびに、身体がえぐれるような、いや、多分肉が削られてい

たのだろう。
めちゃくちゃに暴れたが、左腕が動かない。
どうなっているのか分からない。

地獄のような苦しみを味わい、それでも私は生きていた。
ようやく流れがゆるやかになり、水中から水面へと浮かび上がった時、外の世界は夜だった。
袋は破れ、私は必死に水をかいて岸辺へと上がった。
身体を折り曲げ、ひたすら水を吐く。
呼吸器官がひしゃげて、うまく息もできず、血痰交じりに水を吐き出した。

なぜ、と。
ようやく周囲の状況を確認した時、六、七歳くらいの、小麦色の肌をした女の子が、ぎょっとしたように私を凝視していた。
心臓が止まったかとすら思った。

「お、おねえちゃん、お城の星の河を流れてきたの？」

答えることができない。黙っていると、

「あの皮袋から出てきたよね？　あ、あのね。左腕がぶらんぶらんしてるの？　い、いたい？」

そろそろと近づいて、なきそうな顔をする女の子に、私は枯れたはずの涙がぽろぽろと零れ落ちた。
もう痛覚がない。
なぜ生きているのか、自分でも分からない。

「おねえちゃん、マユルのおうちにきなよ。マユルんち、お母さんとふたりくらしなの。手当てしてあげる」

私は。

声もなく泣き崩れた。

残念ながら。

これからの顛末を話そうと思う。

私は、マユルのお母さんとやらの頭を石で殴打した。

何度も何度も殴打した。

びっくりして、凍りついたように固まるマユル。

こいつらは、私を休ませている間に、こんな話をしていた。

「お母さん、お城の水路から、皮袋が流れてきたんだよ！」

「しっ　マユル、声を小さくしなさい」

「うん、あのね、あのね、あの気持ち悪いおねえちゃん、皮袋の中から出てきたの！！　マユルみたんだよ！！　あのね、皮袋、中から生きている人見つけたら、お城に報告したらいっぱいお金もらえるんでしょっ　マユル、みんなにみつからないようにおねえちゃんつれてきた！！　だから、これからお知らせしようよ！！」

「マユル、いいこね。お母さんが見張っているから、はやく警邏兵に伝えてきなさい。これでマユルにも新しいおようふく買ってあげられるし、おいしいものもいっぱい食べられるよ。さ、はやく！」

人生ってこんなものですか。

お母さん、優しそうだったんですよ。

腕も手当てしてくれて、ただ残念そうに、もう皮一枚でつながっているから、切り落とすしかなさそうだって本当に申し訳なさそう

にもらい涙混じりに言ってくれて、私も涙が出てきてさ。
ただ、突き刺されたはずなのに、どうして生きているのか、怖くて服をめくることもできなかった。
怖くてたまらない。
何が起きているの。
涙の止まらない私を何度も撫でてくれた。
全部お芝居かよ。
私に背を向けたお母さんとやら。
私はもう表情筋が仕事を放棄しましたので、とりあえず、このうちの家財なのか、重そうな石を見繕って、お母さんとやらの頭に振り上げた。
気がついたマユルの目玉があらら零れ落ちそうですが、知ったこっちゃねえ。
殴打した。
殴打した。
殴打した。
マユルはへたりこんで、じわじわ黒いしみが床とスカートらしき衣装のところに広がっていく。
マユルの上にも石を振り上げる。
でも、私は、その石を振り下ろすことができなかった。
子供なんだ。
そしたら、さっき自分がやった凶行が、いまさら現実感を帯びてきて、石を持つ手がぶるぶる震えてきた。
まあ、結論だけ言わしてくれ。
情けなんてかけるもんじゃない。
マユルは叫んだ。
力の限り、金切り声で叫んだ。
化け物がここにいると。
ここに、ユルドゥズから流れてきた女がいると。

私は、びっこを引きずりながら逃げた。
ぶらぶらとゆれる左腕を押さえて逃げた。
本当に皮一枚でつながっているから、いっそちぎった方がいいとすら思ったけれど、そんな暇も度胸もない。

そして思ったの。
ここは、地獄なんじゃないかって。
私たち、修学旅行のバスが事故にあって、みんなきっと死んじゃったんだ。
私は悪い子だから、地獄に落とされたんだ。
だけどさ。
大輔まで連れてくるこたあないじゃない。
あいつが天国に行かないで、誰が天国行くのさ。
大輔はさ。
虫も殺せないやつなんだ。
顔は鬼だけどさ、本当に優しいやつなんだ。
私は性格悪いし、協調性ないし、意地が悪くて、口も悪くて、大輔が優しいからってあいつを顎でこき使ったりして、本当に悪い奴なんだ。
でも、大輔だけは。
あいつだけは。
こんなところで、こんなわけのわからない世界で、死んでいい人間じゃないんだよ。
ちくちょう。

悔し涙とも悲しみの涙ともつかない熱い雫が頬を伝う。歯も砕けろと必死に食いしばる隙間から、うめき声が漏れそうになる。

だから。

このせかいのなまえは、じごく。
これで決まりだろ。
異論は認めない。

## そうまとうってやつですか

『青光石』と書いて、『らぴすらずり』と読む。

諸氏におかれては、唐突に何だと思われるかもしれないが、私にとっては不愉快なことに、常に膝を突き合わせておかなければならない『私の名前』なのである。

こんな明らかに子供の将来を考えない、己のメルヘンな欲望に突っ走った結果丸出しの名前をつけてくれた両親には、本当に落涙するほど感謝している。

思わず日に三度両親の浅慮を呪ってありあまるほどだ。

全国にいるかいないかも分からない同士のらぴすらずりさんには申し訳ないが、私にとってこの名前は甚だ不本意というかもはや呪いの一種でしかない。

私ののっぺりしたモンゴロイド顔に、この名前の語感、字面がもたらすD〇N感ならぬかわいらしさは、ミスマッチを通り越して面の破壊力である。もはや滑稽ならぬ酷刑である。つまらぬことを言ってすまぬ。

相性の悪い二人が一生を添い遂げなければならないなど、不幸以外の何者でもあるまい。

本人がこれほどの違和感を感じている名前であるからして、周囲も同様の感想を抱いたらしく、からかわれることしきりの幼少期だった。

子供というのは、実に異物に対して敏感だ。

未だ己が何者か知らない、十把一からげ、目くそ鼻くその精神年齢にも関わらず、自己が所属する集団の中から毛色の変わった何かを無理やりにでも炙りだして、あれこれ攻撃せずにはいられぬ性（さが）がある。

それは、生体内の病原体を感知して攻撃する免疫系にも似ているが、必要過剰で執拗かつ悪質だ。

病原体の立場におかれた私としては、誠にやっていられない。
悪さをしているわけでもないので、静かに放っておいてくださいというものだ。
似合わない。変。重々承知していますので、鬼の首をとったように高らかに指摘しないでいただきたい。
調子に乗って、背中に蹴りも勘弁して欲しい。
そりゃあ、私の顔が名前に負けない美貌であったなら、この葛藤もついて回らなかっただろうし、周囲にも自然に認知されただろう。
だが、不釣合いなその組み合わせは、歪みの結果をもたらした。
たかが名前。されど名前。些細なきっかけでも、常について回るものであるからして、その子供を地獄に叩き込むには充分な素地がある。
昨今、自分の子供に個性的な名前をつける若いご両親が増えているそうだが、一言いわせていただきたい。
自己満足の前に、もし自分がその名前をつけられたら、と相手の立場になって考えてください。
こちとらあんたがたのペットの犬猫やましてアクセサリーではないんですよ。
まずはてめえの顔(ツラ)見て考えろや。
らぴすらずりって面か。
とりあえず遺伝子舐めるな。
親が鳶(トンビ)なら子も鳶、そうそう鷹(タカ)になることはありませんので、夢見がちも大概にしてください。
分を弁えろという話です。
一言のつもりが、長々しくなってしまった。
どれほど私の鬱憤がたまっているのか、恨みつらみが深いのか、少しなりとも察してもらえれば、誠に嬉しい。
そういうわけで、私がやや中身が歪んだ恨みがましい性格になり、年々更にツイストがかかってきたとしても、故なきことではないとして、頭の隅あたりに放置していただければ大変ありがたく思う。

さて、かような仕儀であるから、行き場のない怒りを鬱積し続けた結果、ある日私は――爆発した。

「お前、名前と顔があってないよな。変。すっげえ変。その顔でらぴすらずりとか、ありえねえよな。恥ずかしくないの？　きっしょーきっしょー」

なんという頭の悪い、程度の低さが露出されまくった悪口であろうか。

小学生の思いつく悪意の発露とは、得てしてそういうものかもしれないが、当時の私にはその低レベルさが非常に腹だたしいものであった。

掃除の時間なのだから、黙って掃除しろ。黙々と廊下を雑巾拭きしながら心中罵る。

注意すれば、余計に騒がれるのは分かっていた。

彼は、私の反応を引きずりだしたいのだ。

相手にすれば喜ぶだけだ。

そうとわかっていて、目の前に餌を放り出してやるほど馬鹿馬鹿しいことはない。

付き合うことはない。

苛々しながら、私は雑巾を汲み置きの水をたたえたバケツに浸しに行った。しかし、相手はまとわりついてくる。貴様、暇なのか。心底暇なのか。

透明であった水は、雑巾を洗う内に、真っ黒になってしまった。突っ込んだ雑巾も手も黒々とした淀みの中に見えなくなってしまう。

そこで、先ほどの台詞が多少のアレンジを加えて繰り返された。

まあ、あれだ。

最後の一押しってのは、なかなかどうして、どのタイミングで堤防を決壊させるのか、やった方もやられた方も分からんものだ。

高校生になった今であれば、無視できただろうその耳障りな囃し

立て方が、どこをどう突いたのか、ついに私の堪忍袋の緒とやらは、景気よく弾け飛んだ。
私の中では暗黒の木曜日だった。
ウォール街のトレーラー達が阿鼻叫喚状態になって紙切れになった証券を手にひゃっほーと空中に紙ふぶきしてた。

べしゃり。

囃し立てる妙な踊りのポーズのまま、相手の顔にぶん投げられた黒い雑巾が張り付く音。
そのまま顔面をずるずると落ちていく。

呆然としていた。
彼も、周囲の子供たちも。
一瞬の恐ろしいまでの静けさの後、驚いた顔の彼はくしゃりと顔を歪め。

つんざくような悲鳴を上げた。力の限り泣き叫ぶその姿に、私は眉根を寄せた。
うるせえ。
たちまち、教師が駆けつけ（誰か呼びに行ったらしい）、事情を問いただし、周囲の子たちは口々に佐々木さんが山田くんに雑巾を投げつけましたと証言した。
間違ってないです。
若い女教師は信じられないと目を見開き、中堅の男性教諭も「なぜこんなことをした」と詰問口調で問い詰める。
私はだんまりを通した。
名前をからかわれたから、と言うのは私のちんけなプライドが告げ口することを許さなかった。
子供には子供の仁義がある。

くっだらねえ、実にくだらぬルールだが、破ったらそれこそ外道である。
相手が外道だからといって、何で自分が外道になる必要がある。
死んでも口を割るもんかと私は思い込んだ。
女教師も男性教師も「こんなことをするなんて、人として恥ずべき行為だぞ。山田くんに謝りなさい」的なことを言って来る。
私は唇を戦かせながら、必死に考えていた。
教師の言うことも一理ある。
確かに、雑巾はやりすぎた。謝るのはやぶさかではない。
大人二人にあれこれ言われ、周囲の子供達に様子をガン見され、山田はうわんうわん泣いている。
遠くで大輔がおろおろしているのが視界の端っこに入る。
これなんてカオス。
さすがの私も目の縁に涙が盛り上がりそうになって、ぎっと歯を食いしばった。
いちばんしんどいのは、やり過ぎた、と自分が分かっていること。
投げつけた瞬間に、すでに後悔は走っていた。だが、投げたもんは、覆水盆に帰らず、山田の顔に帰着した。
だから、悔しいけれど、謝ろうとした。
食いしばる歯の隙間から謝罪の言葉が零れ落ちそうになった矢先だ。
だが、どこにもいるものだ。
おせっかいやろうが。

「違います。先にからかったのは山田くんです。彼が、佐々木さんのらぴすらずりという名前を変だ、気持ち悪い、似合わないと囃し立てたんです。佐々木さんはそれに怒ったんです」
八王子夜音（はちおうじないと）。
私は、こいつが。

だいっっっ嫌いだった。
まあ、そうだったの、と女教師が驚きの表情で八王子夜音と私の顔を交互に見やる。
そうか、と男性教師も難しい顔をする。
いやいやいや、お前ら正気になれ。
やり過ぎたのは私だ。
なんだか、変な方向に空気が流れ出した。
結局、喧嘩両成敗ということになった。
二人とも同時にごめんなさいしましょう、と気持ちの悪い提案がなされ、それはすばらしい的空気になる中、結局私は謝らなかったため、頑固で扱いづらい問題児、というレッテルがべったべたに張られた。
間違ってないけれど。
間違ってませんけれど。
罰として、一週間、奉仕活動をすることになった私。
異存はない。
廊下をぴっかぴかにしてやるわ。
解散になった途端、八王子夜音が追いかけてきた。

「佐々木さん、どうして謝らなかったの？」

おめえの提案に乗るのがシャクだったからだよ。
無言の私に、なにやら斟酌したのか、八王子夜音はうなずいた。

「でも、山田くんも悪いよね。らぴすらずりって、とってもきれいでかわいい名前だと思うよ。ご両親が一生懸命考えてつけてくれた名前を馬鹿にするなんて、許せないことだと思う。佐々木さんは、悪くないよ」

失せろ馬鹿。

雑巾投げつけたら、悪いに決まってんだろ！
両親が一生懸命考えて名づけてくれただと！？
子供の将来考えたらこんなけったいな名前つけるわけねえだろうが！！
お前は顔と名前がつりあっているからいいよな。
なんちゃら人とのクォーターで、彫りの深い顔立ちと、光の具合で金茶に透けてみえる頭髪、ああとってもお似合いだ。
一生添い遂げろそのD〇N。
私は完全に奴を無視した。
山田よりも、こいつが嫌いだ。
こいつなんか消えろ。
現在の私なら、こう言ったかもしれぬ。過去の私、嫉妬乙、と。
とにかく、あう、あわないってものがある。
八王子夜音は、なにかにつけて、学年一の問題児童である私のことを気にかけたり、庇ったり、そうすることで自分は優しいと確認しているように思えた。
当時の私がそこまで考えていたのかはよく分からないのだが、本能的に何か嫌な感じ、と思っていた。
八王子夜音は完全無視する私に諦めたのか、ついてくるのを止めたが、私はずんずんと歩いて下駄箱まで来た。
そしたら、山田が泣きはらした赤い目で立っていた。
私は口を開いた。

「ごめん」

山田も言った。

「ごめん」

謝りたいと思ったら、謝るさ。

山田は、へへって笑った。
私もうへへって笑った。
お互いに照れ照れして、夕日をバックに、拳をがっと交差させた。
山田の名前は『光宇宙』。聞いて驚け、見て笑うな。これで、『ぴかちゅう』と読む。弟は、『雷宇宙』で、『らいちゅう』らしい。
この小学校で、二匹目のぴかちゅうゲットだぜ、である。弟は、一匹目ゲットだぜ、である。
彼もまた親のエゴの被害者であった。
今なら分かる。同属嫌悪ってやつだ。
彼とは、今でも親友だ。
ちなみに、私も彼もこの後、通称名を使っている。
私は佐々木『さつき』。元々、うちのばっちゃが猛攻して、『らぴすらずり』は止めんさいといってくれた際に、第二候補で上がっていた名前だ。ばっちゃよ、なぜもっと言ってくれんかった。なぜこのばっちゃをして、うちのD○N両親になった。恨んでも仕方ない。
なお、彼は山田『とうご』。
ゆくゆくは、この通称名の使用年数を実績に、改名予定である。
大輔は、時々間違えてらぴすちゃん、と言っていたので、しばいておいた。
今は、さつきちゃんで統一しているから。
でも、もう。

あの日があまりにも遠い。
山田ぁ。
私、改名できんかもしれんわ。
未成年でも一五歳から改名は可能だが、やはり年齢がネックにな

る。
だから、大学進学を機に、一度家裁に行こうと思ってたんだけれど、今こんなわけの分からん世界で、異世界人に追い回されてるよ。
点々と路地に残される血痕。駄目だ、駄目。
これじゃ目印になる。
目の前もかすむ。
目覚めろ、私の暗黒パワー。
目覚めません。
分かってた。
私って、しょせん主役になれない女だよね。
らぴすらずりなんて名前のまま死にたくない。

「おいっ　こいつじゃないか！？」

ほとんど視力が失われ、ぼわぼわと変な耳鳴りもする中、ただ、その声だけは。

「捕らえろ！！」

悪意に満ちたその複数の声だけは、はっきりと聞こえた。
分かってた。
ヒーローなんて現れない。
救いの手なんて現れない。
現実ってこんなものさ。
ところで、これは本当に現実なの？
悪い夢なんだって。
大輔は死んでないし、私は左腕が皮一枚でつながっているなんてこともない。
私は人殺しもしていない。
大学には進学する。

経済大国日本、未来は輝いているんだ。
こんなところで、死にたくない。
しにたくないよぉ。

御願い。
何でも捧げる。
何もかも捧げる。

だから。

こらえ切れない涙がぼろぼろと零れ落ちた。

**たいとる**

この世界にも、一つ、せめて理解の及ぶ法則があった。
死は平等だ。
死に方は色々あるかもしれないが、『死』だけは、平等だ。
あるいは、私はその法則から免れてしまったのかもしれない。
それは、多分、特別というより、呪いでしかないけれど。

頭髪をつかまれる。
思いっきり引っ張られる。
ぶちぶちと頭皮ごと引き抜かれるようなそんな痛みで、私は奇妙な悲鳴を上げる。

「このアマァっ　よくもナターシャさんを！！」

誰それ。もしかしてあのお母さん？
ごめんなさい、許して。謝るから、もう痛いことをしないでよ。
悪夢は終わらない。引き倒され、半回転して、地面に顔面を叩きつけられる。
もう許して。もういっそ死なせてよ。
全部諦めるから、いっそ殺してよ。
お母さん。おかあさん。助けて、大輔。

ぶぎゃ、と変な悲鳴が聞こえた。
地面にごりごりと思い切り押しつけられる圧力が急に失せる。
ぼたぼたと、生温かい何かが降り注ぐ。
何だこれ。
私は、首をねじ切るようにして振り仰ぎ、多分悲鳴を上げたかも

しれないし、もしかすると絶句したかもしれない。
私を押さえつけていた男は。
その男の顔は。
「うげえっ」
吐いた。私は吐いた。
逆流し、むせる。
胃液を吐き出す。
男の顔は、左右の耳のあたりからすっぱりと。横半分に。
断面は見えなかった。せめてもの救い。
ぐらり、と男の身体が倒れ込む。
あ、断面が。う、あ。
「しまった！　『湧き』の時間だ！！！　皆家の中に！！」
「護符を持たぬ奴は早く家の中に入れぇ！！！！！！」
必死の悲鳴、怒号が飛び交う。
私は、見た。
空中を舞う触手を。
私は、見た。
触手が、人々を貫くのを。
私は、見た。
触手が、人々の頭蓋に突き刺さるのを。
私は、見た。
触手は、中世ヨーロッパ風とアラブ風を足してニで割ったような民族衣装の中から、四方八方に伸びていた。
まるで、突然、人間が、触手になったみたいに、服の中から、伸びていた。

私は、わたしは、わたしは……

この世界は、なんなんだろう。
これってやっぱり夢だよね。
大輔は死んでない。私は五体満足。
御願い、御願い、御願い。夢だといってよ。
誰か、夢だといってよ。
私に覆いかぶさる男の死体。断面が、蠢いている。
白い何かが、蠢いている。

「ひぃいいいいいい！！」

私は、突き飛ばした。右手で必死に突き飛ばしたつもりだった。
突き飛ばせない。
左腕がないから、バランスが取れない。
嫌だ。
嫌だ！！

――条件が満たされました。

その時、変な声が聞こえた。

――【アンチ・プレイヤーの意思表明】
――【仲間の裏切り】
――【密告される人】
――【初期ステージにおける狩人との敵対】
――【殲滅する狩人ルート】
――【××（秘匿されます）する王族】
――【王族の××（秘匿されます）】
――【プレイヤーの強化システム捨石ルート】

――【迫害される異邦人】
――【人族の殺傷】
――【復讐者（リベンジャー）への道程】
――【失われた肉体の一部】
――【偽りの名前】
――【思×××××××（秘匿されます）】
――【『湧き』時間の接触】

――お見事。完璧（パーフェクト）です。

は？　え？　何？

固まる私の目の前で、周囲もまるで時間が止まったかのように動きを止めた。

あれか、ようやく目覚めたか、私の暗黒パワー。

――ルートを選択してください。

声は淡々と促す。

――一、魔王ルート。
――二、魔王の眷属ルート。
――三、潜伏する異界人。

意味が分からない。

私は、震える唇で呟いた。

「かえりたい」

おうちにかえりたい。

大輔と一緒に帰りたい。

――条件を満たしていません。選択ルートにありません。
もう私は、考えることを放棄したかった。
自分の頭がおかしくなったのかもしれない。
幻聴かもしれない。
でも、もう他に、何の光明も見えない。
だから、ない知恵絞って必死に説明を求めた。
――補足説明は開示されません。
無情で、機械的なその回答に、私は、言葉を失う。
何、そのむちゃくちゃな選択。
どれが正しいの？
止めてよ。
ガンガンと痛む頭で、必死に考える。考えろ。
そして、恐る恐る願った。
「一番、安全なルート」
これで、通用するのか。
死刑宣告を待つ虜囚のように、私はその回答を待つ。
――受理しました。
喝采をあげなかった自分をほめてやりたい。
通じた。
ああ。私は、目先の安全を取った。
卑怯だと罵りたくば、罵ってください。
私は、平和な日本に生きてきた、普通の女子高生です。

復讐なんてできない。
力なんていらない。
もう嫌だ。
もう嫌。
御願いだから、これ以上痛いのは嫌だ。
大輔ごめんね。
弱虫でごめんね。
あんたの敵を討ってやりたいけれど、もう心が折れてしまったの。
心も身体も萎縮してしまって、もうどうしようもないんだよ。
無理。
もう無理だよ。
怖いよ。
怖いよ。
怖いのもいたいのももうこれ以上耐えられないよ。
頬を熱い涙が零れ落ちる。
止まった時間が動き出す。

――さあ、はりきって。

――ろーるぷれいしてください。

**ぎしき**

――は　を　選択しま

――　権放棄の　に

――【折れた心】

――隠し××ルートへの布石が

――

――

「【養殖】に失敗しました」

そんな、声が聞こえた。

止まった時間が動き出す。

気がつけば、私は多くの武装した人間に包囲されていた。

円陣に組まれた人々の間から、あの女――巫女であるユリア姫がしずしずと出てくる。

その表情は、嘘ではない悲しみに彩られていた。

「――残念です」

彼女はいっそ、慈悲深いとすらいえる悲しみに満ちた表情で告げた。

「異界よりの客人よ、お許しください。そして、ご理解ください。我々も本意ではなかった。貴女に恨みも何もなかったし、貴女に罪はなかった。罪というならばこの世界」

ほろほろと白い頬を滑り落ちる宝石のような涙に、私は呆然と座り込んだまま目を見開いた。

何を。

何を言ってるの。

この女のいっていることが分からない。意味が分からない。

それに、化け物はどこに行った。

「そして、【養殖】に失敗した以上は、貴女の存在を放置できません」

「あ、あんた何を言ってるの？」

うまく言葉にできたのか、もつれる舌で問いただした。歯がぐらぐらして、私は痛みより何より、いっそ惨めで恥ずかしかった。

私のこの格好はなんなんだろう。

この透明で美しい女を前に、歯抜けで髪も引き抜かれてざんばらで、頭から血を振りかぶって、腕は皮一枚でつながっている。

制服はかぎ裂きで、身体を隠すには物足りないが、今の私を見て欲情するような物好きはいないだろう。

そう、私は、この世界の幼女をして、「気持ち悪いお姉ちゃん」

呼ばわりされるような酷い外見なのだ。
湧き上がる羞恥心とともに、混乱でめまいがしてくる。
何を尋ねたらいいのかも分からないし、現状把握すら容易ではないこの状況で、いったい何を口にすればいい。
まして、私のこの半ば血と汚物まみれ、ぼろぼろの身体を見て、その加害者であるところのこの女は、何を言い出した？
すまない？　申し訳ない？
は？
いまさらなに？
理由があるんですってか？
ふざけるな。
ふざけるな。
ふざけるなぁっ！！！！

「そうですね。貴女に、理解せよと言ってもそれこそ無理な話だと思います。少なくとも、この【聖なる儀式】は貴女の肉体を痛めつけ、心を折り、そして仕上げに貴女をこの世界の咎を一身に背負う異存在へと転生させることが目的でした。我々は、その存在を人の手で作り出す【養殖】と呼んでいます」

養殖って、私はマグロかよ。そうつっこむ気力もなかった。ただ今にも倒れそうな自分を必死に支え、加害者の言い分とやらを聞くのだけでせいいっぱいだった。

「この手順は、不透明で、素体や運にも左右される。私たちにも確実なことは分からない。ただ過去の経験則によって儀式を行うのです。あまりにも惨い儀式です。でも、惨いからと避けて通れば、もっと惨い結果をもたらす。言い訳はしません。私は、貴女よりも、民を大事に思うのです。異界人数人の犠牲で、この世界が救われるなら、私は後悔しません。私はおそらくやり遂げ、儀式がほとんど

成功したと思っていました」

彼女の顔に浮かぶ、いっそ苦痛とすら呼べる感情の揺らぎに、私は全身悪寒が走る思いだった。彼女は、ふと声の調子を落とす。

「でも、貴女はそれを選ばなかった。そして、選ばなかったがゆえに、また我々にとって不利益な存在として今ここにある。貴女でなくてもよかった。たまたま貴女が条件を満たし、それにも関わらず失敗した。これほどの犠牲を強いながら、それが無駄になってしまった。残念です。また申し訳なく思います。でも私は、巫女。そしてこの国の王女です。ゆえに、責務を果たさねばなりません。もう、許してとは言いません。貴女を滅します」

多分、意味は半分も分からなかったし、理解したいとも思わなかった。

よくよく聞けば、「貴女にはデッドオアデッドというくそったれな選択肢しか準備してませんでした」というどっちみち死んでください的な身勝手極まりないその内容に気づいたのだろうけれど、この時は分からなかった。

ただ、私に分かったのは。

この女が、本当に申し訳なく思っているということ。

心底申し訳なく思う自分という免罪符を抱いている限り、この女は他者にも自分にも容易に許されてしまうということ。

高慢で残酷な悪者なんかより、もっと性質(たち)が悪い。

善意による力の行使、そして賛美すら引き連れ、反省されずに繰り返されるそれ。

虫けら扱いされるよりもっと酷い。

こいつら、私を人間と認めて、そう分かって踏みにじり、痛めつけ、そうしたことを、本意ではなかったと。

そう言うのだ。

そう悲しむのだ。
ふざけんな。

「ごめんなさい」

そう彼女はいい、周囲の武装した男達に指示した。
つまり、私を殺せと。
安全なルートって、これなわけ？
どこが安全なの？
そうか、今なら暗黒の力が使えるのかも。
ふふっ　ははははっ
私はうつむいて、ぶるぶると震える指先で、スカートを引きちぎるほどに握り締めた。
布地に、黒い染みが広がる。大粒の涙がいくつもいくつも染みを作っていく。
私はさっきから願っていた。必死に願っていた。
こいつらを八つ裂きにしてと。
でも、ははっ
何も応えない。
先ほどの不思議な声すらぱったりと音沙汰が途絶えた。
黒い影が落ちる。
もう、何も見たくない。
怖いものは見たくない。

せめてひとおもいにころしてよ。

**ぱわーげーむ**

「いやはや、勝手なことをされると困りますなぁ」

その時を待つ私の耳に、場の空気を読まぬしらじらしささえ帯びた男の声が聞こえた。

「何者だっ」

兵士の一人が厳しい声で誰何するのを、ユリア姫がすっと白魚のような手をあげて制する。

「レジーナの外交官殿が、何ゆえかような場所に？　本日は、別のおもてなしを準備していたはずですが」

硬質な声音は、緊張感を孕んでいた。

私は空気が変わった事に気づき、緩慢に面を上げ、ぎょっとした。

枝垂れる羽をさした帽子を被り、びらびらした原色の派手で奇抜な格好の顎鬚の男。

彼はにやにやと笑みを浮かべて、扇で己をあおいでいた。

「んっんー、本日は気分がのらなくて、辞退させてもらいましたんですわ」

「貴様ぁっ　その無礼なものいいっ」

激怒する兵士を、またもやユリア姫が視線で止めさせる。

「ご気分が優れぬ様子、兵に城まで送らせましょう」

「はっはっ、それには及びません。こおおんな楽しいイベント、我

が国に無断でぇ、勝手にぃ、店じまいされるのを見過ごすほど気分の優れぬことはありませんからなぁ。いやあ、殿下。これは協定違反ですよ。いけませんねぇ」

語尾の延ばし方はとにかく人の神経を逆なでしようとする意図以外汲めない。

しかし、ユリア姫は、まるで不思議なことに、この男の怒りを買うことを恐れるかのように見えた。

そう、言質をとられぬように、言葉を慎重に選んでいるかのような。

「我が国に災いの撒き散らされる前に、排除しようとしただけのこと。使者殿のお目汚しをすることは、我らも本意ではありません。疾く、安全な城までお送りしましょうほどに」

ユリア姫の返事は、おそらく返事になっていなかった。

男が突いた部分に、何の回答もしておらず、ただ誤魔化そうとして失敗していた。

だからだろうか、にやつく男の顔がぞっとするような悪意で歪んだのは。

「おやおや、ファーデルラントの聖なる巫女姫殿下、あたしの言ってることわっかりませんかねぇっ

協定違反だって申し上げたんですよおおっ

『盾』の優先権は、我が国にとの約束でしたよねえ!?

こんなにはやくことを推し進めるとは意外でしたが、なーに勝手に始末してくれようとしちゃっているのか、あたしには手ひどい裏切り行為に思えるんですよおおおっ

あたしは、このことをもって我が敬愛する女王陛下にお伝えしたってかまやしないんですよお!

この弱小、おっと口が過ぎました、この低地の国が、かの野蛮なる獣人の国イスパニアに蹂躙されるのは忍びないですがあっ　我が国の援助を打ち切ってもかまいませんということですよねえ」

男の激しい語調に、ユリア姫は、私が見ても分かる『愛想笑い』を浮かべた。

「使者殿、お心静めていただきたい。
我らも本意ではなかったと申し上げました。
現場における自己防衛です。放置すれば、我が国に損害があると判断し、排除しようとしただけです。異界人をお引渡しすることに問題はありません。
ただ、貴方がたに、危害が及ばぬとは限りませんのよ。私は、それを心配しているのです」
「はっはあ、いやあ、殿下の誠意、しかと受け取りました！
無論、ご心配召されるな。妖精種の薔薇、我が女王陛下に殿下の誠意、しかと伝えましょう！
我らとて、貴国はイスパニアやくそったれなブルゴーヌとの防衛の要、ぜひともよき友人関係でありたいものです。
では、そこの異界人の身柄、我らの保護下にこれより置くということで、異論はございませんなあ？」

ユリア姫の拳が、白くきつく握り締められているのを、私は、かなりはっきりと見ることができた。

「ええ。どうぞお引取りくださいませ」
「いやはは、では遠慮なく。ああ、そうそう。【養殖】に失敗した以上は、【天然】の対応でお忙しいことでしょうな。
まあ、残りの異界人も、当初見越した余力はもはや皆無でしょうなあ！　いやはや、がんばってください。応援しておりますよ。

うんうん、やはり、大陸ルサーカの国力は、均等にするべきですな。
一国が、必要以上にっ　異界の戦力を集中することは望ましくなあいっ　と思うんですよお。
ま、見えざる均衡装置ってやつですな。ははっ　これぞ神の思し召しってところですわ」

まあ、我らの神とお、イスパニアの神は別物かもしれませんがなあっ　ははははは！！！　と男は身をよじって大笑いする。
硬く微笑を浮かべるとユリア姫の指先は、恐ろしいまでに白い。
どれほどの力で握り締めているのか。
そして、彼らの話題の当事者であるところの私は、完全に置いてけぼりになっていた。
だが、分からないでは済まされない。
情報を、とにかく整理して、必死に食らいつかねばならないと、それだけは私にも分かっていた。

レジーナ？　この男が外交官を勤める国？　妖精種の女王？
このファーデルラントという国とは協定関係？　でも、多分、ユリア姫の対応を見ていると、レジーナの方が強い。
レジーナがファーデルラントを援助している、と先ほど確か聞いた。
援助を打ち切られることを恐れているの？
なぜ援助が必要なの？　敵国に対して？　イスパニアという国？
ブルゴーヌ？
戦力の一極集中が望ましくないと、男は揶揄した。
異界人……八王子夜音たちではなく、代わりに私を引き取ると、いやむしろ勝手に殺そうとしたことを責めて、その所有権を主張した？
分からない。

分からなくても、覚えておかなければ。
風向きは変わった。
それだけは分かる。

そう、これは。

――潜伏する異界人、ルートなのだから。

**ふじつなとも**

男は、こう名乗った。

自分は味方ではないが、互いの利益が一致する限り、不実な友にはなりえましょう、と。

「あたしのことは、女王陛下の忠実なる犬ジャン、略してジャンとお呼びください」

ただのジャンでいいと思う。

ジャンは、彼の国に私を連れ帰った。

彼いわく、『盾』として。

この話は、二重構造だと私は理解している。

ひとつ、この世界の構造、異能の話。

ひとつ、国家間のパワーバランスの話。

その二つが複雑に絡まり、私は多分、何も知らずにただ押し流され、殺され、あるいはもっと恐ろしいものにされようとしていたのだろう。

だから、私は知らねばならない。

知らないことは、罪だから？

違う。

知らないことは、己の不利益だからだ。

不利益を通り越して、もはや恐怖の顕現ですらある。

船に乗って彼の国たどり着くまでの、彼とのやり取りを少し聞いてもらいたい。

「いやはや、驚きましたな、異世界人の生命力というのには、なかなかどうして我々の想像の限界を超えたところにありますな」

私は手当てされたが、結局腕は切断した。無事な細胞まで壊死する可能性があるからとの見立てで、あるいは異世界人の生命力なら、『生えて』くることもあるかもしれませんなあ！　と言われた。

即席の義手を渡されなければ、私はバランスを崩し、うまく歩くことも難しかっただろう。逃げ回っている時は必死だったが、よく再々転倒しなかったものだ。

人心地ついてから、男はとうとうと説明した。

「まずは、状況整理して、貴女に【自主的に】ご協力いただきたいと思います。色々疑問もつきないでしょうが、どこからとっかかりましょうかねえ」

男がにやにやと言うのに、私が聞きたいことは決まっていた。

何故私を保護したのか、何故自分がこのような目にあったのか、知っているなら教えて欲しいとたのむ。

「そうですな。まずは、あの低地の国ファーデルラントについて説明しましょう。

あそこは、色々と吹き溜まりやすい土地柄でしてな。まあ世界の正の力、負の澱（おり）のようなもの、正邪問わずに色々と流れ込んでくるそうですわ。

そうしたものが、人、特に胎児の身体に流れ込み、異能をもった人間が生まれやすいと言われます。

あのユリア王女なんぞは筆頭ですな。異世界から人間を拉致する異能なんざあ、とんだ化け物でしょうなあ」

「……もしかして、あの触手の化け物は」

「ご賢察ですな。あれは、負の力が生きている人間の身体にたまり、

限界になって爆発したもんですねぇ。
時節に左右されるのか、私らは、『沸き』と呼んでますわ。連鎖的になりやすいもんで、沸いて出てくる時、と言います。
もうすぐ大きな『沸き』、【大禍津日】が来るといわれてますな」
「それは、魔王、と関係ありますか？」

ジャンは、眉根をあげた。

「うふふっ　いいですねえ。自分を可哀想可哀想と自己憐憫に浸っているようならそれはそれで扱いやすいんですが、まあ必死に頭を回転させているのはなかなか好感触ですな。いやはや、身にしみたってわけですかな？」
「……質問の意図が分かりかねます」

かみつく気力はもうない。私は本当に馬鹿だった。何も考えていなかった。
口に出した言葉は、それ自体が一人歩きする。
誰かが悪意をもって切り取りし、解釈し、あざ笑い、そして大きな災いとなって己に返ってくる。
私だけではない、私の周囲も道連れにして、何もかもむちゃくちゃにしてしまう。
もう充分身にしみた。
もう心が折れてしまっている。
私は所詮小娘なのだ。何の力もない、そのことを口にするほどに分かっていなかった。
この世界が酷い世界だと糾弾して、何になるだろう。
その酷い世界に対して無力なら、例え世界が地獄という君主でも、私は頭(こうべ)を垂れ、その慈悲にすがり続けなければならないのだ。
罪というなら、弱さが罪なのだ。弱さとは、考えぬ弱さでもある。
そんなことも、分かっていなかった。

だから、大輔は、死んでしまった。
それは、私が口にしてしまった言葉以上に、もはや取り戻せない結果なのだった。
謝ったって、大輔はもう戻って来ない。

「いえいえ、話を逸らしてしまいましたねぇ。魔王というのは、【大禍津日】に顕現するという特大の『沸き』の核のことですわ。
これは、自然に発生されますが、自然に任せるより、人為的に発生させた方が、被害が少なくてすむ、という意味で、歴史上ファーデルラントの連中は『聖なる儀式』により、魔王を発生させた例が確認されとりますな。これを【養殖】と言います。
これに対し、【天然】は自然発生ですな。かなり被害が甚大になるということで、勇者が魔王退治をするわけです。
あ、勇者というのは、貴女のお仲間のことですな。
魔王を受け入れる器には、丈夫な異世界人が適しとるようですが、ま、失敗した際は、【天然】の発生に備え、【養殖】に適さなかった異世界人を確保したまま、いずれ始末させておるようですよ」

そうですか、と私は無感動に頷いた。
そうですか。
そうだったんですか。
百パーセント男の話を信用しているわけじゃない。
この男は、この男の利益の追求により、嘘を言わないまでも、都合のいい部分しか話していない可能性だってある。
でも、多分、少なくとも、真実のいったんではあるのだろう。

「それで、魔王にならなかった私は、『盾』になったと？」
「はいはい。『盾』ですな。ま、あたしらにとっての保険ですわ。
勇者と呼ばれるような異世界人というのはねぇ、本当に化け物の上をいく化け物でしてね。

対魔王ならまあ使いつぶしてちょうどよいんですが、これが対人、対国家になると、まあ生物兵器ですな。
ファーデルラントの連中も野心家ですからねぇ。
【養殖】に成功していたら、勇者を温存して、自国の戦力にしようという目論みがあったんでしょうなあ。何しろ六人！
なかなかないですよお。
おそらくユリア姫は、寿命のほとんどを費やして今回の召喚に臨んだんでしょうな。うふふ」

ジャンはしきりに身を捩って笑い、それから「おっと」と正気に返る。

「はいはい、『盾』ですな。まあこれは対勇者への『盾』ですわ。奴らの異能を無効化する能力のことですねぇ」
「無効化？」
「まあ、後々実際に働いてもらうんで目にするでしょうが、異界人の勇者というのは、本当に化け物でしてねぇ。わけの分からん異能で風も嵐も起こし、火の球を起こすわ、氷の矢を降らすわ、回復力は凄いわで、あたしらには困りもんなんですよ。
たった一人が戦術級の力を持っている、これじゃあ戦局は滅茶苦茶ですわ。
一国が、そんな化け物を何人も囲っている状況、困るんですよ、そういうの」

男は笑顔であるが、その目はまったく笑っていない。
また同時に、この世界は、異能と呼ばれるまるで魔法使いのような人種があふれているわけではなく、やはり特殊なことなのだと推測できた。

「ところがどっこい、何故か魔王にならなかった異世界人というの

は、この勇者の異能をキャンセルする力があるようでしてね。まあ、魔王退治でそれどころじゃあないでしょうが、あたしらは安全保障と信用のお代ということで、貴女が欲しかったんですよねぇ」

「……」

「そうそう、あなた、儀式を通じて何か啓示を受け取ったんじゃないですか？　ま、あたしらは異界人じゃないんでよく分かりませんが、その辺のことは、あとであたしも聞かせてもらいたいですねぇ」

私は頷き、そして必死に頭を巡らせた。

多分。

一緒に来た奴らが勇者＝プレイヤーなら。

私は、盾＝アンチ・プレイヤー。

そういうことではないのだろうか？

「さて、この辺が一つの世界の構造における事情。もう一つは、国家間の事情ですな。

ファーデルラントという国の成り立ちを説明しないことには、我が国のこともお分かりいただけないでしょう。

まずは、ファーデルラントという国は、実は歴史が大変浅く、ここ数十年でできた国なんですわ」

え？

私は狐につままれたような気持ちになった。

どういうことだ？

「正確には、未だにあの国を国と認めていない国もありまして。おっと国が三回も。

いやはや、あたしたちレジーナ国は、ファーデルラントをファーデルラント国と呼んでおりますよ。
何しろ、かの国の建国を助けたのはあたしの偉大なる女王陛下なんですよ」

うっとり、恍惚、ともういうべき表情を男は浮かべる。

「女王陛下万歳。さて、ファーデルラントを国として認めていないのは、イスパニアという獣人の国家ですな。
きゃつらは、イスパニア領ファーデルラント。あるいは、イスパニア領ファーデルラント七部州とそう呼んでおります。
といいますのも、独立したのは北ファーデルラントのみで、南ファーデルラント六部州はいまだにイスパニアの支配下にあるんですなあ」

イスパニア。
おそらく、レジーナと敵対している国の名前。
つまり、ファーデルラント『国』を認めないイスパニアという脅威に対し、ユリア姫は援助者であるレジーナと関係を切れない。
違う、レジーナの庇護をまだ必要としているのだ。
だから、譲った。
そう、私の所有権、殺害の権利を声高に主張せずに、男に譲らざるを得ず、ご機嫌をとったのだ！

段々と構造が見えてきた。

この世界は、思ったよりも、私たちの世界に近いのかもしれないと、不思議とそんな気すらしてきた。

「でも、何故、あなた方の国、レジーナは、ファーデルラントの庇

護を？」

何か利点があるのか。

「まあ、一つは同じ宗教であるという点ですな。我が国も北ファーデルラントも、【顕現派】なのです。対するイスパニア、ブルゴーヌ、南ファーデルラントなどは、【現界派】と言いますな」

「【顕現派】？　【現界派】？」

「んんん、簡単に言いますと、神の威光のあり方ですな。【顕現派】はこの世が煉獄であるとし、いずれ選ばれた者が救われ、神の野へゆけるという考え方、あるいはこの世に、救済が顕現するという考え方ですが、異界からの力もその救済の一つと考えます」

「では【現界派】は？」

「【現界派】はこの世は神のつくりし神聖なる世界であり、世に起こる不幸や災いは試練であるという考えですな。あなた方が来た異界は、むしろ不定形の恐ろしい世界であると考え、そこから呼び寄せるものを邪悪と考えますね」

ぞっとする話だ。

へたすると、魔女狩りのような目にあっていたかもしれない。

なんなのだろう。

この世界、やはり思った以上に現実的な世界なのかもしれない。

「もう一つ、理由が？」

「こちらは現実的な理由ですな。ファーデルラントは物理的要衝でして。ここが落ちると、我が国とイスパニア、ブルゴーヌを隔てる国がなくなっちまうんですな。あっはは！！」

あきれるほどに現実的な話だった。

「ちなみに、あたしは、神様なんて信じてませんよお。あたしが信じてるのは、女王陛下だけ！
貴女は陛下へのお土産ですわ！　せいぜい無礼を働かないようにしてくださいよお。
ある程度もののどおりってのをお教えして差し上げるんで、お互いの利益が一致するようバランスとって、いつまでも楽しく不実な友でいましょうねぇ！」
「……ええ」

この後。
私は本当に国家間のパワーゲームの中に放り込まれ、そして勇者や魔王とも対峙することになる。
今は嵐の前の静けさ。
妖精海峡と呼ばれる海はその名とは裏腹に穏やかさとは無縁の黒く冷たい色をしている。
暗き海を臨むその先に、妖精の国とも呼ばれるレジーナ王国はあった。

## ふじつなとも（後書き）

設定整理メモ

大陸名　ルサーカ
西ルサーカ。　←舞台
中央ルサーカ。
東ルサーカ。

顕現派
旧顕現派　北ファーデルラント
中道派　　レジーナ

現界派　　ブルゴーヌ　イスパニア　南ファーデルラント六部州　聖ヨルンド教国

妖精海峡

ファーデルラント地方＊
北ファーデルラント王国　低地の国　よいものも悪いものもたまりやすい
イスパニア領南ファーデルラント六部州

＊旧イスパニア領七部州、イスパニアにとっては現在も七部州と考え、ファーデルラント建国は認めていない。

## みみとめとあたま

――ダン！

槍の柄が床をつく。

入り口を守る左右二人の兵士の内、一人が先触れを高らかに告げた。

「ジャン・バルトロマージ卿！　女王陛下に謁見！！」

ここは妖精の国、レジーナ王国。

私は、奇妙なレジーナの外交官ジャンに連れられ、妖精海峡を越えてここまで来た。

妖精海峡というメルヘンな名にふさわしくない色合いの海は暗く、冷たく、荒れていた。

航行中、イスパニア籍の船と戦闘もあった。

「さすが獣、きゃつらめ『盾』の輸送をかぎつけおったわけですな」

ジャンの言葉に、ぞっとした。イスパニアという国は、異世界人を邪悪と断じる国だという。

ファーデルラントも酷かったが、イスパニアにつかまれば、どんな扱いを受けるか分からない。

だが、レジーナ船籍はイスパニア船籍を翻弄し、大砲をかまし、見事打ち払った。

彼らは酷く手馴れているようだった。

むしろ、普段はイスパニア船を襲うことの方が多いようだ。
なんという無法地帯だろう。
彼らは景気付けに祝杯を挙げ、余興に肉を取り出すと、海に投げ込んだ。

驚くべきことに、肉塊を暗い海に放り投げると、海中にいる『人魚』たちが、我先にと争って食らいつき、ご馳走を手に入れられなかった者は、びちびちとその魚の目で怒り心頭に発して暴れ狂っていた。
『人魚』は可憐さとは程遠く、その性質は獰猛な肉食だった。
船員達は恐れるでもなく、『人魚』の痴態をげらげらと指差して笑う。
どこにユーモアを感じるのか、私には理解不能だった。
ここは、本当に恐ろしい異世界なのだ。
その恐ろしい世界の屋台骨を構成する大国、レジーナ王国。
かの為政者にこれから会う。
極度の緊張で全身に汗をかき、私はすでに臆して震えが止まらなかった。
気合を入れろ。
そして頭を低く垂れろ。
相手を見ずにかみついた結果を、私は――忘れない。
身体には脅えがこびりつき、恨み憤る気持ちはきっとあるけれど、それを遥かに超えて自分の安全に優先順位を置いてしまっている。
あんな仕打ちを受けて、義憤に突き動かされ続けられるような人間は、一体どれだけの強さを持っているのだろう。
私には、もう、無理だった。私は、自分の身が可愛い。結局、そんな人種でしかない。
涙はもう出尽くした。
怒りも憎悪も、硬く封印した。もしかすると、そんなものはただ自分は安全だと、無邪気に信じていられるから持ち得た感情なのか

もしれない。
今の私にできるのは、小さくなって、災禍をやり過ごすことだけ。
そして――目を凝らし、耳を済ませて、ない知恵絞って頭をフル回転させ続けるしかない。
情報が全てだ。魔法の力なんかよりも、何が味方で、何が敵なのか、見極めなければ、知らないところで、私の命など軽々しく扱われて、殺されてしまう。もっと酷い目に合わされる。
だって、私は無敵じゃない。何がしかの異能があったとして、結局ただの人間でしかない。
力を持った誰かの恣意で簡単に左右されてしまう。
この世界では、知らないことが罪なのだ。力ないことが悪なのだ。
何が起きているのか、知らねばならない。そして考えなければならない。
そうしなければ、私はこの世界を前に、風口の蝋燭としかなりえない。
その事実を、ようよう痛いほどに私は噛み締めて、震える足で謁見の間、レジーナの為政者の前に進み出た。

黒衣に脂ぎった小山のような身を包んだ肉樽、
陰鬱なけはいを背負った、青白い神経質な顔の文官、
精力がやや減退期にさしかかっている、濃い顔立ちの色黒男、
髭にやたら気を使っているらしい優男風の詩人めいた面立ちの男、
小柄だが油断ならぬ鷹のような眼差しをした、海軍提督姿の洒落者……
謁見の間には個性豊かな廷臣に軍人その他が並び、新たに入ってきたジャンや私に彼らの視線が集中した。
大扉の左右に直立不動で配置する衛兵たちは、再び槍を交差させ

る。
視線の先、玉座は空だった。
まだ、主の姿はない。
一瞬すぐさまの対面でないことに安堵しかけた瞬間――
不意にホールの雑音の消えた。
安堵にため息をこぼしかけた私を現実に引き戻したのは、それによってもたらされた圧倒的静寂だった。
「ジャン、戻ったようだね」
けして大きな声ではないが、朗々と広間に響く。全ての者を傾注させずにはおれない不思議な力を持った声だった。
人々は腹に手をあて、面を伏せる。
空(から)の玉座には、いつの間にか女が一人腰掛けていた。
その顔は白塗りだ。
鷲鼻でとがった顎。
薄い唇は引き結ばれ、強固な意志と気難しさに彩られている。
赤い頬紅を差し、剃り込まれた額は奇妙に広過ぎる。
ハート型に結い上げられたそれは色褪せた赤毛だ。
耳は鋭い笹の葉型。
ぎょっとするほどに強烈な印象の女性だった。
あまりにも印象が強いために、かえって年齢不詳になっている。
美醜で言えば、不美人である。
よくよく見れば、すでに彼女の顔には逃れようもない老いが表れていた。
たが、その存在感は沈み込むような重力すら伴って、圧倒的であった。
強烈な個性。印象的で、視線をひきつけてはなさない。

妖精種の女王、グロリアーナ。

耳の尖った人種の多いレジーナ王国の頂点に立つ女性である。

私は、再び強い引力を放つ声に圧倒される思考を中断された。

「ファーデルラントの巫女姫やイスパニアの駄犬と一戦やりおうたそうじゃな。そなたは巫女姫の高い鼻をへし折ったと聞くぞ」

女王は、扇を手のひらに打ち、「巫女姫はともあれ、イスパニアの獣（けだもの）を尻目に、見事『盾』をきゃつらの鼻先から掻っ攫うとは、さすがじゃのう」とにやりと笑って促した。

「さあ、そなたの話を聞かせておくれ」

老いてなお力強く印象的な女王の言葉に、ジャンがやはりにやり、と笑い、大袈裟に身振り手振りで話を始めたのを、私はただ横で聞くのがせいいっぱいだった。

「我が女王陛下にはご機嫌麗しく……ですが、やってもいない武勇伝を聞かせよとはまた困難なことを申されますな。

確かに妖精海峡でイスパニア船籍が一隻沈んだらしいですが、我が国の船籍は関与しておりませぬゆえ。

どこぞの民間の船がやりおうたのかもしれませんが」

「は、そうであったな。

少なくとも再三に渡るイスパニア側の抗議に対して、イスパニア王リカルドには、妖精海峡にレジーナ船籍の賊はおらぬと回答しておる。

イスパニア王め、賊の通商破壊は頭痛の種であろうなあ。とはいえ、我らもまた無法者の被害者であるゆえなぁ！」

状況に追いつくのに必死だが、やはり妖精海峡でやりあった交戦は、日常茶飯事のことのようだ。
国家対国家の戦争に発展する前に、イスパニア船籍襲撃は、レジーナ船籍ではないどこかの民間籍の船がやっているので、国は関係ないという態度なのか。
だが、妖精海峡でのイスパニア船籍への『民間船』による攻撃とやらを、国家であるレジーナが背後で糸を引いているのは、この二人の白々しい態度で明白ではないか。

「それはさておき。『盾』の確保の他に、ご報告がございます」

がらりと雰囲気を変えたジャンに、女王も頷く。場の空気が引き締まった。

「ご承知のとおり、イスパニア属領のファーデルラントの反乱が、イスパニア王めの頭を悩ませているのは周知の事実ですが、この独立に我が国が密かに支援をしていたことは、もちろん彼の王も気づいておりましょう」

はっきり断言しやがった、と私はむしろ呆れた。

「確かにな。
私個人としてはファーデルラントがどうなろうと知ったことではないが、あれは妖精海峡にあって我が国と西ルサーカ大陸との貿易の要衝じゃ。
イスパニアの好きにさせるわけにはいかぬ」
「そして何より、ファーデルラントにかかずらっている限り、イスパニア王は非公式の軍事行動ともいえるレジーナ王国海賊の跳梁(ちょうりょう)にも態度を保留にせざるを得ない。

正面きって戦争を仕掛けるのはしばらく避けるであろう……そういう読みでしたな」

おいおい、アウト、である。

レジーナは、背後で民間の船が他国へ海賊行為を働くのを推奨していた、むしろ支援していたというのだ。

非公式を免罪符にした軍事行動ではないか。

整理しよう。

つまり、イスパニア王はレジーナの海賊行為に腹を立てているし、裏で糸を引いているのがレジーナなのは分かっている。

しかし、ファーデルラント反乱など他の問題で手がいっぱいなので、すぐに報復はできない、という状態なのだろう。

そしてこのファーデルラント問題が長引くよう、レジーナ王国は背後で暗躍していたのである。

ユリア姫が愛想笑いで遠慮したのは、この辺の事情だろう。

そのような背景があり、北ファーデルラントは「ファーデルラント王国」として独立を果たしたということらしい。

「ジャンよ、動きがあったか」

女王の金色の目が強く光る。

「ファーデルラントの精神的指導者である、エミリオ王太子が暗殺されました」

「「何……！？」」

廷臣たちの間に衝撃が走る。

驚いたのは、私もだ。

エミリオ。

ユリア姫の兄であり、共に来た同級生の桐島聖涙（きりしまあくあ）を「気に入った」とお持ち帰りし、私や大輔への暴行を指示したあの王子。

死んだ？

暗殺された？

え？

どういうこと？

知らない。

そう、ジャンは、この男は、真実など全て当然ながら私に話していたわけではない。

出航前にはすでに分かっていたことを、ただ私に告げなかった。

不実だと罵るような権利を主張することはできない。

ただ、彼は言わなかっただけ。

私は知らなかっただけ。

そんな一つ一つの「知らない事実」が私を情報弱者にし、時に命を奪う。

だから、目を凝らし、耳を澄ませ、考えなければならない。

嵐の前の静けさは終わり、暴風雨が訪れようとしていた。

**あくま**

「ファーデルラントの精神的指導者である、エミリオ王太子が暗殺されました」

廷臣たちに動揺が走る中、だが、女王は落ち着いたものだった。

「イスパニアの仕業か……」

「エミリオ王太子にはイスパニアから賞金がかけられておりましたからな。

去年は陛下の暗殺をはかり、無論失敗に終わりましたが、こちらは成功した模様です」

となれば、とジャンは続ける。

「ファーデルラントが陥ちれば、我が国とイスパニアを隔てるのはあの狭い妖精海峡のみ」

廷臣達の顔色は悪い。

「なお、イスパニア王には、対スパイスバザール帝国のイージス沖海戦で一躍イスパニアの英雄となったカサノバ侯より、大艦隊を差し向けるレジーナ王国本土上陸作戦が上申されていたと聞き及びます」

イスパニアは、レジーナ本土に乗り込もうという作戦を考えていた？

「莫大な予算、そして我が国との正面衝突を避けるため、イスパニ

ア王は一度は『それには及ばぬ』と退けたそうですが、もはや彼の王の我慢の限界に達しているのに間違いはないでしょうな」

予算上の問題で、一度は取りやめたものの――

「ファーデルラントは王太子暗殺により、これより政治的な混乱、そして魔王の脅威に動けないでしょう。

我が国以外の頭痛の種が取り除かれ、後顧の憂いを絶った今、カサノバ候めの発案を退ける理由はないでしょう」

女王は厳しげな視線で廷臣たちを見渡す。

「近々イスパニアと正式に交戦することとなろう。野蛮なるイスパニアに備えよ」

「「「「「「はっ」」」」」」

廷臣たちは彼らの女王に膝まづいた。私も右に倣えでとにかく膝をつく。

追いつけない、考えて。

イスパニアは、ファーデルラントの精神的指導者であるエミリオ王太子を暗殺したから、次は背後で暗躍していたレジーナにその穂先を向けたと。

つまり――戦争だ。

「『盾』よ、念の為、そなたにも対イスパニア戦において備えてもらおう」

恐らく働くことはあるまいが、とようやく女王は私に声をかけた。
私は脅えるままに裏返った声で返事した。
女王は失笑まがいに、「そう緊張するな」と声をかけ、矢継ぎ早に廷臣たちに指示を飛ばす。
「我が国の艦隊は、海洋王国イスパニアに比して心もとない。急ぎ、民間船籍を募り、艦隊を編成せよ」
予兆のとおり、イスパニアは恐るべき速さでレジーナに進撃した。

青。それとも黒。

現在、私は激しい砲撃音の下にいた。
「てえええええええぇぇぇええええええ!!!!!」
闇色の暗い海に、爆音すら引き裂くような砲撃を指示する声。
レジーナ側は、海軍提督がサーベルを振り下ろし、自軍の長距離大砲に一斉射撃を命じて、大艦隊を攻撃させている。
時はファーデルラントのエミリオ王太子暗殺より一ヶ月後。
正面衝突を先延ばしにしてきたレジーナ王国とイスパニアは、正

式な戦争へと突入し、ついに長年の不和に雌雄を決する時を迎えた。

レジーナ艦隊対イスパニア艦隊の海戦。

イスパニアに比して木の葉のような弱小の艦隊しか持たぬレジーナ王国と、海の覇者イスパニアの大艦隊戦が、今まさに私の前で始まったのであった。

腹に響く爆音とともに、放物線を描いて発射される砲弾。

それが何発も何発も間断なく繰り返される。

耳がおかしくなりそうだ。

「各グループは散開し、距離をとって攻撃せよ！」

その大音響にも負けず、朗々と力強い声が混迷を引き裂いた。

「長距離射程軽砲は低い弾道で撃て！　イスパニア艦の土手っ腹に弾をぶち込んでやれ！」

指示どおり、レジーナ王国小型艦はイスパニアの大型鑑に近づいては大砲を打ち込み、さっと引き返す戦法で相手を翻弄している。続けてレジーナ側提督は声を張り上げた。

「恐れるな、敵艦は見掛け倒しののろまのガレー船戦術だ！　ここは奴らお得意の穏やかな温海ではない！　イスパニアの間抜けどもに、北海の荒波の恐ろしさを教えてやるがいい！」

士気を鼓舞して矢継ぎ早に指示を下している。
だが、見るからにイスパニアの艦隊は巨大である。
１０００トン級、８００トン級といった大型船を水月陣形に密集させた上、重砲で武装しているが、レジーナ王国側は同程度の大型艦は数える程度、そのほとんどが小型艦であった。
イスパニア艦の重量級に比べると、まるでただの木の葉の「寄せ集め」にしか見えない。
私は不安だった。
イスパニアの陣形は強固に堅く、レジーナ王国の木の葉は壁にぶち当たって手をこまねいているようにも見える。
しかし、総司令官、副司令官の元帥並びに各猛将は連携して獅子イスパニアを翻弄している。
総司令官は部下から「準備が整いました」という報告を受けてうなずくと、敵艦を見据え次の指示を飛ばした。

「よし、風上から火船を放て！　敵艦を炎上させ、沈めるのだ！　恐れるな、敵艦はカサノバ提督を失い、海戦経験のない素人のシドニア公の指揮である！」

イージス沖の海戦で、ルサーカ大陸中央部を制するスパイスバザール帝国を破ったイスパニア側の海の英雄カサノバ侯。
彼はレジーナ王国侵攻を待たずして、半月前に死亡していたのだった。
代わりを務めたのがシドニア公。これはイスパニア側の士気を大いに下げ、レジーナ王国側に有利に働いた。
やがてレジーナの指示どおり、可燃物を満載したあまりにも大規模の火船が、風上より水月陣形に密集したイスパニア艦隊に突っ込んで行った。
その船に、何かが蠢く。
大艦隊に接するや、飛び出す人影は――桐島聖涙（きりしまあくあ）。

何故、彼女がここに、そう驚く傍ら、
彼女は、吼えた。
その咆哮は、北海を揺るがす。
イスパニア側も、レジーナ側も、関係なく凍りつき、そして。
一方的な蹂躙が始まった。
大艦隊が少女を殺したのではない。艦隊が、少女に蹂躙されたのだ。
一人の少女が、その怒りが、悲しみが、戦局を左右する。
彼女は、泣いていた。
エミリオ、エミリオ、と声が聞こえる。
私は、知った。推測した。
彼女には彼女の物語があったのだろうと。
もしかすると、きっかけはなんであれ、彼女は本当に普通にエミリオ王太子と愛し合ったのかもしれない。
私にはどうでもいいことのはずだが、その悲鳴のような咆哮を耳にするたび、がりがりと精神値が削られていくような気がしてならなかった。
「震えてるんですかね」
にやつく男が背後に立つ。
炎に照り映える北海は金色に瞬き、男の顔も奇妙な陰影を刻んでいる。

「だから言ったでしょう、異世界人なんざぁ、化け物だってね」

私は否定できなかった。

イスパニア側も火攻めは想定してバリケードを築いてはいたのだろうが、レジーナ王国側、いやレジーナとファーデルラントの連合が用意した火船、むしろ勇者の特攻はその予想をはるかに上回る火力だった。

空中を飛び回る人影が咆哮するたびに、仕掛け火薬が炸裂し、大爆音を轟(とどろ)かせる。

それは規模から言えば、猫対鼠だった。

だが、鼠は巨大な猫を一匹一匹火達磨にしていく。

イスパニアの陣形は完全に崩れた。

「神よ、我が女王を護りたまえ……！」

レジーナ総司令官が剣を天高く衝(つ)き、振り下ろすとともに総攻撃を叫んだ。

「大砲、撃てえええええええええええええええぇぇえええええええええええ！！！！！」

陣形を崩し、混乱によってばらばらに足並みを乱したイスパニア艦隊に、雨と集中砲火が浴びせられる。

指揮系統をでたらめにしたイスパニア大艦隊に、それに抗する余力はなかった。

あたり一面は火の海。人魚達がぎぃぎぃと悲鳴なのかそれとも船から落ちる男達を我先にと争って掻っ攫う嬌声なのか、判別のつきかねる奇声を上げている。

轟音とともに、赤い光を受けてレジーナの影が甲板に踊る。

遠くで桐島聖涙はまだ戦っている。
まるで自分も死にたいとばかりに、そんな風に見える。
そして、彼女は、唐突に燃料が切れたみたいに、堕ちた。落下した。
イスパニア側は、自分たちを蹂躙した恐るべき異能者を許さなかった。
群がる黒い塊は、砂糖に群がる蟻のようでもあり、私は何故こんなにはっきり見えてしまうのかと口元を押さえた。

いまさらですが。
桐島聖涙には何の恨みもない。
わけでもないが、これはない。
やめてほしい。
誰か、彼女を助けて。
彼女も、私も、何も知らなかったんだ。
知らなくて、そして、そのことをもって、こんな風に蹂躙されていいはずがない。
もう充分。
指先まで震えが広がり、私は立っていられなくなった。
他の連中はどうしたのだろう。
他力本願で恐縮ですが、なんで出てこない。

嘔吐する寸前、私は何事か不穏な様子を感じて、いぶかしげに黒い塊を見やり、目を見開いた。
ごめんね、私は舐めていた。
異能というものを。

「……、く、は。はははははは！」

笑い声が聴こえた。

「……――っはははははっっっ！！！！！！」

突然の異変に、私の内を戦慄が走る。

炎上するイスパニア艦隊。

桐島聖涙を押しつぶしていた最後の寡兵も、文字通り吹き飛ばされ、爆発した。

彼女は、笑っていた。

壊滅的被害状況が拡大するにつれ、イスパニア側の戦意喪失は明らかになりつつあった。

爆風に煽られながら、桐島聖涙の哄笑が喉も裂けよとばかりに暗い海に響き渡っていた。

『悪魔』

イスパニア海兵たちは、そう口々に叫んでいる。

今夜の桐島聖涙ほどその異名がふさわしく似つかわしいことはなかっただろう。

レジーナ側も指をくわえてほうけていたわけではない。

便乗する分には何の問題もないのだ。

「殺せ。尽く殺せ。再起を許すな」

この言葉どおり、イスパニア側は最終的に三万人中二万人の戦死者を出し、三人に二人は死亡した計算となる。特にファーデルラントは、妖精海峡を通って敗走するイスパニア船を執拗に掃討した。

報復戦であった。

このレジーナの海戦における明暗により、大国イスパニアは衰退

を予兆し、世界の海上覇権は、レジーナ及びファーデルラントへと移ろおうとしていた。

## あくま（後書き）

スパイスバザール帝国：大陸ルサーカの中央部に広がる帝国

## せんそう

「はい、おじいちゃん、お茶どうぞ」

私は妖精のお爺さんに茶(チャイ)を出した。

日差しは明るく、大通りに構えた生薬商(アッタール)は、今日も割りとのんびりだ。

知識層(インテリ)から海軍兵隊まで色々な人が利用してくれるが、大体薬を買いに来たのか、雑談しに来たのか、分からない。多分後者だろうということが多い。

この店の本来の主は「めんどいのう」と言って、店の奥で、艶消しパイプをふかしながら隣の金物屋の爺さんと駒取りゲームに興じている。

私はただの店番だ。

ジャンは、静かに暮らしたいと願う私に、この店を紹介してくれた。

有事以外は好きにしていいと言う。

逃げてもいいの、とは聞かなかった。

愚にもつかない質問だ。

片腕、歯抜けでどこに逃げるというのか。

ああ、ちなみに歯も義歯を作ってもらった。

この国は腕のいい職人が多いのだ。

「うまいのう。うまいのう。サツキちゃんは、お茶をいれるのが上手じゃのう」

「あはは、そりゃあどうも」

このお爺さん、ただで茶を飲むために言っているに違いない。

ここは喫茶店ではないのだが、商談する際に茶をふるまうのがこの世界では一般的だ。

「サツキちゃん、聞いたかのお」

大体、このお爺ちゃんの世間話はこのフレーズから始まる。

はいはい、と聞き流すのが常なのだが、今日は違った。

「ファーデルラントが、東ルサーカにあるレジーナの商館を襲撃したそうじゃ」

こと、と茶器を置いて、私は「へえ」と相槌を打った。

「制海権、貿易圏拡大を巡るレジーナとファーデルラントの利権争いも目に見えんように水面下で激化しとったが、これはあからさまに過ぎるのう。

これはのう、ただの商館襲撃ではない。

東ルサーカ支配権に目に見えぬ楔が穿たれたといってもよい、象徴的な事件じゃよ」

このお爺ちゃん、引退前はなんとかかんとか宮廷顧問をしていたらしく、語る内容は政治的な小話が多いが、今日はずいぶんとびきりのネタだ。

「……レジーナと、ファーデルラントの間では協定が結ばれていたはずでは？」

「うんうん、そうなんじゃよ。これは、ただ協定が破られ、結果商館がひとつ失われただけを指すのではない。激化する東ルサーカでの貿易におけるレジーナの排除、まさにその象徴ともなる出来事なんじゃよお」

お爺ちゃん、語り出したら止まれない。
思わず脳裏に標語が浮かぶ。

「ファーデルラントは、レジーナに牙を剥いた、いえ、その牙を隠そうとしなくなった、ということですなあ」

ぎょっとして振り返れば、ジャンがにやにやとした笑みを浮かべ、相変わらずの派手な帽子のつばを持ち上げてみせた。

「協定破りは外交問題にして賠償金を求めるべきなんじゃないの？」

私が半ば諦観交じりに尋ねれば、ジャンはうんうんと頷き、それから酷い笑い方をした。
獲物をなぶるような、そんな笑い方だ。

「そうですねぇ。そうなるでしょうねぇ。でもまあ、このお礼は必ずさせてもらうことになりますよ」

吊りあがった口元に、鋭い犬歯が覗いた。

「同じ顕現派の国でも、舐めた真似をしてもらっちゃあ、困ります」

ああ、もうきっと決まっているのだろう。
そう、この東ルサーカのレジーナ商館襲撃事件は、同じ顕現派の国ということで、比較的友好関係にあったレジーナとファーデルラントの関係悪化を予兆させる事件でもある。
ブルゴーヌ、イスパニアといった現界派の国に対し、同じ教義である顕現派であるファーデルラント。
しかし、制海権と世界貿易を巡って熾烈な競争を繰り広げること

となったファーデルラントより、その全権奪取を虎視眈々と狙うレジーナ国内の一般論が水位を増す限り、衝突はいかんとも避けがたかったのである。
レジーナは決して主に牙を剥いた飼い犬を許さない。
飼い犬に手を噛まれた主のやることは、犬の処分だ。
逆にファーデルラントは、レジーナを主と仰いだつもりなどなかったのだ。
また、戦争だ。
今度は、私も『彼ら』も無関係ではいられないだろう。
私はレジーナに保護されている。
『彼ら』はファーデルラントの生きた兵器だ。
魔王は発生し、すでにしとめたと聞く。
代わりに、双子が死んだらしい。
遠く噂話を聞き、私はこっそり泣いた。
この地獄のような世界に、たった六人しかいなかった同胞が、また死んだのだ。
魔王を倒せば帰れるはずだと言っていたが、八王子夜音と桐島聖涙は残ることを選択したのか。
それとも、最初から帰れない仕様だったのか。
もう分かりはしない。
そして、今度のレジーナとファーデルラントの正面衝突において、彼らが遊ばされているとは到底思えない。
きっと引っ張り出されてくるだろう。
だって、私はこの男に舞台に引きずり出されようとしているのだ。
向こうがそうしないだなんて、どうしてそう言える？
同胞で殺しあえなんて、本当に気がきいているよ。

レジーナ商館襲撃より、一月後――東ルサーカ、ファーデルラント領ロロイカ。
４隻のレジーナ戦艦が、ロロイカ沖に不気味な姿を現した。

続く異様な大型戦列艦に、人々は息を呑んだ。

船名”女王の栄光”、の名を持つ第一級戦列艦。

イスパニアが海上覇権を握っていた時代にはまさに私掠船の『寄せ集め』であり、むしろ存在していなかったとされるレジーナ海軍だが、イスパニアの艦隊を廃滅せしめ、その制海権を脅かすにいたっては、造船技術も飛躍的に進歩を見せることとなる。
この『女王の栄光』も、同時に勢力躍進を見せたファーデルラントに対抗する形で、グロリアーナの命により国威をかけて建造された。
当世あらゆる船を凌いで最高の武装、攻撃力を持ち、また船体は黄金で豪華に装飾されたことから、ファーデルラント海軍のみならず敵国をして別名『黄金の悪魔』と讃えられた恐るべき大型戦列艦である。
しかし、現在、最たるものは百門砲を備えるような大型戦艦により火力において他国を圧倒せんとするレジーナも、後の戦争におい

てファーデルラントに苦戦を強いられるようになるのだが、その嚆矢となったのは、この日のある軍事行動が発端だった。

天を鋭く突き上げんとする3本のマスト、金箔の化粧を施された巨大船体。しかし、それは悪魔の業を持って作られた。

レジーナの提督は、ただ一言命令した。

「……ファーデルラント領ロロイカを占拠せよ」

我が女王のために、な。

この命令の発端となったレジーナ商館襲撃事件。

それにより、レジーナは東ルサーカ貿易において、後退し撤退せざるを得なくなった。

まさに貿易構想図の塗り替えを象徴する事件だった。

また、東ルサーカ貿易を独占するファーデルラントに、レジーナ国内の反ファーデルラント感情が高まりをみせていた。

ファーデルラントとの関係は急速に悪化し、もはや戦争は避けて通れないと見たレジーナは、報復戦を開始したのである。

それが今日この日。

遠く東ルサーカでの戦端は、本国に遡及する。

レジーナ・ファーデルラント戦争の火蓋は切って落とされたのだった。

## せんそう（後書き）

東ルサーカ：ルサーカ大陸の東の地方　そのままである。

## いじょうせいとるいじせい

レジーナ船籍のファーデルラント領ロロイカ占領により、その火蓋を切って落とされたレジーナ・ファーデルラント戦争。

初戦より、ファーデルラントはレジーナ船の火力の前に敗北し、苦い自省をみた。そのため軍備を刷新し、勇者を投下。

レジーナ海軍を相手に大善戦することとなる。

三日間の海上交戦において、ファーデルラント相手に膝をついたレジーナは想定外の敗北に辛酸を舐めさせられた。

その上、敵は身のうちにあった。

――疫病。

腺ペストの恐るべき流行に、レジーナは7万人の人命を失う。

――続く首都大火。

首都は五割を全焼し、レジーナの政治経済生命線は麻痺した。

大半の軍船はドッグ入りし、レジーナ海軍は強制的休眠状態へと陥る。

この好機を逃すファーデルラントではない。弱ったレジーナを前に、たちまちレジーナ海軍を突破して電撃のごとく攻め入り、本土大河を遡上してレジーナの首都に砲撃を浴びせた。

鉄壁の守りを誇るレジーナにとって、本土上陸を許しなお蹂躙されたのは、これ以上ない屈辱である。

かつて大国イスパニアの大艦隊ですら、その一片の土を踏ませはしなかった。

ほんの少し前までイスパニア属領であり、その独立を密かに支援

した新興国ファーデルラントにこのような内部への侵略を許すことは、レジーナ側にとって耐え難いものだった。

空の色は赤とも黒ともつかぬ酷い色だ。
何もかも焼け出されてしまった。
店の主人は復興にかかるため、ギルドに出ずっぱりだ。
まさかの首都防衛戦。
この衝撃に、女王は儚い人となってしまった。元々、生きているのが不思議なくらいに高齢であったらしい。
その指名により、血縁であるクリストファー何某が王位に立つと言う。

焼け出された風景に、寺院の重苦しい鐘の音にあわせて、周囲の教会があえぐようにその音を唱和する。

レジーナ女王グロリアーナは、ファーデルラント本土上陸の知らせを受け、危篤状態に陥り、同日眠るように永眠した。
女王崩御。

その最期は、許しを請うものであったという。

――さらばじゃ。さらば、我がレジーナ。
――そして赦せよ。
――この恐ろしい時にそなたらを残して行くことを。
――これからを託して去る我が身を。
――いかような時代がくるとも知れぬ。ブルゴーヌ。イスパニア。憎むべきファーデルラント。
――きゃつらは猛禽のように我が国を狙っておる。
――どうか赦せよ。

「女王は崩御した」

その知らせが駆け巡るやたちまち、控えていた侍女たちの間では、はっと声を呑む者、悲痛なすすり泣きを始める者、両者に溢れた。燦然と輝く太陽を失って、彼女たちは哀しみに涙した。

私は混乱していた。

ジャンは酷い顔色だったが、意気消沈する間もなくファーデルラントの砲撃音は止まない。

彼は己の職務には忠実であった。

周囲の混乱を尻目に、青白い顔で働いている。

彼の女王への傾倒ぶりは見ていて異常なほどだったし、私はかける言葉をもたなかった。

そのことを、私は苦痛に感じていた。

そんな自分が信じられなかった。

こんな男を慰めたい、そうできない自分が無力であるなどと、到底正気の沙汰とは思えない。

だからだ。

迂闊にも、私は現場の混乱の間隙を突くように、生薬商（アッタール）の店までふらふらと出歩いて来てしまった。

焼け出された店の様子に愕然としてしまう。

夕方が来て、夜の帳が下りる前に、一度砲撃は止んでいる。

明日はまた騒がしくなるだろう。

店の中に入り、商品を手にとっては確かめる内に、背後で人のけはいがした。

振り返り、不審者に悲鳴を上げようとした口元を押さえられる。

「――静かにして。佐々木さん」

そう、驚くべきことに、その不審者の正体は、八王子夜音だった。
私は目を見開き、喉を鳴らした。
「叫ばない。約束できるなら、今から五つ数える間に瞬きを三回して。行くよ。一、」
私は慌てて三回瞬きした。
「ありがとう。手を外す」
ゆっくりと解放され、私は改めて彼を仰いだ。
酷い。
同一人物とは思えない、酷い顔だった。
傷を負っているわけではない。
人は、その人生によって、これほど人相が変わってしまうのかと、その実例を見る思いだ。
「お互い、酷いかっこうだ」
八王子は疲れたように、そして彼なりにユーモアをこめたつもりなのか、おどけたように苦笑した。
そしてぼろぼろと涙を零した。
言葉はいらなかった。
私も泣いていた。
かつて彼に感じた苛立ちは、もはやなかった。
「ごめん。あまり時間がないのに。見かけた時は本当に現実か疑ったよ。生きていてくれて、本当によかった」
私は頷いた。今は敵同士だろうと思ったが、何をもって敵なのか

分からなくなってきた。

「魔王、倒したって？　でも和久井さん達が……それに帰れなかったの？」

「……いや、魔王は」

八王子夜音は言葉を濁した。

私は、もしかして、と質問を飲み込んだ。

もしかして、魔王を消滅させていないのではないか、などと。

そもそも、発生自体起こっていないのではないか、などと。

待て。

では何故双子は死んだ？

それすら嘘？

対立している以上、答えてもらえないかもしれない。

何故なら、レジーナとて、グロリアーナ女王が崩御したことも、現在国民には伏せられている。

これ以上士気を殺ぐことは自殺行為だからだ。

ファーデルラント側が、魔王を消滅させていないことを喧伝するはずもない。

「佐々木さん、正直に言うよ。魔王は倒せていない。倒せなかった。だから、僕らは戻れなかった」

私はこの時、八王子夜音がずいぶん、危ういほどに譲歩してそのことを教えてくれたと思った。

だからそれ以上追求しなかった。

「……佐々木さん。ファーデルラントに来る気はないかい？」

八王子夜音は真摯な目で尋ねた。

「無理」

私は即答し、彼は「どうしてもかい」と重ねる。

この人、もしかして何も知らないのか、と私はかつての苛立ちがぶり返した。

「八王子君、ファーデルラントが私と大輔に何をしたか、知らないの？」

「……どういうこと」

私は全てを説明した。左腕も義手を外してみせた。

八王子夜音のショック状態は、言語に尽くし難かった。

彼はよろめく足で椅子に座り、しばらく無言だった。

「ごめん。ちょっとお互い情報を出し合って整理しよう。君の知ることと、僕の知ること、すり合わせた方がいい。この世界の異常性、類似性について僕もずっと考えていた」

私は八王子夜音の言葉に引っかかった。

「待って。異常性は分かるけれど、類似性って？」

彼は、むしろ驚いた風に私を見上げた。バランスが悪いので、私も椅子に座る。

そして、彼の言葉に、今度は私が驚愕することになる。

「佐々木さん、気づかなかったのかい？　この世界、できの悪い僕らの世界の模造品（レプリカ）だよ」

「は？」

「異常なのは、魔王や召喚といったシステム。

類似しているのは、歴史だ。

そっくりそのままじゃなくて、奇妙に年代が捩れて、本来死んでいるべき人物がまだ生きていたり、あるいは死んでいたりするけれど、この世界は地球だよ。

もう一つの地球といっても過言じゃない」

ちょっと待って。

待ってよ。

ここが地球？

「本当に気づいてなかったの？

レジーナはイギリス。

ファーデルラントはオランダ。

イスパニアはスペイン。

オスマン帝国に該当する国もある。

多分、ブルゴーヌはフランスに該当すると思う。

美食王ルネーは太陽王ルイによく似ているよ。

ファーデルラント側エミリオ王太子暗殺事件は、恐らくカトリック側狂信者によるオランダのオラニエ公暗殺事件にあたると思う。

先のレジーナ対イスパニアの艦隊戦は、どう考えても無敵艦隊アルマダ戦だ。

死者数の一致は分からないけれど、結果は酷似している。

この海戦勝利で、イギリスは世界の海上覇権を握るにいたるその基礎を築いたはずだったよ。

それにレジーナ商館襲撃事件は、一六二三年、東南アジアの商館アンボイナ事件。
今回の海上覇権争いは、第一次英蘭戦争から第三次英蘭戦争が混ざっていると思う。
あと、レジーナ首都大火は、ロンドン大火で間違いないよ」

待って。
本当に待ってよ。
私地理と日本史専攻なのよ。
中学校時代の世界史は横文字が駄目で壊滅だったし、空白の三年間だよ。
気づかなかった。
全然、気づかなかった。

「恐らく、レジーナのグロリアーナ女王は、テューダー朝のエリザベス一世だ」

がん、と頭に衝撃があった。
そうだ。
映画で見たことがある。途中で寝てしまったから、断言できないが、なんで気づかなかった。
そのまんまじゃないか！

「レジーナ女王は、イスパニアに国家半公認の海賊行為を働いて、配当率数千パーセントにもあたるかなりの収益を上げたときくけれど、これもエリザベス一世の『私拿捕船（しだほせん）』に類似する。
これは、敵対国家商船捕獲の特許を得た、民有武装船のことだよ」

私はもはや言葉が出なかった。八王子夜音がいなければ、私は何も気づかなかっただろう。

だけど、と彼は続ける。

「ただ、彼女は英蘭戦争時には生きていないはずだ。
彼女がイングランドの黄金期を築く嚆矢となった一五八八年の無敵艦隊アルマダ戦は、少なくとも一六五二年の第一次英蘭戦争と六十年くらい彼女と時代がずれている。
そもそも、彼女の在位、没年は一六〇三年だ。英蘭戦争時に生きているはずがない。
本来なら、テューダー朝は、エリザベス一世で最期の幕を閉じているはずなんだ。
スコットランド王をイングランド王国王に迎えて、すなわち両王国において、同じ人物を君主に頂く同君連合の成立となるスチュアート朝が開けていないとおかしい。
ごめん、僕もうろ覚えな部分があるから、間違ったことを言っているかもしれない」

ざわざわと這い上がる何かに、私は口元を押さえた。

「待ってよ。待って。模造品って、じゃあ作成者は誰？」

八王子夜音は首をふった。

「分からないよ。もしかして宇宙ひも理論とか、平行世界なのかもしれないとか、愚にもつかないことを考えたし、それを解き明かす意味についても散々考えた。
でも、一ついえることがる」

私もはっとした。
彼は私が気がついたことに気がついて、頷いた。

「この世界は、恣意的な世界だ。何故なら、君も、恐らく聞いたはずだ」

そう、託宣の声を。

あのシステマチックな声を。

――ろーるぷれいしてください。

そうあの声は言った。

「……『ろーるぷれいしてください』って、まさか」

そのまさかだった。

そうかもしれぬ可能性に、私は身体の震えが止まらなかった。

## かんげい

ロール-プレーイング【ｒｏｌｅ－ｐｌａｙｉｎｇ】
実際の場面を想定し、架空の状況下において、さまざまに役割【ｒｏｌｅ】をふられた複数の人間が、疑似体験を通じて理想のシナリオを反復学習する方法である。
あるいは、ロールプレイングゲーム【ｒｏｌｅ－ｐｌａｙｉｎｇ ｇａｍｅ】、通称【ＲＰＧ】の名前で知られるそれの方が、認知が高いかもしれない。
こちらは、参加者が各自に割り当てられたキャラクター（プレイヤーキャラクター）を役割演技（ロールプレイ）するゲームの一種である。
ライフパスの設定すらふられた仮想の人格を演じ、互いに協力しあうことで、架空の状況下に設定された遭遇する試練・事件（イベント）を乗り越えることを目的とする。
この試練の内容は、その世界観、シナリオに沿う形で設定され、何でもよい。
冒険、ミステリーを解き明かす、戦闘する、あるいは恋愛成就。
参加者はそのライフパスにそって、割り当てられたプレイヤーキャラクターを高度に役割演技（ロールプレイ）することで、ゲーム自体の臨場感は増し、高く評価されることになる。
なお、本来はアメリカ発祥のテーブルゲームであり、【ＴＲＰＧ】の名称で知られる。

例えば、と八王子夜音は切り出した。

「架空の舞台設定を行う。
これは現実に沿った形の国を設定する。
そこに、プレイヤーを投下する。しかも、複数人。これは仮にパ

ーティと呼ぼう。
彼らの介入により、【歴史】はある程度史実から【改変】されていくだろう。
しかも、一度や二度じゃない。
過去に何度もパーティの召喚は行われたという。
ＴＲＰＧでいうセッションの度に、歪みは蓄積される。
この結果が、現在のこの世界の姿じゃないか――」
「ちょっと待ってよ！」

私は机の上に拳を叩きつけ、感情の高ぶるままに八王子夜音の話を遮った。
荒い息の下、落ち着け、と何とかこわばる肩を下ろす。

「――ごめんなさい。感情的になって」
「いや、気持ちは分かるよ。僕も何度も何度も考えて、結局分からないし、こんなこと現実と認めたくないと思う推測しか立てられなかった。僕も何度も自分で考えては否定した内容だ」
「八王子君の説は、この世界が何らかの架空の舞台設定を行った世界、仮想現実の世界ってことよね」
「いや、一つの考えでしかないよ。ただ、あの『声』を考えると、そういう推測もできるんじゃないかと思っただけだ」

八王子夜音は決して断定せず、一つの考えであると告げる。
確かに、思い込みはよろしくない。
何かを見過ごしていないか、考えなければならない。

「私は、この世界が架空、あるいは仮想のものなのか、それともきちんと存在する世界なのか、現状では判断がつかないと思う。
ただ、誰かの『恣意』により、歪みを発露している世界だというのは間違いないと思う。

干渉を受けているのは、私たちというより、世界そのものだもの。
悪意すら感じるけれど、これも――」

私はうまく言葉にすることができなかったが、八王子夜音は、私よりもずっと語彙表現には長けていた。

「悪意も、はっきり言って、これは僕らの視点レベルで感じるものでしかない。
ミクロ視点で感じる悪意は、マクロにおいては、何の意味もないってことがあると思うよ。
だから、一概に何かが僕らを害そうとしている、という結論は早計だと思う。
ただね、何がしかの『恣意』を受けたこの世界で、やっぱり何がしかの『目的』があり、それは僕らにその『目的』を遂行させようとしているように感じるんだよ。
そして、それは別に僕らじゃなくてもいいというアバウトさも感じる。
駄目なら、別のパーティでもいいんだ。
そんな、現行のパーティによる試練達成を目的としていない、杜撰なシナリオを感じるんだよ」

そう。
八王子夜音のいうとおりだった。

あの『声』は、心底システマチックで、そして最後ふざけていた。
何の真剣みも感じられない。
何故なら、『私』でなくてもいい。
『私たち』でなくてもいい。

プレイヤーを世界に投げ込む。

セッションさせる。
目的は不明。多分魔王を倒すこと？
失敗する。
じゃあ、次。

そのくらいの適当さしか感じられなかった。
はりきってろーるぷれいしてください？

ふっざけんな！！！

そしてこの世界が紛い物？

それこそふざけるなと言いたい。
紛い物の世界で人が死んでたまるか。
ならば大輔を今すぐに帰せ。そしてゲームは終了だ。元の世界に帰してくれ。
プレイヤーに離脱を許さないゲームなんて、クソゲーどころか版元を訴えて勝つレベルのお粗末さだ。
この世界は、この世界に私がいる限り、私にとって本物なのだ。
痛みも、苦しみも、喜びも、全て真実なのだ。

「八王子君、『恣意』に沿うのは癪だけれど、やっぱり一度魔王を倒さないといけないと思う」

まずは、試してみるしかない。
役割演技（ロールプレイ）とやらが、何を演じさせ、何の目的を達成させようとしているのか、はっきりいって不明としかいいようがない。
しかし、確実に一つ現実世界と異なる点と言えば、この魔王だ。
違和感の正体を一つ一つ潰して行くのは、通常のゲームでも普通の手段だろう。

「……そうだね」

八王子夜音はこの点に触れると、歯切れが悪い。
私も無神経だった。
一度彼らは戦い、多分敗れた。
双子は死んだのだ。

「ごめんなさい、無神経だった」
「いや、それはいい。ただ、」

この時、八王子夜音は何かを言おうとしていた。
でも、その機会は奪われた。
もはや太陽は最後の断末魔を上げ、夕闇が押し寄せる時刻。

突然篝火が辺りを照らす。
一つではない。
複数の、いや大量の明かりが私たちを照らす。
進み出る人影は、ひょろりと高く、長い影を伸ばした。

「いやはや、こんなに簡単に引っかかるとは、私の作戦も捨てたもんじゃあないですねぇ」

ジャン。
悲鳴を飲み込んだ私は、慌てて八王子夜音に視線を走らせたが、彼の表情に全てを悟って完全に『積んだ』ことを悟った。

アンチ・プレイヤー。
盾。
私は、まだその力をうまく制御できないでいる。

つまり、無差別で、効果は持続的。
だから、現場に連れまわされるのだ。
八王寺夜音は、レジーナの精鋭に囲まれた現在、ただの普通の人間の力しかもっていない。
四方八方から突きつけられる得物に、彼は何の抵抗力も持っていない。

「よおおおおこそ、無力な勇者殿。レジーナは貴方を歓迎しますよお」

両手を開き、ジャンの言い方はいやらしいものでしかない。
笑顔ではあるが、その目はまったく歓迎ムードではない。
ジャンのばかやろう。
同情した私が馬鹿だった。
こんな男を慰めたいだなんて、頭が沸いていた。
そして、意外と元気そうで安堵しているなんて、更に頭が爆発しているとしか思えない。
だから、私は。
護身用短剣を取り出し、ぐっと自分の喉元に突きつけた。
ジャンの顔に、僅かな動揺が走るのを認め、要求する間もなく、

「いいよ、佐々木さん。貴方がレジーナの責任者かな？　僕は八王子夜音と言います。ファーデルラントからレジーナに亡命を希望します」

いきなり爆弾発言を投下した。

**えらんでね！**

八王子夜音は言った。
ファーデルラントから、レジーナに亡命を希望する、と。
空気、読めよ。読める空気召喚、と思った私は悪くない。
短剣を下ろし、唖然とする私を他所に、ジャンはしばし考える風にわざとらしく眉根を揉み、
「いやー、おっどろきました。ユリア姫は、貴方に懸想していると聞いてますよお。こーんな簡単に裏切っちゃっていいもんですかねえ」
そういう人を信用できますかねえ、と肩をすくめる。
「僕らは、元々魔王を倒すために呼ばれたはずです。人の争いには関わりませんし、関わるべきじゃない」
八王子夜音は、はっきりと告げた。
「ファーデルラントでは、本来の目的を逸脱して、僕らを『救世主』として見る風潮が蔓延しています。そして、それを強制する勢力がある。実際に僕らの仲間の一人は、『救世主』として振舞っている。だけど、僕はそれを歓迎していません」

だから、と八王子夜音は言う。

「腹を割って話します。異分子（イレギュラー）でしかない僕らの内、『戦力足りえる者』を、各国に一人ずつ。余剰を作らない。ちょうど勢力均衡すると思うんですが、どうでしょうか」

どうでしょうかってどうなのそれ。

私はジャンと八王子夜音を交互に振り返ったが、どうなるのかさっぱり分からない。

「獅子身中（ししんちゅう）の虫を飼うつもりはないんですがねえ」

「首輪なら、すでに確保しているでしょう」

八王子夜音の言葉に、ジャンは私の方へ一瞥を寄越し、「ま、いいでしょう」と手を振った。

途端に、円陣を組んで狙いを定めていた矢尻が下げられる。

交渉次第で、ハリネズミにされていたかもしれないと思うと、誠にぞっとしない。

「八王子君といいましたか、貴方かわいくないですねえ。もっと歳相応にしてくれると、おじさんは安心するんですがねえ」

「恐縮です。僕もこちらに来て、色々ご教授いただきましたので。ところで、お名前お伺いしても？」

「ジャンとお呼びください。しかし、ああーかわいくないったら。さつきさんが対偶でかわいく思えてきました」

どういう意味だ。

私がアホだと言いたいのか。

大体、八王子夜音は、何々会社の息子だった筈だ。社名は確かそ

のまんま八王子だったっけ？
家電から何からとにかく何でも作るぜ！　な大会社で、大輔はお前の会社のなんとかかんとかのファンだったぞ。
齢同じ十代ではあるが、バックグラウンド上お前帝王学ばっちりだろう。庶民と比べないでいただきたい。
これが多少名の通ったミッション系私立高校の恐ろしさだ。隣の席の彼は御曹司。なんのケータイ小説だよ、本当に。
思考が逸れがちではあるが、何この二人馴れ合いの会話しているわけ、と私は正直腐る思いだった。
いや、それはともかくとしてだ。
確かに、戦場たる現場で八王子夜音の姿を見たことはない。ファーデルラントの意思により、投下されたのは、桐島聖涙（きりしまあくあ）のみ。
つまり、人対人の争いに関わることを、八王子夜音は拒否し、桐嶋聖涙は承諾したということだろう。
もしかすると、これは茶番劇ってやつなのかもしれないとすら私は疑いを深めていた。

「佐々木さん、そこまで僕も計算してないよ」
「心の声を読むな」
「駄々漏れだったからね」

ああ、段々腹立ちというやつを思い出してきたような気がする。この手の八つ当たりは新手のものだ。

「……ジャンさんは、多分、ファーデルラントの現状をよく知っていたんだろう。彼はフランシス・ウォルシンガムみたいな存在なのかもしれないね」

八王子夜音は私に言うというよりは、ほとんど独り言のように言った。

「フランシス・ウォルシンガムって？」
「エリザベス一世の重臣で、いわゆるスパイマスター、英国諜報機関の嚆矢となった人だよ」
ああそう、ダブルオーセブンの発端ですか。ずいぶんありえそうですね。似合いすぎて嫌だ。
「まあ彼も、本来生きていないはずの人だけれどね。女王には功績の割に、毛嫌いされていたと言うし」
この時、彼は詳しく語らなかったが、後にフランシス・ウォルシンガムという男は、実に不遇な人生を送ったのだと知ることになる。
私財を投じて各国の諜報活動を行い、当然ながら莫大な借金に苦しむこととなるが、女王は彼の合理性と冷酷無慈悲を嫌悪していたために、その苦しみを無視したという。
国に尽くして病に倒れ、失意の内に死んだ男。
その彼とジャンを重ね合わせると、実にぞっとしない。
相槌を打とうとして、ふと落ちた影に視線を上げると、ジャンの奴が相変わらず底の読めないにやにや笑いで目の前に立っていた。
「な、何ですか」
私は気おされ、僅かに仰け反った。
そして、悲鳴を飲み込むことになる。
奴が、いきなりむき出しの短剣を素手で握り締めたからだ。
ひい、と喉が鳴り、私はその手の内から零れ落ちる赤い液体に視線を釘付けにされた。
「いいですか、二度とこういう真似はしてはいけません。でないと、

とても痛い目に合わせますよ」

現在進行形で痛い目にあっているのはお前だろう。

私はとにかく必死にがくがくと頷き、頷いて、手当てをさせて欲しいと頭を下げた。

やはり、全然冷静じゃないんだ。

レジーナは太陽を失った。

ジャンにとっても太陽だった。いや、一番必要としていたのかもしれない。

この世界が偽物かもしれないだなんて、やっぱり考えられない。

こんなにも、皆自分の『物語』を持っている。

誰かは、他の誰かを必要としているし、失えば哀しいし辛い。苦しい。

この冷静でくえない男をもってしても、こうして混迷を見せているではないか。

太陽を失って、暗いこの家路を辿る道を、人々はどうやって帰りつくのだろう。

そして、私たちは。

どうやって家路を見つけ出せばいいのだろう。

今は、光明すら見えない。

＜彼女のリテイク＞

もまたその答えを予想していたかのように苦笑する。

「だろうね」

「じゃあ、私も聞くわ。あの酷い国じゃなくて、八王子君たちも、ファーデルラントに来る気はない？」

「……無理、かな。なんだかんだいって、人の縁ができてしまってね」

そうだろう。

最初は軽い気持ち、そして義憤、やがて人と地の縁に縛られ、抜け出せなくなる。

「戦争なんてやめればいいのに」

子供のような気持ちで言った。

むしろ、魔王とやらがもっと巨大でこの大陸上すべてに脅威だったらよかったのにとすら思った。

人と人が争う暇もないくらに、脅威が覆えば、皆協力せざるを得なくなる。

中略

――あなたはしんでしまった！　えらんでね！

↓こんてぃにゅー（あきらめない、ぜったい）　＜

↓裏こんてぃにゅー（もうつかれた？　わすれたい？　せかいのいちいんになりますか？）

――受諾しました。はりきって、ろーるぷれいしてください！

＜彼女の二回目＞

「なんで？」

どうしてこうなったの。
死んでる。
死んでしまった。
今更、どうして思い出させるの。
は？　イベント？
何なのこれ。
何なのよこれはあああぁあああああああああ！！！

中略

――あなたはしんでしまった！　えらんでね！

↓こんてぃにゅー（あきらめない、ぜったい）　＜

↓裏こんてぃにゅー（もうつかれた？　わすれたい？　せかいのいちいんになりますか？）

――受諾しました。はりきって、ろーるぷれいしてください！

＜彼女の？回目＊＞

「赤も@ねｒｊｒｓ@ｐこいじゅｇｙｆで」

＊　現行です。

## スタート前欄外上等（前書き）

グロテスクで性的な殺人に係る表現があります。
この話はフィクションです。実際の人物、団体、事件、国とかは一切関係ありません。

## スタート前欄外上等

連邦捜査局、略称ＦＢＩ。
アメリカ司法省の下部組織であり、国家警察の存在しない米国おける連邦レベルの捜査機関だ。
その任務内容は、州境を越える、もしくは複数の州をまたがる犯罪や、組織・麻薬・知能・凶悪・テロ・諜報といったその他重大な連邦犯罪の捜査にあたる活動である。
なお、ＦＢＩに８０年代新設されたのが連続殺人や連続爆破などの凶悪犯罪のデータを収集する凶悪犯罪分析センターであり、この一部門となる行動科学課（ＢＳＵ）はいわゆる日本での捜査一課もしくは米国州警察の殺人課に置き換えることができる。
日本では行動科学課では分かりにくいため、「心理分析官」の訳で知られたプロファイリング専門課でもある。
現在は、ＢＳＵは捜査支援課（ＩＳＵ）と改名され、国立暴力犯罪分析センターの一部門として、バージニア州クワンティコにあるＦＢＩアカデミーの建物内にそのオフィスを構えている。
「佐々木さつき」がＦＢＩに在籍するにいたった経緯（いきさつ）は、紆余曲折ではあったものの、いたってシンプルな理由だった。
警察官になりたかったが、日本にいたくなかった。
それだけである。

プリンターから出力したばかりでまだ熱い用紙の束を片手に、どろどろの濃いブラックコーヒーを胃に無理やり流し込む。不味い。
胸糞悪くなるような資料に目を通しながら、コーヒーの不味さもあいまって眉間の皺がもう一生とれなくなりそうな予感とともに、ますます深く刻まれるのを感じた。たぶん今近所のクソガキどもが自分をみたら、生意気いう暇もなく裸足で逃げ出す勢いで目つきも人相も凶悪になっているだろう。

何しろ48時間ぶっちぎりで寝ていない。耐久レースをしているつもりも、自己の限界に挑むつもりも毛頭ないんだが、そろそろ洒落にならない幻覚が見えてきそうでヤバイ。
それもこれも今唾棄したいような気分で目を通しているファッキンな一連の資料のせいだった。
シリアル・キラー（連続殺人犯）。
5人連続で殺された。あるいは発覚していない、同一人物の犯行と特定されていないだけで、もっとかもしれない。
最初それぞれの事件は別件であり、一つの殺人で被害者は一人とされる単独殺人と思われていた。
それが連続殺人とされたのは、ある特徴の発覚とともに、判明している5人だけでも目を覆いたくなるような同一の惨状を呈していたからだ。
異常な快楽殺人の特徴を。
おまけに、と紙を人差し指で弾いた。

「犯人は恐ろしく頭が回りやがるってわけね」

あれだけ現場に「儀式」の痕跡を残しながら、犯人特定の証拠を一切残していない。
性的（快楽）殺人は捜査や犯人逮捕の決め手となるような物的証拠を残しやすいが、この犯人はおよそ手抜かりというものがないのだ。犯人は被害者に特定のポーズをとらせたり、オーバーキル（被害者の身体に必要以上の損壊を与えること）を行うことによって、捜査陣にその犯人像の手がかりとなるような犯行状況を残している。
だが、自分のホームグラウンドを避けてか、州をまたがって行われた殺人のために、州警察においてはその特徴をすぐには点と点を結ばせるまでにいたらなかった。
その点で大いに遅れをとったと言わざるを得ないが、何しろ、レイプ事件は嘆かわしいほどの件数、それが高じてレイプ殺人もまた

かなりの件数で起こっている。数ある事件の中で関連性を見出すには、物的証拠や距離的なものが大きくあるが、この犯人は州際殺人による地理的目くらましを有効に活用してくれたのだ。
5人目が発覚して、ようやく同一犯の犯行、連続殺人と認定されたのだが、それまで期間が長すぎた、と苦々しく資料を睨みつける。
これは犯人の知能の高さを示すものだった。

「犯人は冷静かつ冷酷、狡猾で知能指数が高い。他人の苦痛に共感ができず、むしろその苦しむ反応を見て性的興奮を覚える典型的セックスサディスト、か」

資料を手にしたまま腕で瞼を覆い、背後に背を預けたため、ぎ、と椅子がたわむ。身体は弛緩してリラックスする体勢に入っていたが、思考はとりとめもなく渦巻き、分析を止めることはなかった。
犯人は、秩序型の典型的セックスサディスト。
――それを裏付けるものとして、特に注目すべきは被害者の身体に行われた呪文のようなペイントがその生前に……
そう、被害者は必ずレイプされている。
だが、その性別も年齢もバラバラで、レイプの仕方は残虐かつ異常を極めた。
さらには、州を越えて殺人は行われる。

身体に加えられたオーバーキル（必要以上の身体破壊行為）。身の毛もよだつ切断行為。件数を重ねるたびに、エスカレートしていくそれ。
持ち去られた衣類・装身具、髪、もしくは身体の欠損は犯人の「記念品」蒐集なのか、それとも殺人を完璧にやりおおせた自分への「トロフィー」なのか。遺体に施された「儀式」。一連の「署名」。
プロファイルは万能でなく、犯人逮捕の手段でもない。
膨大なデータから統計や臨床により犯人像を演繹し、少しでも捜

査の輪を縮めようとする捜査支援のひとつの手法に過ぎない。
たった一人ぼっちの日本人捜査官は、不眠ぶっちぎりのまま、どろどろのブラックコーヒーを胃に流し込む。
犯人の頭の中には生々しい妄想が現実と不可分になっていて、被害者は犯人のその妄想に最も近い人間が選ばれているはず。

果たして殺人のテーマは？　犯人は典型的セックスサディストなのか？
そして次の殺人のターゲットは・・・・・・？

レイプ？
直接体内に射精した痕跡はない。
被害者の体内には女性の場合乳房が切り取られた上に無機物が挿入され、男性の場合は自分自身の切り取った性器がアナルに押し込まれていた。

「本当に犯人はセックスサディストなのか？」

コーヒー片手に自問自答するが、しっくりこない。ぶつぶつと私は独り言を続けた。

「まるで、性（セックス）を憎んで、否定しようとしているみたいだな」

壁に向かって話す。

「乳房を切り取る行為は、女性性を否定することにもつながるし、女性器に肺を突き破るほどほうきを挿入したのは制御しきれない性欲の暴走の結果というより、むしろ女性への憎悪を感じさせる。
それに、男性シンボルを切り取って尻につっこむっていうのは、性倒錯だ。性をおちょくっているし、ある意味犯人なりのユーモア

の発露かもしれない。
一見快楽殺人には見えても、何か違うんだよ。
そこにあるのは、女性のシンボル、男性のシンボルへの徹底的な貶め。
つまり犯人は、」

他人の痛みを自分の痛みのように感じることができない。あるいはコンプレックスの発露？　復讐？
それは誰のことだ？

自分のことじゃないのか？

たとえば。
私は。
身近な人がこんな目にあったとして。
想像だけで吐き気がする。
捩じ切れるように怒るだろう。
憎悪に身を焦がすだろう。

果たして。
他人に？
自分に？

おそらく、自分自身の無力と甘さに嘆くだろう。激怒するだろう。
憎悪するだろう。
だがきっとできないのだ。
他者への怒りの持続など。瞬間的には可能でも、できない。
抱えていくのは自分だけ。
他人の入る余地がない。

「何故この日、何故犯人はこの被害者を？　このペイントは何？　儀式？　アンチキリシタンって感じじゃないわね。もっと土着のもの？　写真拡大して……ああ？」

おい、待てや。

これ、漢字ならぬ象形文字をかなり崩した形じゃないの？

「ＦＵＣＫ　ＹＯＵ！」

間抜けのこんこんちき野郎。母国に帰れ。日本人魂を売ったツケがこれだよ、神よ呪われろ。

ラテン語もヒエログリフも関係ない。

馬鹿すぎる。

「メイ！」

うるせーな。

「メイっ！」

私はメイじゃねーよ、さつきだっつーの。今忙しいんだよ。つか、馴れ馴れしく人の名前を呼ぶんじゃないわよ。

「おいこら、聞こえねえのか！」

いきなりドスのきいた低音に、私は億劫な視線を流した。熊と人間のあいのこが、何日前から同じ服を着ているんですかと決して質問したくないくたびれたシャツとスーツ姿で凄んでいた。私は笑顔

つきで故意に馬鹿丁寧な口をきいてみせた。
「なんですか、ハーレー捜査官」
「なんですかではないだろうが。お前人が何べん呼んだと思っているんだ」
「2回？」
「11回だ」

きっぱりきっちり正確に訂正するあたり、この人は常々無精髭を群生させている見た目ほどにいい加減でも大まかでもないんだよな、と改めて分析する。

「ったく、無駄口たたいてる暇はねえんだよ。こちとら案件山ほど抱えてんだ。おい、共通項出たぞ。被害者は性別も年齢もバラバラだが、あるゲームをやってた」

日本製のゲームだぞ、と彼は私が悪いと言わんばかりに歯を剥きだす。

「ヨーロピアン・インパクト。なんだこの意味不明のタイトル。歴史改変の愛と悲しみの物語だってよ。君は勇者になるか、それとも魔王になるのか。すげえハートの震えるうんこたれなキャッチコピーだ。お前らのセンスって未来志向だな」

私は本気でふぁっきゅーしたくなった。
誰だ、この呪われたゲームを持ち出してきた馬鹿野郎は。
これはとっくに回収破棄されたハズなのに、なんで今更出回ってやがる、ざけんなこのタコ。
サーバはとっくに閉鎖、版権元はトカゲの尻尾きりしてくれやがったけれど、一応倒産した。

……ああ、昨今ありえない規模の自サバ装備の素人が、魔改造したってオチね。
米国フリーダム過ぎる。
お前ら版権って知ってるか。違法にＤＬして改造施して、経験値界王拳じゅうばいだーにじゅうばいだーひゃくばいだーってか。
大方、呪われたゲームってのに、うほした連中が面白半分に手を出したか、それとも、故意に流出させた聖なる馬糞野郎の仕業か。
そのオチがくそったれな死に方だ。全然つりあってないよ全く救われないったらこんちくしょうだ。

「ふう、ありがとう、ハーレー。この恩は三日以内に忘れそうだけれど、晩飯奢るわよ。これは、別案件になりそうよ。私たちの手からははなれることになりそう」
「ああ？　どういうこった？」
「儀式を装った殺人事件じゃなくって、マジに儀式。うんこたれな現代の陰陽師の仕業なの。セイラムの魔女裁判なの。呪われしダイヤホープで湧き出るクトゥルフこんにちはなの。くそくそ、本気でくそな結末。現実でも決着つけろってゴッドの思し召しかもね」

私は資料をデスクに放り、コートを羽織がてらセカンドバッグを取り上げた。

「おいこら、クレイジー。どこ行く。まだ分からんだろうが」
「年休消化するわ。墓参りに行って来るから、ボスにはよろしく言っといて」
「ふざけんなこのアマ、俺はてめえのかあちゃんじゃねえぞ！！」
「冗談よ、自分で説明しに行くわよ。ジョークを本気にすると、頭はげるわよ。てか、もう禿げてるか、あっははは！」
「死ねっ　マジに死ね糞アマ！！！！！　今猛烈にお前を捻り潰したい！！！！」

カツカツとヒールを鳴らして、禿げ激しい同僚の罵倒を背に、私はどうやってボスにこの案件に関われるよう説得するか、頭を三回転半ひねってゲロを吐きそうになっていた。

まあ、そんなに難しいこったないんじゃない？

何しろ、リアル被害者だからね！

禿げ鷹みたいにつつきまわして利用してくれればいいのよ。

私だって利用させてもらう。

あいつを追い詰めるならなんだってするさ。

そう、場合によってはもう一度リテイクだ。

覚悟決めろや日本人。

「ボス！」

お話があります。

私はノックしたかどうかも分からん内に、「待っていたよ」と歓迎された。

各専門家のプロジェクトチームの一員に入れてくれるってよぉ！

きゃっほう、ボス最高ですぜ。一生ついていきやすぜ。

巻き返し、行きましょう。

喧嘩売ったらなあ、百倍返しがこちとら信条なんだよ。

泣き寝入りしねえぞ、今回はあ！

## せいなるやり

結局、八王子夜音の亡命は受け入れられた。
抑止力として、私だけでは力足らずであったのだろう。
同時に、事態はどんどん動いていた。ブルゴーヌの美食王ルネーが動いたのであるが、その為ファーデルラントとの戦争は一時停戦となったのだ。
この辺はまたの機会に話させてもらおう。
一方で、八王子夜音はこの流れを「読んでいた」ためか、かなり暢気に構えていた。
彼はイギリス人貴族の血を引いている。
イギリスにあたるレジーナにも興味津々のようだった。

「凄く興味深いな。この世界にもアーサー王伝説があるんだ」

こちとらどんぱちやっているというのに、民族や風土に目をきらきらさせてあちこち調べまわっている彼を、私もジャンも生温い目で見守った。
向学心も、時と場所を選んでいただきたい。ファーデルラントからは色々横槍も来て、ジャンは大変らしいのに、本人はこれじゃ、報われないですね、ジャンさん。
まあ、どんなことでも調べなければ、何が手がかりとなるかも分からない状況ではある。
こういうことは、相違点の分かる八王子夜音の方が向いているし、その点私の方が役立たずなので口出しは控えさせてもらった。

「ファーデルラントにも勇者専用武器とか、宝物庫があったんだけれど、この世界でも、現実にある武器と【伝説】は明確に線引きされているみたいだな。

非常に興味深いのが、この世界にも【聖遺物】という概念があるってことだよ。
しかも、これは【伝説】扱いとなっている。
擬似歴史をなぞっているから当然かもしれないけれど、聖槍かあ、ロマンだなあ」

力の使い方の訓練後、喉を潤しているところに、この話の流れだった。
わけわからないので、説明を要求してみた。
「えっ、君、本当に何も知らないの？」
む、とする以前に、私の空振りな様子に八王寺夜音は首を捻った。
「あのね、聖槍、『ロンギヌスの槍』っていうのは、イエスの脇腹を刺した聖遺物の一種だよ。
ロンギヌスっていうのは、槍を突き刺したローマの百卒長の名前って言われてるね」
「ふーん、そういえば聖書にそんなこと書いてあったな」
ミッション系高校に通っているが、その信心は所属とリンクしないのである。
「うん、ヨハネの福音書……十九章三十四節だよ」
しかし、私は空中を睨み、やっぱり思い出せずにいた。
「でも、そんなロンギヌスなんて名前は聖書のどこに書かれてなかったわよ」

八王子夜音は、「うん、」とヨハネの福音書のその一節をそらんじた。

『しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が流れ出た』

そう、兵士、とあるだけで、どこにも『ロンギヌス』とは書かれていない。

彼はにこにこと頷いてみせる。

「それはそうだ。ロンギヌスの出典は、『ニコデモ福音書』だもの」

「なんだ、『外典＞アポクリファ＜』じゃない」

気の抜けた返事になる。

公会議で正典として選ばれたものが現在の『新約聖書』であるが、その時漏れた文書群が『外典』である。

倫理の時間に習った気がする。倫理の先生よくよくわけの分からない方向に話が脱線して、しかもテストに出るのよね。

「まあ、『外典』も馬鹿にしたものじゃないと思うけれどね。しょせん、当時の情勢に即して編纂から漏れたものだし」

ゆったりした口調ながら、八王子夜音の意見は非常にドライでもあった。

「それはともかく、二千年近くも昔の槍が、どうしたっていうの。この世界でも伝説扱いなんでしょ、あるかないかも分からない」

「分からないかなあ、佐々木さん。君って本当に欲があるんだかないんだか、いや欲にうといんだか」

いらっとする喋り方は、相変わらず健在だなあと私は遠い目になりそうになった。
そう、こういうところが私と彼は合わなかったのだ。
「人の欲っていうのは本当に整合性のつかないものだよ。まして限りもない」
囁くような声は引き潮となって押し寄せ、引いていく。
「聖遺物っていうのは、それだけで価値がある。中でも、ヨーロッパ社会で絶大な力を持つ世界宗教において、その中核に触れる人物の血に触れた槍がどういう扱いを受けるか分かるだろう？」
「それで権力志向ってわけ？　時の権力者が槍を求めたってオチかしら？」
「ハラショー、そんなところかな。『運命の槍』を手にするものは世界を手に入れるって迷信さ」
「馬鹿馬鹿しい。そんなもの、本当にあるとでも思ってるわけ？　そもそもあったとして、この世界でも二千年前……よりはもうちょっと年代新しいかもしれないけれど、そんな古い槍が現存しているとでも？」
佐々木さん、君ってもっと現実主義者かと思ったけれど、案外おめでたいんだね、と八王子夜音は悪気なく言った。
「馬鹿だなあ、佐々木さんは。もっと頭を働かせなよ。二千年近くも前にあったかなかったんだか分からない本物の槍なんてどうでもいいんだよ」
「――矛盾してるじゃない」
「だからね、本物じゃなくてもいいのさ。本物だと信じれば、それ自体価値があるのさ」

だって、誰にもその槍が本物かどうかなんて、分からないだろう？

「それにね、現実の世界でも、槍を実際手にした者はたくさんいるよ」

八王子夜音は次々と名前を挙げていく。

「有名所で、ローマ帝国のコンスタンティヌス帝、フン族のアッティラ、フランク王国宰相カール・マルテル、神聖ローマのカール大帝、ザクセン公ハインリッヒ一世、またも神聖ローマのオットー大帝と代々神聖ローマで受け継がれてね。

十字軍の頃にはドイツ騎士団の手に渡っていたんだよ。それからフランスのナポレオンが血眼になって聖槍を捜したそうだけど、結局手に入らなくてね。紆余曲折を経て最後はオーストリアのハプスブルク家に渡ったんだ」

一呼吸おいて、八王子夜音はさらりと付け足した。

「近代では、オーストリアからドイツが槍を運び出したらしいけれどね、最終的には元の鞘におさまったらしいよ」

ただね、と八王子夜音はつけたす。

「イギリスも、無関係じゃないよ」

急にイギリス＝レジーナが出てきて、私は目を眇めた。

「イギリスの十字軍時代、獅子心王が求めたっていうのは噂であるね。彼は聖剣と対となる聖槍を欲したともいうよ。まあそれは噂だ

けれど、また別口で、面白い話があるよ」

段々引き込まれて、私は清聴する体勢になった。

「アリマタヤのヨセフって知っているかい？」

「貼りつけにされたイエスの遺体を引き取った人物でしょ？」

「そう。これは四福音書全てで一致しているエピソードだ。そのアリマタヤ出身のヨセフはね、中世の伝承で聖杯伝説と結び付けられた。彼はイエスの血を受けた聖杯、そして聖槍を持ってイギリスに渡ったというんだよ」

「……ふうん」

だから何、と返すことはできなかった。何故か、もやもやと妙な気分になったからだ。

つながるはずもないのに、つながりそうな気がする糸。

「もっと面白いよ。君、アーサー王伝説については？」

「あー、知ってるわよ。悲劇色でうっすぐらいイギリスの騎士伝説でしょ。

好みじゃなかったから、あんまり覚えてないけれど」

単純ストーリー嗜好のハッピーエンド主義な私には、登場人物がばたばたと死ぬ結末といい、色と欲が絡むぐだぐだ具合といい、あまり好きになれなかった。

「そう。じゃあ改めて説明してあげようか。このアーサー王にまつわる話ではね、アリマタヤのヨセフの子孫が、イングランドに渡った聖杯と聖槍を管理していたというんだよ。そこにね、悲劇の騎士が訪れるのさ」

むしろ、道化かな、と八王子夜音はおかしそうに声を漏らした。

「『災いの一撃』」

ぞっとする低音だった。

は、と振り返った私は、ジャンが緑色の瞳を暗く揺らめかせて、八王子夜音を睨みつけているのを見つけた。

「八王子君、さつきさんに何を吹き込んでいるんですかねえ」

「厭だな、何だか人聞きの悪い言い方しないでくださいよ。僕は、佐々木さんに請われるままに、あなた方のところの伝承について教えてあげていただけですよ」

正確には、レジーナと対応するイギリスにまつわる話である。

「話の持って行き方に悪意を感じたのは私の気のせいでしょうかねえ」

ジャンは鼻で笑った。なお、彼には私が異世界人であり、どういった世界から来たのかはある程度説明済みである。

「おせっかいですが、さつきさんの鳥脳にあまり難しい話を注がないでくださいよ。悪食はあまり真似させたくないんでねえ」

どういう意味だ。

私は馬鹿にされているのか？　そうなのか？

漂う険悪な雰囲気にそう思いながら、私はジャンを無視して八王子夜音を促した。

「で、悲劇の騎士がどうしたって？」

「さつきさん」

ジャンが制止するが、中途半端は気持ち悪い。

「ああ、それでね。この騎士が悲劇っていうより、不幸の星の下に生まれた人でね、何かにつけ不幸、不幸、不幸に見舞われる不幸人間だったわけだよ」

「お気の毒ね。ジャンみたい」

「あ、本当だね」

「あなたがたね」

ジャンの抗議は無視することにした。

「この不幸騎士は、アリマタヤのヨセフの直系子孫に喧嘩を売ってね。

逆上した子孫君から逃げ回っている内によりによって聖杯と聖槍を保管している部屋に飛び込んじゃうんだ。

そして保管されていたロンギヌスの槍を使って、うっかり子孫君の殺害行為に及んじゃうわけさ。さて、何が起こったと思う？」

「さあ。ろくでもない結果っていうのはなんとなく分かるかな」

「うんうん。そのとおり。聖槍は穢され、聖杯城は全壊、騎士が連れてきた少女は下敷き、国は不毛の地と成り果てましたって結末さ。ついでに聖杯も失われてしまったよ」

でも、彼の不幸はこれで終わらないんだよねえ、と八王子夜音はのたまい、不機嫌な顔をしたジャンを見やった。

「何しろ、彼と来たら、不幸も極めつけでね。国を荒廃させてしまい、不幸につぐ不幸で疲れ切った彼は投げやりになって自分の素性を示す紋章入りの盾を人に譲ってしまったんだよ。そして、正体の

知れぬ黒騎士と決闘をする」
「ふーん、それで？」
クライマックスも近い気がした私が続きを促すまでもなかった。
「ところが、この黒騎士の正体はなんと、呪われた兄をずっと支え続けてくれた大事な大事な最愛の弟だったんだ」
あらら、オチが読めた。確かに悲劇ね。
「無名の盾の騎士と、黒騎士。互いに兄弟と気づかないまま、一騎打ちの末、相打ちとなって死んでしまうわけさ」
本当に報われない話だよねえ。
そう言う割には、八王子夜音は非常に楽しそうだった。
いるのよ、知っているのよ。
懐かしき山田もガンダム好きで、話し出すと、こういう表情になって、一時間でも二時間でもべらべらと喋りどおしだったのを思い出す。
八王子夜音はこっち方面だったのか。
今まで仲良くなかったから、知らなかったわー。知りたくなかったわー。
「なんだか、どこかで聞いたような話だよね。こういう類型の話っていうのは、案外多いのかも。日本の昔話にもあったかな。うーん」
同意を求められ、ジャンは緩慢に口元を綻ばす。そのちぐはぐで歪んだ表情に、正直私はぎょっとした。
場の空気が重力で沈む。空気の色がジャンを中心に塗り込められて行く。押し潰されるような圧倒的重圧に、恐れにも似た眩暈が射

したのは、ほんの一瞬のことだった。

「さあ、皆さんの世界の話はあたしにはよく分かりませんがね。色々お聞きしたいところですが、時間もあまりありません。またの機会に御願いしますよ」

そう、ジャンは肩を竦めて応じる。それで、不可視の凍りついた空気が解けた。

まるで白昼夢だった。

呆然とする私に、ジャンはぽん、と肩を叩いた。

「あんまり、はしゃいでるんじゃありませんよ。転んでも知りませんからねえ」

嗜めて、すたすたと歩き出してしまう。

「怖い人だね、ジャンさんは」

彼は殺気の使い方をよく心得ているよ、と心底感心したような八王子夜音の感想に、私は茶々を入れることもなく、飲みさしのグラスを八王寺に押し付けるよう預けて、ジャンの後を追った。

## せいなるやり（後書き）

アーサー王伝説に対する主人公の感想は、あくまで登場人物の主観です。

この偉大な作品を貶める意図はありません。

作者と登場人物はイコールではありませんので、ご理解願います。

## 挿話：槍の遍歴について（前書き）

この話はフィクションです。
現実の人物、事件、国とは一切関係ありません。
また、侮辱する意図もありません。

## 挿話：槍の遍歴について

――一九××年　オーストリア　ある展示物の前

後に世界大戦におけるドイツの台頭の嚆矢となる、黒髪の青年が、硝子越しにある展示物に魅入っている。

彼は絵描きを目指して、後に挫折し、やがては政治家へと転身することとなる。

その展示物は、槍の形をしている……

――一九四二年　世界大戦時、イギリス、ある暗号解析係員

エニグマ――サメ――

ブレッチェリー・パーク。

ロンドンより北八十キロに広大な土地を購入し開設された巨大な暗号解析所施設。

その第八号棟は、ドイツ海軍暗号解析所である。

『彼』は、八号棟の暗号解析係員だった。

「おい、海軍のお偉いさん方が来てるらしいぞ」

同僚に声をかけられるのと同時に、くわえ煙草の上司が彼の名を呼んだ。

「――来てくれ」

上の方々が、現場の声を聞きたいそうだ。そう告げられる。
彼は色鉛筆を放り出し、二月以来ブラックアウトを起こして、つまり全くドイツ海軍の暗号が解読できなくなった為にうなぎのぼりする連合軍側船舶のグラフを一瞥して、上司の後についていった。

――ナッシング。

ナマの情報はあっても、解析一つできやしない。
現場にいても、やることなどなかった。

扉の向こうには、海軍将校のお偉方が並んでいて、じろりと彼に視線を投げた。
無関心で慇懃な視線だ。

――やれやれ、どうなることやら。

上司はテーブルを挟んだ右手側から紹介して行く。

「アーロン・バーロウ卿」

上司がなぜか、一番若いイギリス人の男を最初に紹介した。
何故だろう。
壮年、もしくは年寄りの海千山千の将校達の中で、何故か控えめに沈黙する最も若輩のバーロウ卿こそが重厚に構えている気がする。
何なのだろう、これは。
随分若いのに、どうにも印象的だ。
考え込む内に、紹介はいつの間にかアメリカ側も終わりかけ、彼はほとんど聞き逃してしまった。

右手サイドは、訪英しているアメリカ海軍将校だった。
一番年嵩のアメリカ側将校が重たい口を開いた。
「あー、それで、我々の輸送船団は無事海域を抜けられるという保障はいただけるのですかな？
あなた方のエニグマ暗号解読はどうなっとるのですか？
二月から、ドイツのUボートに沈められた連合軍側船舶は無視するにはあまりに大きすぎる数字ですが」
対するイギリス側の回答は曖昧を極めた。
つまり、可能性はあるが、断言しかねる、というのがその答えなのだ。
紛糾する英米の対立に、米側の将校が口を開いた。
「エニグマだの、暗号だの、私にはよくわからないんだが、君、専門家かね？」
いきなり話をふられて、彼は目を白黒させた。
「私はどうにも、暗号とやらは専門外だから、ちょっと何がどう問題なのか、簡単に説明してくれんかね？」
簡単に説明してくれと言われても、と思わず目をうろうろさせると、歳若いバーロウ卿が「構わない」というかのように小さく頷き、他の将校は何も言わなかったので、彼は妙に落ち着いて、
「では、僭越ながら」
現状について説明を始めた。

「エニグマ、とはドイツ側が使う暗号機のことです。
我々はこのエニグマによる暗号を解読し、大西洋を初めとする桝目海域のどこにUボート（ドイツ海軍潜水艦）が潜むのか、その通信を傍受して解読し、ロンドンに、そして貴国を始めとする連合軍に情報を提供し続けることで莫大な損害を回避するのを可能としてきました」

そこまで告げると呼吸を整える。クールになれ。彼の胸中をどす黒い暗雲が広がり、ぐ、と言葉を呑んだ。

「しかし、本年二月、ドイツ側が大西洋と地中海に配属するUボートに従来の三枚ローターから四枚ローターのエニグマを支給して以来、暗号解読の深刻なブラックアウトが生じています」

ブラックアウト――暗号が解読できなくなってしまったのだ。もう何ヶ月も経過している。その間に沈められた船舶は、グラフの山が証明している。彼は毎日そのグラフと睨みあいをしてきた。それ以上に溜息を吐いてきた。彼は更にドイツの通信網について続けた。

「この四枚ローターによる通信網は、ドイツ側においてその他の水上艦や北海のUボートが使う海軍エニグマ通信網と区別するため「トリトン」と名付けられています」

しかし、と彼は言葉を切った。

「ブレッチェリーでは、このUボート作戦用暗号を「トリトン」ではなく、「シャーク（サメ）」と呼んでおりますので、今後この名称にて説明を失礼いたします」

トリトン、海の神の息子？　冗談ではない、ドイツ人のロマンチ

シズムに敬意を払って俺たちはこう言ってやる。クソッタレ、貴様ら血生臭いサメで充分だ。

「この「シャーク」通信網により、現在大西洋における配置の全体像は現在のところ不明であり、現在及び今後のUボートの動きを、確信を持って予測することはほとんど不可能といわざるを得ません」

真正直に告げた事実に、余計なことを、とばかり上司は顔色を失ったが、つくろったところでどうなる。

エニグマ情報を入手できなくなるのと同時に、Uボートに沈められる連合軍商船のトン数は目を覆いたくなる数字となっていた。

そして、その歯止めをかける今後の目処は全くもって立っていないのだ。

「ふうむ、なるほど。ありがとう、分かりやすい説明だった。確かに君の言うとおり、アメリカ沿岸部もどこから沸いて出るか分からないUボートに恐怖の海域となっている」

アメリカ側の将校が礼とともに言う。続けて口を開いた時、その目はイギリス側の代表者をまっすぐ見つめていた。

「私達はこれまで、君たちの言うとおりにしてきた。ロンドンの握るエニグマ（ドイツ軍暗号）解読情報によって輸送船団のルートを指定してきた」

アメリカ側将校は笑顔を崩さなかったが、彼はひやりと背筋が冷えるのを感じた。

「君たちのくれる情報の精度があやふやどころかブラックアウトしてもうどれだけだろうね？

私が運んでいるのは、君たちの食料であり粉ミルクであり武器弾薬、あらゆる物資だ。
輸送船団の安全性の確保は連合軍の義務であり、君たちがまともに情報提供出来ないというのなら、アメリカ側で独自に解読をする必要があるってことじゃないのかね？」

――くそう、俺に説明させたのは、わざとだな！　いやらしいやり方しやがって。

「私たちなら、君たちご自慢のボンブ（暗号解読のための電動式機械）の生産だって、もっとスピーディーに大量生産できる用意がある。技術提供してもらえばすぐさ」

成果の横取りか、と彼はむかっ腹が立つのを感じた。アメリカ野郎め。ブレッチェリーの暗号解析員なら、皆同じ事を思っただろう。
言いたい放題のアメリカ側に、一方イギリス側は苦い顔だ。
年配の将校は、なぜか一番若い将校であるバーロウ卿に視線を送り、若手の将校はごく小さく頷いた。
その意を受け、年配の将校が一言だけ述べた。

「――考慮しましょう」

その後、まさに国家の存亡に関るところの貴重なエニグマ解読情報について、アメリカに情報を提供した場合のその保全についてなど（非常に疑わしいと思う）、話が機密にまで及んできたので、彼は早々に追い出された。
扉を閉める際に、『槍が』と不思議な単語が聞こえた。
しかし、すぐに扉はばたん、と重い音を立てて、彼は締め出されてしまう。

後々まで彼は思う。
何だったのだろう、あの若いイギリス将校バーロウ卿は。
他の年上の将校たちに何故か一目置かれているようで、しかしあまりにも若すぎる。
ほとんど喋らなかったが、彼こそが場を支配しているかのようであった。
あれほど若いのに――まるで、呑みこまれるような『重み』が卿を取り巻いていた。
何というのだろう。この感じは、と彼は首を捻り、適当な言葉を思いついた。
畏怖――それが一番近い。
しかし、悪い意味での畏怖ではなく、恐ろしさに近いながらもそう――もっとよい言葉を思いついた。
畏敬。
そうだ、妙な慕わしさを感じた。不思議だ。実に不思議だ。
まるで、以前イタリアを旅行した際に拝んだ【聖遺物】を前にしたかのような、不思議な畏れ。
そのように納得して解析部屋へと帰る彼及び彼らブレッチェリー八号棟住人が、ブラックアウト開始よりシャーク通信網を破るのには十ヶ月の期間を要することとなる。
そして、四十三年三月にも、また深刻なブラックアウトが発生し、輸送船団の商船が二十二隻沈められることとなる。
栄光は常に過去のものとなり、未来の栄光を掴むには泥を食まねばならぬのであった。

――一九四五年　イギリス　ブレッチェリー

テレプリンター室。

翻訳を終えたドイツのサメ暗号文が若い娘達の指の間をすり抜け、ロンドンへと送信される。

『〇七一五時、護送船団の最終位置は、桝目海域ｘｘｘｘに位置せり。針路四十五度、速度八ノット』

『〇月□日、〇九四〇時、桝目海域ｙｙｙｙにて、イギリス駆逐艦に接触せり、攻撃を受く。潜行しこれを回避』

作戦行動中のＵボートからエニグマ暗号機により発信された解読情報の他、司令部から海上のあるＵボートに当てた緊急指令と思われる奇妙な解読情報があった。

『作戦行動中止。直ちにキール軍港に帰港せよ』

イギリス海軍省では、このＵボートの追跡を命じた。

傍受内容によれば、最初の作戦を放棄し、キール軍港に身を横たえることとなった本Ｕボートには次のような指令が下った。

『新たな作戦を与える、作戦名『青銅の箱』』

――一九四五年四月末日　　ドイツ、皇帝の城ニュルンベルク城

ドイツのトップが銃身自殺したその日。米軍第七軍第四十五師団『サンダーバード』が、占領したドイツ、バイエルン州第二の都市、ニュルンベルクにおいて、ドイツ軍の占有財産を発見する。

この都市は、第二次世界大戦前は中世の建物が最善の形で保存され、かつての繁栄の面影と落ち着いた佇まいを色濃く残した古都であった。

しかし、そのドイツ史のシンボル性故にナチ党大会開催場所として選ばれ、結果連合軍の集中的な空爆を受け、町の九十パーセントを破壊された。

そしてこれからは、ナチ戦争責任者を追及する連合側の「ニュルンベルク裁判」が行われることとなる。

現在、ほとんど廃滅させられた建物を軍用ジープで抜け、報告を受けた将校と、報告した大尉の会話を抜粋する。

「皇帝の城＞カイザーブルク＜」と呼ばれた中世起源の無骨なニュルンベルク砦城地下トンネル――

「大尉、これかね？」

「は。これらは全てオーストリアのホーフブルク宮殿から運び出された宝物のようです。いかがしますか？」

「とりあえず、全部運び出してくれ。米軍の管理下において、いずれ機を見て正式な立会いの下、オーストリアに返還する必要がある」

「はい。しかし、【これ】の真贋については、現在専門家からは、

レプリカではないかとの疑いが――」
「ふむ。ドイツ軍は、本物をどこかに運び出した可能性があるな」

同年、五月八日、ドイツは正式に降伏した。

――同年、七月十日未明、南米アルゼンチン

不明なUボート

ドイツが降伏してから二ヶ月も経って、アルゼンチンのマルデルプラータ港に、Uボート（独海軍潜水艦）が不気味な威容を露にした。
このUボートは、二ヶ月の空白の航海の後、アルゼンチン当局に対し、投降を申し出た。
終戦後の空白期間並びに乗組員の奇妙な特徴から、連合国特別調査団が派遣され、臨検調査に当たることとなった。
「……このU―8XXには、主に不審な点が三つあります」

以下は、特別調査団派遣員の報告である。

「第一に、艦長以下乗組員の平均年齢が二十代という異例の若年層で構成されていおり、なおかつ皆身寄りがないものばかりでした
第二に、不自然な投降のタイミング。終戦後二ヶ月間の空白の航海につきましても、航海日誌が作成されてはいますが、偽装記録である可能性もあります。
また、第三に、艦内には潜水艦では火気厳禁であるにも関らず、

大量の煙草の吸殻が発見されております」
乗組員の口は固く、予断は禁物ではありますが、と前置きして報告は続いた。
「このU－8XXが何がしかの特殊任務にあたり、乗組員以外の何者かを南米に運んだと考えられます」
尋問を続けてくれ、と命令があった後、アメリカ海軍にある品物が届いた。
「これは……一体どこで手に入れたものだ？」
ためすがめつ皮手袋の上にじゃらりと垂らしたのは、明らかに海外から運び込まれた年代ものの財宝の一つであった。
「アルゼンチンのブラックマーケットに流出したものです」
「ふうん。尋問内容とすり合わせれば、U－8XXが運搬したものは、『人』と『金』と『財宝』のようだな。終戦後ドイツ高官がUボートで密かに南米に亡命しているという噂も耐えないし……ともかく、捜査を続行してくれ」
「は！」
しかし、こんないかにも足がつくものを早々に流出させるとは、ずいぶんお粗末だな、とアメリカ海軍将校は首を捻った。
まるで、わざと流して、見つけてくれとでも言っているみたいだ。
その後もアメリカ海軍の元には、様々な場所から玉石混交の大量な情報が集まった。中でも、幾多の情報の中に、三つ関連付けられると思われるものがあった。
一つは、乗組員の尋問を指示していた不審なUボートの運んだと

考えられる『人物』の件。
二つは、調査続行を指示していた、南米のブラックマーケットに流出した『財宝』の出所。
三つは、ドイツ現地から、現存する『Ｕボート（南米にドイツ高官を亡命させるのに一役買っているらしい）』について、目撃情報。
一つめと二つめは、線でつながった。
Ｕボート８ＸＸは、ドイツの重要人物を密かに南米へ護送する任務を請け負っていたようだ。
この南米入りしたドイツ高官が、ブラックマーケットに流出させたのが、ドイツ帝国の財宝の一つだったのである。
ドイツ高官を逮捕することはできたが、同時に面白い情報が入った。
ドイツ帝国の財宝は、複数の『青銅の箱』に詰められ、別のＵボートで終戦直前に国外に運ばれたというのだ。この高官からはそれ以上詳しい情報は手に入らず、信憑性についてはかなり曖昧である。
また、三つ目も、関連してつながった。終戦後もこうした秘密任務に従事するＵボートが現存していることについて、危機感を抱いた海軍上層部が更に調査をさせたところ、ドイツ現地から思わぬ奇妙な情報が入ったのだ。

『青銅の箱』

逮捕された高官が苦し紛れに漏らしたともとれる架空の存在と思われた例の『青銅の箱』の目撃情報である。
ドイツのキール港より、ＳＳ隊員が『青銅の箱』をＵボートに積み込んでいたのを目撃した、という人物が発見されたのだ。
これで三つがトライアングルにつながった。
しかし、このＵボートのその後の経路については不明であり、ここで手詰まりである。
手詰まりとなった上に、これにばかりかまけていられない以上、

担当者の海軍将校は他の業務に忙殺され、やがてこの謎の『青銅の箱』はすっかり埃をかむってしまうことになるのだった。

――二×××年

××は手元に書類を掻き寄せて、興味深々に一枚一枚目を通した。
いつの間にか時間を忘れてのめり込み、現在は解体されたブレッチェリー・パーク関係の資料をぱらぱらとめくっていた××はある一点で目を止めた。
エニグマ。
シャーク通信網。
ウルトラ情報（独暗号解読情報）。
点在していたばらばらの情報が一本につながる。
それは固形物が一瞬で液体に変容するような劇的変化だった。
別の山に分けてあった海軍情報と突合わせ、確信した。間違いない。
……確かに、このUボートがキール軍港を出て、南米沖まで航海を続けたとすれば……これはイギリス海軍の駆逐艦がUボートとランデブーした日付と合うな。
イギリス海軍が、Uボートを自沈させたのは、ランデブー航路から見て、この地点か？
空振りに終わるかもしれないけれど、確かめに行く価値はある。
××は資料を手にしたまま沈黙した。

Q. これは終わりの始まりだろうか？

A. これは終わりではない。これは終わりの始まりですらない。

しかし、あるいは、始まりの終わりかも知れない。

Churchill November 10, 1942

**あなたは？**

「待って」

柱廊を山形のアーチが連なりに描き、床は総大理石で、ガラス窓から陽光が降り注いでいる。

しかし、私にはどうにも薄暗く感じられた。

人工的な電灯の明かりが一切なく、自然光だけのせいだ。

薄暗がりに、ジャンが振り向き立ち止まる。

「なんですか、あたしも忙しいですがね」

「ご、ごめんなさい。あの、何か様子が変だったので――」

大丈夫ですか、との言葉を飲み込む。この言葉は、使い方がとても難しい。

大丈夫じゃない人間に、大丈夫かと尋ねる生産性など、ほとんど問うた側の精神安定剤と満足以外の何者でもないからだ。

だが、私は貴方を気にかけています、と意思表明されることに、わずらわしさと同時に嬉しいと思う気持ちも、矛盾して同時に持ちえることができる。

私は、どうもこのタイミングとやらがうまく読めないでいる。

言葉を続けることができなかった私に、助け舟を出したのは、彼の年の功であろう。

「すみませんね、あたしもどうにも神経質になっているようですね」

「いえ、現状が現状ですし、ファーデルラントは？」

「引渡し要求が激しいですねえ」

ですよね。

私はうなだれた。

「さつきさん」

不意に、ジャンの声音が酷く硬質さを帯びた。

驚き、顔面をはじくように上げた私に、彼は普段の人を食ったような表情を暗がりに見えなくして、

「人間は自由の刑に処せられている、と言います」

は？　いきなりの言葉に面食らう。

「ですが、その特権、本当に享受できるのは、この世界で一握りだけです。貴女は、数少ない特権を教授する側です。

自由に考え、動き、喋ることができる。

諦めなかった者だけが――」

そこでゆっくりと彼は視線をめぐらし、すとん、と表情が抜け落ちた。

まるで、今まで被っていた仮面を剥いだかのように、『素』の表情になった。

「私は、貴女に謝らなければならない。この世界、地獄に叩き落した一因は、私にあります。

私は、自分の動ける枠内で少しでも貴女を」

そこまで言いかけて、ジャンは口元を抑えた。

空気が止まった。

彼は吐血していた。

それも、指の隙間から、笑い声が漏れている。
「はは、役割を逸脱した途端、史実どおりと、」
私は阿呆みたいに突っ立っていた。
ジャンが倒れる。
私は駆け寄ることもできない。
ただ立ち尽くしていた。
氷の彫像になったみたいな気がする。
頭の奥、がんがんと何かが鳴っている。
「気を、つけなさい。この世界、呑まれ、ないよ……に……選択、間違え……」
い、嫌だ。
私はようやく動いた。
彼のそばに駆け寄り、衣服を握り締める。
「ジャン、待ってよ。いきなりすぎるよ、何、わけが……ね、ねえ、返事、してよ」
がちがちと身体が震えてくる。
この世界での、庇護者は、間違いなくジャンだった。
あの最悪の地獄のどん底で、どんな思惟があれ、少なくとも救い出してくれたのは、この男だったのだ。
生きるのに、精一杯で、私はこの男に、きちんと感謝を伝えたことがあっただろうか？
急速に失われようとするその場面になって、私は自分自身に向き合わされた。
そうすると、指先まで冷たくなって、身体の軸がぶれてきて、立

ち上がることもできなくなってしまった。
助けを呼ばなければ、と思うほどに、声すら出なくなってしまう。
かつての恐怖体験がフラッシュバックして、私はただ震えることしかできずにいた。
助けて。
何度願っただろう。
誰か助けて。
そして何度無視されただろう。
ジャンを助けて。
誰も答えない。
そのはずだった。

「そいつ、死んだの？」

透明で、喜怒哀楽すらどこかに置き忘れたようなその声。
私は振り仰ぎ、瞠目した。
桐島聖涙（きりしまあくあ）。

彼女だった。
頬は痛々しいほどにこけ、目ばかり爛々と強い光を放つ。

「ど、どしてここに？」
「ブルゴーヌに備えて、ファーデルラントとレジーナが密約を結んだから」
彼女はあっさり答え、すたすたと近くまで寄ってきた。
「ねえ、佐々木さん。貴女は何回目？」

そう、しゃがみこんで彼女は尋ねた。

## あなたをわたしは

あなたは、何回目？　と彼女は問うた。

私には意味が分からなかった。

それは、追求すべき事柄だったのかもしれない。

しかし、私はそれどころじゃなかった。

「桐島さん、御願い。こ、この人、助けて、御願い。魔法とか、なんでもいいから、治してください」

私にできることはほとんどない。

彼女なら、ひょっとしたら、ジャンを助けてくれるかもしれない。

だから、ジャンに半ば取りすがるまま、頭を下げた。

桐島聖涙は、無言で私を見下ろし、そしてジャンを一瞥し、

「無理。彼はモブ。治せない」

一蹴した。

モブ、という言葉が頭の隅に引っかかるが、今はそれを追及している場面ではない。

私は唇を噛んで。

ぐっと涙をこらえると、顔面を跳ね上げた。

「無理言ってごめんなさい。悪いけれど、この人――ジャンを見ててくれる？　助けを呼んでくるから」

立ち上がりかけた私の肩を、万力のような力でぎりぎりと桐島聖涙がつかみ、引き下ろした。
痛みもそうだが、出鼻をくじかれて、私は抗議の意味で彼女を振り返ったが、

「駄目」

桐島聖涙の目はとても静かで、そして真剣だった。

「助けたいの？」

再度問われる。この問いは、私にとってとても簡単だった。

「助けたい」

短いその答えが全てだった。

「今」

桐島聖涙は口を開いた。

「この世界は、彼にとってよくない方向に修正の力がかかっている。彼が己の本分を越えて、貴女に忠告したから。役割を外れたから」

恬淡とした口調ながら、その言葉はとても真摯でまるでとても深いところから響いてくるかのようだった。
そして、彼女は、元の桐島聖涙とは到底思えないほどに、ぶつ切りの話し方で、感情の機微は全く表情に表れなかった。

「『狩人』が来る。と思う。人に預けない方がいい。誰が『狩人』

か分からないから」
「『狩人』？」
「役割を逸脱した者を狩る連中。この世界はゲームと連動している。モブ――ＮＰＣが予想外の行動をとったら、管理者はバグやウィルスを駆逐するでしょ？　似たような仕組み」

そんな場合じゃない、と思ったのに、私は『ゲーム』という言葉に呼吸を止めた。

「この人、多分、元は私たちと同じプレイヤー。でも、コンティニューを諦めた。だからこの世界の住人に成り下がった。彼はもうプレイヤーじゃなくて、この世界の登場人物として、『ライフパス』をふられている。投降したプレイヤーは世界と同化して、『自分』を失う。でも、『名前』を守れば、全部は失わない」

彼女は早口で説明する。
ついていけなくなりそうになるが、一言も聞き漏らしてはいけない情報だと本能的に察した。

「とりあえず移動させる。人目つかないところ」

私は頷き、自分の部屋に案内した。

ジャンを寝台に寝かせたものの、医者を呼ぶこともできない。
呼吸は浅いが、彼は生きている。
桐島聖涙は、「無理」と言ったが、プレイヤーとしての彼女が授かった不思議な力で治療してくれた。
彼女の「無理」は、根本的に死に至る病を治すことはできない、

という意味での「無理」であった。
病もまた、「役割を逸脱した登場人物への世界からの制裁または消去」であると彼女は言う。
それに対して、プレイヤーは介入できない、と。
私は青白いジャンの顔から目をはなせなかった。
彼を失うかもしれぬ、と思った瞬間の恐怖が、いまだ臓腑を震わせる。
全身から血の気の引く瞬間を、私は痛いほど思い知り、同時に彼に対する言葉にできないぐちゃぐちゃの気持ちを深淵にのぞきこまされることとなった。
ジャンが知れば、恐らく「脳みそがゆだったのですか」と冷めた目で哂うだろう。
先ほどの彼は異様であったが、いつもの彼なら、この大変な時に、と片方の眉を上げて、せいぜいこの気持ちの利用価値について試算されるのが関の山だ。
だが、馬鹿な小娘と内心嘲笑われるならまだしも、失望する価値すらないと、そんな風に思われたら。
そんな目で見られたら。
どう考えてもよい方向には転がらぬと思え、私は震える拳を握り締めると、決して口にするまいとそれだけを決めた。
寝台の傍らに椅子を寄せたまま、桐島聖涙に断って話の続きを請う。

「桐島さん、貴女どうしてそんな詳しく」

桐島聖涙は、「うまく説明できるかわからないけれど」と前置きした。

「私はもう四回目。イベント発生で、別のプレイヤーの自分と『統合』したから記憶が連結した」

ごめんなさい。さっぱりわからねーよ、と私は正直に打ち明けた。
桐島聖涙も無表情ではあるが、困ったように眉根をやや寄せた。
「私も手探り。この世界、多分ゲームの世界と連動している。佐々木さん、『ヨーロピアン・インパクト』というオンラインゲームは知ってる？」
「ごめんなさい、しらな」
言いかけて、私は唇を間抜けに開けた。
心臓が一度、大きく脈打つ音が確かに聞こえた。
私はのろのろと桐島聖涙を見上げた。
「――知ってる」
そう、知っている。
だって、確か、
「大輔が、やってた」
桐島聖涙も緩慢に見えるほどにゆっくりと頷く。
「欧州をモデルにした舞台、歴史も類似している。その歴史改変に主眼を置いたゲーム。
ただし、ファンタジー世界のミックス要素がある。
プレイヤーは魔王サイドの眷属陣営とヒューマンサイドの陣営に分かれている。
各トップを倒すとインパクトが起こって、歴史が【改変】される。
国家間戦争の他に、お互いにインパクトを起こすために、大規模戦争が用意されている」

でも、あんまり関係ない、と桐島聖涙は肩をすくめた。
「ゲームとよく似ている。でもそれだけ。ここがゲームの世界なのかどうかなんてたいしたことじゃない」
そうだ。
ベースがあるゲームと似ているということが分かっただけで、そのことが現実に感じる痛みの軽減につながるわけではない。
殴られれば痛い。
それをもって、どうしてここはゲームの世界だから、その痛みは嘘だよ、という理屈が通じるだろう。
あれがたとえ幻の痛みだったとしても、私はもう二度と耐えられない。
「私は最初、浮かれていた。精霊に無条件に愛されて、王子様に気に入られて、ちやほやされて。今とても恥ずかしい。
何も分かってなかった。
無条件に与えられた力も好意も自分のものじゃない。
無条件に恩恵を与えられたら、無条件にしっぺ返しを食らうのも当たり前」
自嘲する言葉ながら、それも熱を持たぬただの事実といわんばかりに抑揚なく彼女は続ける。
「三回死んだ。コンティニューするか、それとも諦めるか、この世界のシステム的なものに聞かれた。コンティニューを選んだ。だから今四回目」
「待って。桐島さん、最初は、普通に見えたけれど」

彼女は最初よく怒ったし、やっぱり怒ったし、かなり猪突猛進だった。
あのエミリオ王太子に食って掛かった彼女と、今目の前の彼女が同一人物だとは到底信じられない。
「イベントが起こったから。コンティニューしたら、記憶はリセットされる。でも、イベントが起こると、以前のプレイヤーの自分と統合される」
イベント？　統合？
「イベントは人によってまちまち。私のイベントは、エミリオの死亡。彼が死ぬと、以前の私と統合されて記憶が戻ってきた」
私は絶句した。待ってくれ。もしかすると、いや、多分桐島聖涙の目的は、エミリオ王太子を死なせないことなのではないのか？
ならば、その条件は――あまりに酷だ。
あいつを私は八つ裂きにしても足りぬほど憎んだが、同時に身体全てで恐れた。
私はもう怒りに任せて拳を振り上げることができない。
義憤よりも、自分が大切だった。そんな自分を身をもって知ってしまった。
今は恨みよりも、もっと遠くにある。
そして、桐島聖涙の物語を私は知らぬのだ。
「戻って来る時点は色々。プレイヤーメンバーは、毎回顔ぶれが違う。佐々木さんに会うのは初めて。でも、以前の世界と今の世界が同一のものかは分からない」
それはそうだ。

タイムパラドックスについて私も詳しいわけではないが、巻き戻しが起こっているなら、色々な矛盾が生じてくるというのは私のアホな頭でも分かる。

「桐島さん、私は初めてだけど、だ、大輔は？　他の人たちは？」
「今回のメンバーは、皆私にとっては初顔。でも、彼らは彼らで何回目なのか私には分からない」

頭がいっぱいだ。
考えて。考えろ。
でも、どう思考したらいいのか分からない。
気がつくと、私はジャンの手を握り締めていた。

彼が元プレイヤー？　じゃあ異世界人じゃなくて、私と同じ世界から来たってこと？
諦めると、この世界の登場人物になってしまう。
じゃあ、もし、私が死亡して。

もう何もかも嫌だと全てを放棄していたら、文字通りこの世界の一員になってしまっていたというのか。
ぞっとした。

「どうしてあきらめるなんて、」

言いかけて、私は言葉を途切れさせた。
あの地獄が。
何度も何度も何度も何度も繰り返されたら。
私は、諦めないだなんて言える？
だって私は願った。
何でも捧げるから助けて欲しいと願った。

それが、『自分自身』だとしても、あの瞬間、あの時、もしそれから逃れるための代償に要求する者があったら。
激痛から一瞬でも逃れるためなら、喜んで捧げただろう。

「――酷い」

ジャンの手を痛いほどに握り締める。

「――酷過ぎるよ」

頬に熱い液体が流れた。
そうか、だからジャンは助けてくれたのか。

桐島聖涙は淡々と告げた。

「この世界はとても巧妙。酷い世界。自然にできたものとは思えない。でもゲームの中じゃない。皆『生きてる』。だからきっと現実。でも、何かの意思を強く感じる」

そして私は、と彼女は続けた。

「人の理屈じゃない気味の悪い意思と、とても人らしい悪意と、両方を感じることがある」

いいざま、とても自然に彼女は剣を抜いた。ぎょっとする私に、

「これから、後者が来る」

誰の手も借りずに、窓が開け放たれた。
風が身をよじり、ごう、とふきつける。

何かが。
悪意が、黒雲の形をとって空いっぱいに広がり、私の前に現れようとしていた。

## まおう（前書き）

この話はフィクションです。
現実の人物、事件、宗教、歴史、国とは一切関係ありません。
また、侮辱する意図もありません。

**まおう**

空は紺碧のはずであった。
だが、今は何かの黒の染みのようなものが広がり、やがてそれはうなり声を上げる蜂の大群となった。
その一匹一匹は、あまりにも巨大。
成人男性ほどの大きさがある。
それが何千、何万、と空を埋め尽くす光景は、とうていこの世のものとは思えない。
悪夢であった。

そして、気がつけばあちこちから悲鳴が聞こえている。

「『沸き』の時――もはやファーデルラントに留まらない」

圧倒される私を余所に、桐島聖涙は、冷静すぎるほどに落ち着いた声で指摘する。

「争いは愚か。でも、気づくのが遅すぎた」

人と人が争っている場合ではないと。
その言葉は、己自身に向かうものであったのだろう、自嘲の響きを帯びていた。
そう、人はいつも、事態が切迫しなければ、重い腰を上げることはできない。
つまり、方向転換ができないのだ。

「四度目。佐々木さん御願いがある」

窓の外を見据えていた桐島聖涙は、私を振り返って、
「私の力は、広範囲で無差別の傾向がある。貴女は、貴女の判断で、『盾』の力で防御して」
そう頼んだ。
私は、頷くしかできなかった。
もはや、私にも事態が飲み込めて来ていた。
魔王。
来るのだ。
ここに。
おそらく、大禍津日に発生するという、特大の【天然】が。
私は、助力する、と言えなかった。
代わりに、八王子夜音のことを戦力として推薦することもできなかった。
あの、あれ、に。
立ち向かえと、どうして言える？
外は暴風が吹き荒れる。
緑葉は枯れ、室内に舞い込んだ。
「――行く」
だん！　と弾くような音がした。
その次の瞬間には、桐島聖涙は暴風の中に小柄な身体を飛び出していた。

四度目だと、彼女は言っていた。
三回死んだ、と彼女は言っていた。

「――死ぬ気だ、桐島さんは」

口にしてみて、私は今更片手で口元を覆った。
駄目だ。
それは絶対に駄目だ。

「――八王子君」

呼ばなきゃ。
そして、私も行かなければ。
私たちは、齟齬があった。
私は彼らを馬鹿にしていた。
そして、馬鹿にしていた自分自身に報復されたのだ。
不条理、不合理、そして理不尽。
そんなものは、どこにでも転がっている。
だからといって、今そのことに目をつぶっていいことにはならない。
そうだよ。
だって、彼らはたった二人の、私の同胞なのだ。
見捨てるなら、私はくそったれだ！
くそにはくそのやり方がある。

「ジャン」

私はこれが最期になるかもしれぬと男の白く血の気の失せた顔を見下ろし、懺悔する気持ちで、その首筋の横に顔を押し付けた。

シーツの冷たい感触に、恐怖よ吸い込まれろと強く強く埋め、色々なものにさよならする。
それから思いっきり顔面を上げた。
「――行ってくるね。死なないで」
私の王宮滞在時のこの部屋には、元々『勇者』用として、色々な仕掛けが施されている。
本来は、不穏分子である『勇者』を封じ込めるための部屋だ。
だが、今は【外】から閉ざされたという意味で、一番安全のはず。
そして、ここから出たら、どんな世界が待っているか分からない。
私は桐島聖涙の後を追う前に、八王子夜音を探すことにした。
すぐに見つかるだろうという予想に反して、彼の姿はどこにもない。
別のところで戦っているのか。
兵士達が『沸き』によって異形の姿となってしまった仲間を切り伏せている。
「八王子君！」
いない。
どこにいるのか。
上空では、桐島聖涙が飛び回り、蜂を爆発させている。
彼女の周囲に一瞬何か輪状のものが見えた瞬間、周囲に爆発音がする。
見えざる爆破攻撃。
威力は絶大だが、回数は無限じゃない。

いつか彼女も力尽きてしまうだろう。

やがて私は礼拝堂にまでたどり着いた。

礼拝堂は、色硝子（がらす）を嵌め込んだ開口部を持つ、巨大な暗箱である。

堂内に向かって踏み出した。

建物は西から東へ、太陽の昇る方向を示す軸にそって配置され、上空から見下ろすと二本の腕木が交差した十字形の構造をしていることが分かるだろう。

八王子夜音によれば、初期キリスト教のバシリカ式から発展した伝統的十字形プランの建物だという。

十字の頭部は常に東を向く。北側は暗く冷たい場所と見なされ、南側は光と暖かさによって恵まれ、西端は歴史の場所とされる。

この西の入り口から、何千人もの国民が堂内に入って来て、退屈で厳かな礼拝堂付き牧師のお説教に耳を傾けて来たのだ。

しんしんと冷たい石壁は、過去と現在の歴史の狭間に反響する音を拾い、ひとびとの呟きを石の隙間に染み込ませ、朗々と堂内に響き渡ったであろう説法に耳を済ませ続けて来たのだろう。

西正面入り口から内部に足を踏み入れると、その上方には大きなバラ窓が配され、主題に『最後の審判』が表されている。

この世界は、どこまでも類似した『歴史』を持つようだ。

交差した二本の腕木は、西から東までが身廊、塔をのせた交差部、内陣となっており、北から南までが北袖廊、交差部、南袖廊となっている。一歩堂内に入るや、

私はぞっとして二の腕をつかんだ。

――来る。

ここに、来る、と。

私はわかってしまった。

にゃあ、と猫の声がする。

違う。

赤ん坊だ。何かが生まれようとしている。その前兆。

そして、『そいつ』はやって来た――恐ろしいもの。

礼拝堂の入り口から入って来たものは、全ての悪意だった。

それには人間が怖がるもの全部が小さな躰の中に、おぞましいほど隙間なくぎっしりと入っている。

根源的に恐れられる対象。怖いもの。怖いものというのは、人間の恐れるもののそのもののことだ。

人々は圧倒的力のあるものに特別な名前を与える。与えた名前そのものが悪意となり、新たな恐怖を煽り、国中に伝播して行く。あるいは国境を越えて、風習や宗教という触媒を通してどこまでも無限に波紋を巻き起こしながらある一定の形で広がって行くのだ。

例えば伝染病の代表格であるペストは自然現象だったのに、昔の人々はそれを悪意によるものとした。

自然から派生したのに、誰かの悪意から派生したと思った。

そこに悪意を汲み取ってしまったことから、悪意の発信源を探した。

それが特定の民族に向けられ、また魔女狩り、疫病をもたらすという伝説的黒い犬を生んだ。

悪意は一定の地域を越えると形を変えていく。イスラム教に触れれば、イスラム教の形に修正され、東洋の宗教に触れればそれに見合った神や魔人や妖怪の形に人為的に歪められるのだ。

そして西洋では自然現象に悪意を感じ取ってしまったことから、それらが宗教観において怖いもの、恐ろしいものに昇華されたのだ。

疫病。

神との断絶。

密告する他人。

病を連想させるもの。

斑点。

東洋の絵。

人間の内臓を破裂させるくらいみっちりつまった回虫。

蛆。

人間にありえない動きをするもの。

巨大な暴力性を秘めたもの。

内側に圧倒的に黒いものを抱えている。

触れたら魂自体が穢れる。

ウィルスのように魂の情報が壊される。

恐ろしい、穢れたものだ。

神の能力を嘲りながら、神の能力を正確に逆トレースする、神のパロディ。

魔王。

東洋では神々は溢れ返り、一神が正義で後が悪ということもなく、正義である神が同時に暗黒面を抱えていたり、ある人にとって正しい神が別の人にとって悪となったり、明確な境界が見分けられない。

しかし、例えばキリスト教ではミサと逆対応する黒ミサのように、キリストとアンチキリストは一枚のカードの裏表だ。

神の裏は、圧倒的暴力性と圧倒的無慈悲と圧倒的奇形を備えた『神の悪戯』がにやにやと狂気を携え、闇の中に佇んでいる。

『悪魔』だ。そして、この世界においては『沸き』であり、『魔王』だ。

それはその与えられた名前によって人間の残虐性に火を点け、数十万人の人々を殺し、これからも殺戮するであろう人間の作り上げ

た神の奇形児だった。

『悪魔』に憑りつかれた者は、他人を火炙りにするし、やがて自分も火炙りにされる。あるいは妻や夫を撲殺し、息子や娘を犯し、自分自分を捩じ切る非人間的なものに成り果てる。

想像もつかない非人道的で人間の知恵の及ばない自然現象でもある『何か』に人間が与えた名前こそ、『悪魔』に他ならないのだった。

何もかも悪魔のせいにすれば、人は逃れようもない恐怖から悪魔に救われる――時に閉鎖社会では自分自身が悪魔にまつり上げられながらも……そして、その折り重なる何かから、『魔王』は生まれる。

すべての淀みの中から、すべての穢れを引き受けるかのように、『魔王』は生まれる――

「うげえっ」

四肢をはった私は冷たい床石に膝をつき、間断なく襲ってくる嘔吐感に残り少ない胃の中のもの全てをぶちまけた。目が充血して、身体中の水分が奪われ、カラカラに干上がってしまう。

圧倒的プレッシャー。

これが神と人の違いだ。違う、神の次元にあるものとの相違。

涙すらも次々に蒸発して行く中、私は確かに見た。

あれは――人とは違う存在だ。

――ほ、か、の、連中、は！

他人の身を案じている場合ではないと思いながら、この濃密な毒にも似た空気の中で、外にいるだろう他の者が無事でいられるとは到底思えなかった。もう何も、分からない！

そうして私は確かに見た。

腐乱した手が緩慢な仕草で目深に被ったフードを脱ぐ。

懐かしい腐敗した臭気。フードの下には虚ろな眼窩が覗く。のっぺりとした皮膚が視界いっぱいに広がる。がっぽり開いた、暝い、深い、真っ暗で、黄泉へと続く穴が。

何もかも視界の全てを覆って。

例えようもない幸福感に苛まれる。

ああ、あれは。知っている。誰もが知っているだろう。いや、知ることになるだろう。

私は悟った。あれは象徴そのものなのだ。

フードを脱いだ手にぷつぷつと炎が粟立った。オレンジと赤の色に燃え盛る炎の滴がぽたぽたと床に滴り落ちては焼け焦げ、同時に床石は不浄な汚染の媒介になった。凄まじい勢いで『それ』が立つ床石を中心に黒い腐食が始まって行く。私のひりつく目から涙が滑り落ちて来る。

溶解しながら皮膚がずるりと滑り落ちる。腐敗が進んで行く。いつか人が目にするもの。自分自身そうなるもの。凄まじいスピードで老化し、数千種の病におかされながらしまいには腐って行く。

――神よ。

恐るべき悪意の化身を前に、私は短い生涯でかつてなかったほど神の存在を間近に感じていた。

ミッション系の学校に通って、数え切れない説法を耳にしてきたが、どんな聖職者の言葉よりも、ずっと明確にはっきりと私は確信していた。

人間の想像を遥かに越えた、超存在が世の中には、いいや、この世界の外には確かに存在するのだ。

――あれは。

もう汗もよだれも涙も出て来ないだろう。

――あれは、『死』だ。

ジーザス、あれは、『死』なのだ。

異存在との次元を超えた接触により、感激と恐怖とがない混ぜになって、宗教者の法悦の絶頂にも似た陶酔感が私を襲う。

生、老、病、死。

全てを体現しながら『死』に行くもの。

――敵わない。

人間が、『死』に勝てるはずもない。

「敵うよ」

誰かが弛緩した私を引っ張り起こして囁いた。私からはもう思考力が失われていた。茫洋とした目で誰かを見上げる。

――桐島聖涙。

厳しい顔つきで、彼女は私の傍らに膝をつき、『魔王』を見据えている。

「勝つ。五回目は、繰り返さない！」

彼女は飛び出した。

その叫びに、ざわりと『魔王』の周囲の闇が呼応した。

穹窿（きゅうりゅう）からぼとぼとと闇が滴り落ちて来る。

滴り落ちた闇色は慕わしげに『魔王』の体にまとわりつき、腐敗しゆく肌を覆い隠した。

あっという間に漆黒が巻きついて、腕を、胴体を、脚を形作り、受肉して行く。

何もかもが闇色を吸って黒くなった。

黒い兜、鎧、篭手。

騎士の出で立ち。

その開いた顔面部は、何か黒い靄で覆われ、見通すことができない。

圧倒されて声を出すことが出来なかった。

ほとんどそれは一瞬のできごとであった。

『魔王』の腕が宙にめり込み、虚空からずるりと長槍を引きずり出した。手首をしならせ風切って漆黒の槍を下げる。

その姿は、まるで悪魔と死神を掛け合わせた怪物（フリークス）だった。

青い鬼火をまとわりつかせた漆黒の槍は、どろりと水性インクを思わせる形状で闇に溶け消えた。

息を呑む間もなく、残った黒い柄の先が桐島聖涙の眼前に現れる。

直線に飛び出し、今にも打ちかからんとしていた桐島聖涙は避けそこね、仰け反ったまま、反対方向へ吹き飛ばされる。固まった私の方へと。

「桐島さん！」

私が叫ぶのと同時に、『魔王』は鮮やかに天井めがけて高くトンボを切り、西口正面へ小気味良く降り立った。

そのまま腰と胸が横に向き、水平に棒を構えた。次の瞬間には前を向いて身体にぴったりつけたまま手にした柄をくるくると目にも鮮やかに高速回転させる。目の高さにあてがった水平から天を突く垂直へ、大地を打ち据える直前まで薙ぎ払い、空気を打って払って水平へと戻る。

まるで「どうだい、すごいだろう？」と言わんばかりに。

「くそが！」

桐島聖涙は口汚く吐き捨てる。

そう、『魔王』は、人間のように遊んでいるのだった。

桐島聖涙は私を背後に、左腕を軸にして素早く立ち上がり、勢い良く走り出す。
上体を左に回しながら左足を大きく振り上げ、宙高く踏み切った。振り上げた腕が跳躍を補助し、引き上げた腰のまま右足が蹴り上がる。
空中に回転しながら『魔王』を迎え打った。バシン！　という高らかな音が響き渡り、着地する前に『魔王』の柄に足元を薙ぎ払われる。
だが、次の瞬間、魔王の周囲で小爆発が起こる。連鎖的に何発も何発も何発も。

「爆ぜろ！！！！」

桐島聖涙の周囲に何か半透明の拳大ものが輪状に展開し、『魔王』へと次々にぶつけられていく。
わかった。
多分、マーカーだ。
桐島聖涙は何らかの手段で、目標物にマーカーをつけ、そこに向けて爆弾のようなものを放っている。
そして、吸着したものを、自分の好きなタイミングで爆発させているのではないか。
先ほどの蹴りの接触でマーカーを付着させたのだろう。

――勝てるか？

だが、不意に『魔王』はあっさり槍の柄を投げ出した。
そして、黒兜の前にすうっと手をかざして下ろした。

「――っ！？」

顔面を覆っていた黒い靄が取り払われ、現れた顔は――エミリオ王太子。

桐島聖涙の衝撃はいかほどのものであったか。

私は目が点になって動きが止まる。その僅かな空白が命取りだった。

ほんの一瞬の出来事だった。槍は蛇そっくりに変容し、猛スピードで伸びる蔦を思わせるしなやかな動きで、

――防御姿勢を取り遅れた桐島聖涙の腹のど真ん中を貫いた。

――貫通だ。

桐島聖涙は、まるでピンでとめられた蝶のように、壁に貼り付けとなった。

血ではないインクのような闇色の液体がぼとぼとと滴り落ちては空気中に霧散する。

あまりの高速攻撃に、何が起こったのか分からないという表情をする桐島聖涙に、

『魔王』は次々と槍を放ち、本当に四肢を壁に縫い止められてし

まった。

「あぐうっ」

聞くに堪えられぬ悲鳴に、私は呆然とし、そしてまだ立ち上がることすらできない。

エミリオ王太子の顔をした『魔王』は右腕を時計回りにぐるりと回転させた。すると、槍も同時に回転する。

「うわあああああああああああああぁぁぁああああああああああああ！」

虚空に絶叫を放った桐島聖涙かもしれなかったし、あるいは私かもしれなかった。

桐島聖涙は油汗を流して痙攣し、激しくえづいた。耐え切れず床を血で濡らす。

やめてよ、もうやめてよ。

私は涙と鼻水で顔面をぐちゃぐちゃにしていた。

こんなの酷すぎる。

そして、反応の鈍くなった桐島聖涙に、『魔王』はこてん、と子供のように首をかしげ――多分、私を認識した。

「ひぃっ」

いや。

あの日の痛みが私を恐怖で縛り付ける。

また痛いのはもう嫌だ。

助けて。
助けて。
勇気なんて嘘っぱちだ。
ここ数ヶ月の平穏な暮らしが、私を鈍らせていた。
それはジャンが私を守ってくれたからだったのだ。
もはや庇護者はいない。
恐怖の穂先の痛みを鈍らせていた。
やっぱり駄目。
耐えられない。

逃げ、
逃げようとして、それは叶わなかった。
視界いっぱいに、黒い兜が押し迫ったからだ。もし『魔王』が呼吸をしているのならば、吐息が触れるほどに接近していた。

穿たれた真っ黒な空洞の眼窩に、エミリオ王太子の顔でにやりと嗤笑の形にいやらしく三日月型に吊りあがった口許。そこから闇色が溢れ出してこちらを侵食して来る気がした。槍が楽しげにくるりと回転する。

混じりけなしの、純粋な恐怖に私はがくがくと脚が震えた。眩暈と吐き気とが一緒くたになって、瞠目しきった目玉が今にも転がり落ちそうだった。
助けなど、期待出来ない。死ぬのだ。ここで、大した抵抗も出来ずに、簡単に、死ぬ。殺される。敵わない。助けてくれ。嫌だ。嫌だ。嫌だ！　目頭が熱くなり、生理的な涙が盛り上がる。
一切の雑音が消えて、モノクロームの中に放り出され、世界からは色と音が失われた。

なす術もなく凍りついた私の前で、『魔王』の指先が張り付いた

黒兜に触れ、それを外してみせた。

黒髪が額にぱらぱらとかかり、現れた顔に、私は。

「……ッ！！」

絶句して、押し付けられた槍の存在も忘れ、ずるずるとその場に座り込んだ。

呆けたままひりつく咽から、ようやくその名前を絞り出す。

「……だ……大輔……」

黒兜を左手に持ち、大輔の顔をした悪魔はにやりと生前そのままに笑ってみせた。

「さつきちゃん、ひさしぶり」

嫌だ。

絶叫したい衝動に駆られる。

止めろ。

違う。

大輔は。

死んだ。

吐き気。

パシン！　と大気が弾けた。

私は絶叫していた。

許せなかった。

あんまりだった。

もうすでに眠る人を、こんな風に貶めて。

取り残された自分たちがどんなだったか。

それを知らないで、『魔王』は大輔の顔を盗み取った。

大輔の顔で、私を殺す気なのだ。

酷過ぎる。

畜生。

畜生。

「なにいっているの？　僕、本物だよ？」

取り外した仮面に向かって大輔の顔をした『魔王』は首を捻ってみせた。

「だって、僕、エミリオ君の顔は盗み取っただけだったけれど、仁

王大輔本人だもの」

「左様で、左様で、ぎゃはははははははは！」

左手に持つ兜が急に喋りだした。

ぎょっとした私に、したりしたりと頷き、冷気に哄笑を爆発させる。

冷たい床に手をついたまま、私は鈍器で殴打されたみたいにガンガンと痛みを訴える頭で、今にも熱い液体が零れ落ちそうな涙腺を必死に抑制して、

「な……何を、言っているの……大輔は死んだんだぞ！」

めいっぱい叩きつけた。カカカカカカカ！　と兜が哄笑した。

「ひ～ひひひひ！　こいつ、無知にもほどがあるぜ！」

わからない、

何を言っているの。

ねえ、何を言っているの！？

「権限が委譲されたんだよ、おじょうちゃあああああんん！！

【養殖】は成功せりぃいい！　条件を満たしたのはお前だけじゃなあああああい！！！　におうだいしゅけくん！　おめでとう！

たんじょうおめでとうぅぅ！！！　優先権ナンバーワンのお前が権利をけったからああ！　だいしゅけくんが！　おめっでとう！　ハッピーバースデー！！！！！！！」

……条件。

なんだっけ？
魔王になれる条件。
は？
そう、だよ。
だって大輔も、大輔も殺されて、河に……あああああ！！！！！
私と、おんなじに！？
あのあと、私と同じにぃいいい！？
嘘。
嘘だよ。
あの子が耐えられるわけがない、耐えられるわけがない！！
だから。
ああ、大輔。
「親殺し、子殺し、友人殺し、悪意！　更なる悪意！！　悲劇！！！　仕組まれしものおぉぉおおおお！！　さいっこーのえんたーていめんとぉおおおおおおお！！　造物主は望んでいるゥッ　更なる悲劇をおおおっ」
黒兜はげらげらと笑い続けた。
――選択してください。貴女は、『魔王』と戦いますか？
ＹＥＳ
ＮＯ

## まおう（後書き）

精神的な残酷描写がきついとのご指摘がありましたので、紹介にダークファンタジーを追記させていただきました。

**せっしょく**

『死が老人だけに訪れると思うのは間違いだ。死は最初からそこにいる』

――

ヘルマン・ファイエル

ステンドグラスの『マギの、礼拝』が、三者を見下ろす。

マギは占星術の学者、博士、または王とも訳される。その数は正確には聖書に記述されていないが、伝統的に『東方の三博士』または『三王』とされる。

これは聖書（マタイ福音書）に『マギの礼拝』すなわち『三博士の礼拝』で伝えられる。

福音書に記述はないが、博士は伝統的に三人とされ、六世紀以降はメルキオール、バルタザール、カスパールという名まで与えられている。

また、メルキオールは一番年老いて老人の姿の賢者でアジアを象徴し、バルタザールは中位の年齢で壮年の姿の賢者としてヨーロッパを象徴し、カスパールは一番若く青年の姿の賢者でアフリカを象徴するとされる。

東側正面に、垂直状に高く天を突きながら曲線的に流れ連なる窓飾り（トレサリー）。

その尖頭アーチ状をした装飾的石の組子は、見るものの視線を上

へ上へと誘い込み、嵌め込まれた色硝子に、昼間の激しい陽光と違って月の静かな冷光をぼんやり滲ませている。

その為、真っ暗な堂内は、ステンドグラス越しのひんやりとした月明かりを石畳に投げかけられていた。

そして、幼子イエス（らしきもの）に礼拝する三人の博士たちの姿が暗い堂内に浮かび上がる。

ステンドグラスの光のにじみ（光滲）。

ぼやけたハレーションではなく、赤、青、白、黄、他――様々な色硝子たちは、色のひずみを透明な色を透過してくる光の視覚的効果により光滲の現象が織り成す神聖で厳粛な『場』を作り出す。

冷光を通して、ある色は弱まり、ある色は強まり、拡大しながら床石にバラの華を咲かせる。

赤硝子では光のにじみが弱まり、青硝子では強まり、黄色は中立的であり、黄色から赤を通して青へというスペクトクルの配列に従って変化した時には、濃いオレンジ色から淡いレモン・イエローに色がずれながら黄色を強めて行く。

ステンドグラスというものは、そもそも教会堂を明るくするためのものだ。

広い面積を占めるステンドグラスの色硝子（がらす）が、見る者にはっと清冽で峻厳な衝撃をもたらすためには、それぞれの色硝子が均一の明るさを保持しなければならない。

これは透明な硝子を透過してくる隣接の明るい光源に邪魔されていないという状況に依存する。

つまり、『暗い箱』である礼拝堂こそステンドグラスにとっては最高の環境になるわけだ。

美しい光景だ。

暗い箱の中に、広がる光の華。

そして、そぐわぬ地獄の光景の対比。

「ひ〜ひひひひ、盛り上がってまいりましったああ！！　ＢＧＭッゥ　すたあーあっと！！」

狂乱状態の黒兜があたかも指揮をふるうかのように、飛び跳ね回転する。

すると、たちまちどこからともなく地獄から湧き上がるような低く垂れ込めたモノローグ的序奏が始まる。

やがてヴァイオリンが激しい動きの第一主題を変質・破壊しながら奏しだす。

それは、フランツ・リストの『ファウスト交響曲』、第三楽章メフィスト。

ほとんど狂気の沙汰であった。

悪魔であるメフィストフェレスには彼自身の主題がなく、全てを破壊する性格を象徴するような第一楽章のファウスト主題や第二楽章グレートヒェン主題を変質変容させて行く。

「カカカカカカカカッ！　乗ってきたぜえええええぇぇぇぇぇぇ！！

『アレグロォゥッ・ヴィヴァーチェッ・イロニコゥッッ（急速で、

皮肉に満ちて）『！！！！！！！」

第三楽章は大きく分けて二部分からなり、前半は黒兜がと明確に指示した通り、皮肉に満ちた不条理性によって悪魔の力を暗示する。

第一主題の破壊を行いながら、激しく絡み合い、急転直下し、ドラマティックに高まり合うメフィストフェレスはファウストの影の姿でもある。

ただし、第二楽章グレートヒェンの主題だけは変質を受けずに回想的に流れ、その後気を取り直したかのようにメフィストフェレスは悪魔のワルツを踊りまくる。

そう、まるでこの場面のように。

「さあっ　踊ってみせてくれぇえええ！　選択してねっ　ぎゃっはははははは！」

舞台は整った。

あとは、お前の選択だけだ。

そう突きつけられた気がした。

「――な、何で。こんなの、選べって、そんな」

無残な旗折れは、経験しなければわからないものだ。

これ以上はない、と思ってもまだまだその底は伺いしれない。

人間の想像力など、所詮自分に都合のよい範囲でしか働かない。

「だい、すけ。やめて。もうやめてよ。元のあんたに戻ってよおおぉおおおお」

ぼたぼたと涙が零れ落ちる。
殺せって？
どうやって殺せって？
その力があったとして、どうして大輔を殺せるんだよおっ

「さつきちゃん」

大輔は、その声音は、いつものとおりだ。その姿は異様なものであったとしても。
全身を漆黒の鎧で覆い、兜も剣も黒く塗り潰し、紋章を刻むべき盾は無名。
黒騎士とは、すなわち、罪を犯した者か、あるいは、正体を隠す意志あり、というもの。
まるで大輔にそぐわない。そぐうはずもない。

「ねえ、さつきちゃん。君は神様を信じる？」

何、何なの。
いるわけない。

いや、『いる』。

神は。
その残酷な神は。

「僕は信じているよ。世界のクリエイターとしての神をね。
神という名の創造主、世界のデザイナー、宇宙のメーカー。
第一の日に、『初めに、神は天地を創造された』と聖書にばっちり書いてあるじゃないか」

ねっ、と無邪気に笑うその顔に、私は――もはや狂気以外の何ものも感じなかった。

「神は宇宙の外にいて、僕たちを仔細漏らさず観察しているだろうね」

大輔はぺらぺらと喋りだした。
そう、生前の彼とは似ても似つかぬ言葉を吐き出し続けた。
大輔はこんなこと、絶対言わない。
でも、私もせめて会話が糸口になればとぎこちなく返す。

「――最後の審判で救うべき人を選別するために？」
「さあ？　クリエイターとしての情報収集じゃないのかなあ。そういえば、面白い学者がいたよな。『ラプラスの魔』を提唱していただろう？」
「――宇宙の絶対観察者というやつ？」

最近読んだ本にその手のネタの話があったと、適当に話を合わす。

「そうそう。あはは、あれ面白いよねえ。
宇宙の膨大で刻一刻と変化する情報を瞬時に収集して、そこから誤差のない計算によって、未来を完全に予測する存在。
じゃあ、『ラプラスの魔』は僕の感じる神さまだねえ」

古典物理学では全ての物体の位置や運動は、十分な精度の情報さえあれば、その次の位置や運動を測定・予測出来るとされている。

例えばボールを投げた時に、物体の現在位置と速度が分かれば、次の瞬間における物体の位置と速度も計算によって完全に予測可能

だというのである。ならば、この最初の状態を元に、次々に計算を繰り返して行けば、完全に未来を予測することさえ計算上可能になってしまう。

しかし、この計算方法ではどうしても誤差が出て来る。刻々と変化する環境に合わせ、同時に変質して行く膨大極まりない情報を、人間が一切の誤差なしに計算出来るはずもない。

ならば、もしこの誤差をなしに計算することが出来る存在がいたとしたらどうだろう？　仮に膨大な知識と人智を超えた天才的計算力をもった超生命体がいたとしたら――？　その想像上の超生命体――悪魔こそが、学者ラプラスが提唱したいわゆる『ラプラスの魔』なのである。

この悪魔は宇宙の全ての情報を一瞬にして把握することが出来、微小一単位の変化にすら対応して、全ての未来を一切誤差のない計算により完全予測することが出来るとされる。

この全能なる悪魔を仮に神と同義におくならば、悪魔＝神自身はこの宇宙に存在しないとされる。彼は、宇宙の外に存在するというのだ。もし悪魔＝神が宇宙の中にいれば、自分自身もその計算に入れなければならず、神自身は自分自身を計算しつくすことは出来ない。

ラプラスの魔とやらがもし本当に存在するならば、この世界と元の世界に巻き起こされた不可思議で恐ろしいドラマの終焉をも、その全てを見通すまなこにより完全予測しているだろう。

「ほら、一時こういうのはやったでしょう。

世界というのは万物全て可能性って考え。可能性が収斂して、固

定の未来になるって。
だから、可能性がある限り、世界は無限に存在する。
その一つ一つの世界に、僕たちはまた可能性として無限に、同時的に存在するんだ」

どこかで聞いた話だ。この間読んだ本は、まさにそのネタ本だった。
素人考えの陳腐で稚拙な三流本だと流し読みしてしまったが、大輔は読み込んでいた。

「聞いたことはないかい？　阿片を決めた男と、山奥で踊り狂っているどこかの原住民が、薬の力で法悦高まって、ぶっ倒れた。
倒れている内に、精神が肉体から抜け出し、互いに相手の姿となって、生まれてから死ぬまでを夢見た。
ふと目が覚めて、互いに言ったものさ。『俺は、今まで別の男の人生を生きていた。たった今、死んだところだ』ってね」

怖い。大輔、怖いよ。
もう止めて。
お願い。

「ぎゃはははッ、ごっしゅじん、それ。怖い話ですねえッ」

嗚咽で声が出ない私に代わって、黒兜が合いの手を入れる。

「違う違う、これは怖い話じゃなくて、可能性の話だ。
人は同時に複数の生を生きている。A世界の俺、B世界の僕、C世界の私、更に無限の世界に存在する自分。
それが薬物や宗教の力で、ふとした拍子にそれぞれの世界の『境界（ボーダー）』を越えてしまうのさ」

ねっ、さつきちゃん！　と輝かしい笑顔の大輔に、私はもう全身の悪寒が止まらなかった。
大輔の顔をしている。
でも、これは。
大輔じゃない。

「さつきちゃん、しっかりしてよ。まだ導入だよ、ラスボス前の意味不明な問答は様式美だよっ　僕、がんばったんだよ！　どうかな？　どうだった？　及第点？　ねえ、がんばって、これから殺しあわなくちゃ！」

明るい。
大輔は底抜けに明るい。
どこか、大事な螺子が一本飛んで、人であるためのものが欠けてしまった。
そんな風にしか思えない、あまりにも異常な明るさだった。
陽気に狂ったメフィストのワルツが、不安をかきたて、恐怖を煽り、思考を乱す。

先ほどから、頭の隅で聞こえていた『選択してください』の声が、だんだん大きく、大鐘を鳴らすかのような大音響となっていく。

――貴女は、『魔王』と戦いますか？

ＹＥＳ　ＮＯ
ＹＥＳ　ＮＯ
ＹＥＳ　ＮＯ
ＹＥＳ　ＮＯ

止めて。
選べって、どうやって選ぶんだよ！？
イエスを選べと？　無理だ！
ノーを選べと！？
桐島さんを見ろ！
彼女を助けなければいけない！
でも、言葉を尽くしても、この大輔にはきっともう通じないよ……どうしたらいいの。
どうすればいいの？
選べないよ。
選べるわけが……

その時、かすかに、ノイズが聞こえた。
そう、本当に小さなノイズ。

――ジ、ジジ。ジ。外部、接触有り。ゲート、急速老化するユリア姫（発狂中）。秘匿された情報開示されます。
――『王族の演技』『王族の助力（彼らは元プレイヤー）』。
――『思いがけぬ裏切り（愛する者）』。
――『折れた心（選択せざる者）』。
――『アンチ・プレイヤーである盾（それは身の証）』
――『槍――災いの一撃（未然）』
――『聖杯（攪拌中）』
――『収穫前（我々は原料じゃない）』
――『見えざる敵（秘匿）』
――『敵の敵は味方（誓い）』
――『奪還の意思（過去から未来へ）』
――『鋼の心（選択した者）』
――『外（？）』
――隠しルート選択できます。外部から接触。外からの助けを呼

びますか？

何？

え？

このシステマチックな音声は、いつもと様子が違った。

あの人をおちょくるような嘲りがない。

そう、本当に機械的で、何の色もない。

――異分子。内部接触有り。バーロウ家が接触中。侵入開始、エラー。エラー。エラー。内部呼応要求中。エラー。エラー。

――選択してください。ユリア姫急速老化中。ゲートが閉じます。

私は、本能で。

そう、本能的に、『盾』を展開した。

ばりん、と何かが壊れた音がした。

――

『不実な友をもつくらいなら、むしろ敵を作るがよい』

シェークスピア

## せっしょく（後書き）

フィクションです。ほとんど嘘っぱちなので、その点ご理解ください。

## スタート前欄外上等2

――二×××年　　佐々木さつき

専門家チームとやらは、オカルトがかっていた。
歴史、暗号学、心霊学、電子工学、とにかく際立ったその筋の識者が顔を付き合わせたのである。
チームは、背景を探る者と、直接ゲームを解析する者とに分かれて作業している。
私は、ある程度過去の体験を元に解析チームに助言しつつ、同時に事件の背景について辿っていた。
イギリスの名門バーロウ家の分家筋というアレグザンドラ・クリスティをオフィスに招き、大変美味しいと有名な佐々木式コーヒー（某洗練されない同僚曰く神と悪魔が両方見えるようになるという）を振舞って私は尋ねた。

「聖槍が、この事件のキーワードなんですか？」

驚くべきことに、この聖槍については、米国は世界大戦時から折込済みだった。
つまり、アホか、と一蹴されない程度に、両国家間において認知されている事柄だったのである。
ぐるぐるうずまき眼鏡とやらを現実に身に着けた変わり者のアレグザンドラ・クリスティ女史は「んだんだ」と頷いた。
「アリマタヤのヨセフがイングランドに持ち込んだっつう槍ね。
因みに、同時期フランスにも持ち込まれらしいし、ローマにもあ

るっていうし、オーストリアも一本所蔵しているし、世界中にあるぞい。
現存していて、確認が取れるもんだと、一番近いのは」
「ハプスブルク家所有の『ロンギヌスの槍』かしら？」

ロンギヌスの槍とは、ローマの百卒長がキリストの死を確かめるためにその脇腹を刺したと伝えられる聖槍である。
ロンギヌスは、この百卒長の名前から来ているとも、『長い』という単語から来ているともいうが、本来の出自は不明だ。
私はすかさず合いの手を入れ、顎に指先を当てて考え込んだ。
「現在オーストリアのホーフブルク宮殿に保管されているわよね……」

それがなんだというのだ？

「あんなもん、ただの棒切れでしょう。まあ、棒切れ一本に必死こいて目玉血走らせて探索させたのがいたんですっけ？
ヨーロッパ全土を支配しようとして夢破れたナポレオンよね」
「あんた、よくご存知だねえ」
「色々私も調べたの」

だけど、と半笑いに吐き捨てた。

「くだらない。聖槍だの聖杯だのを手に入れた者は、世界を手にする力を得る？
どれだけアホな権力者が本気になって踊らされたか、冗談と思っていたけれど、記録を辿るとかなり笑っちゃうわね。米国はWW（ワールド・ウォー）から参戦ってことは、新参者ってことかしら？」

その棒切れ一本に、米英両国血眼と言わないまでも、認知して重要性を認めているというのだから、全く世の中何が起こるかわかったもんじゃない。

「そもそも聖杯伝説なんて、中世の騎士道物語からキリスト教布教の意図も絡んで聖杯探索譚に色つけたのが始まりでしょう。

その上、死体を放り込めば翌日蘇るケルトの大釜の神秘性なんかを取り込んだ辺りから一人歩きが酷くなったみたいだけれど」

「ああー、皆夢いっぱいに欲を託して、大判振る舞いで聖遺物に世界を支配する力だの不老不死だのオプションまでつけたもんなあ」

アレグザンドラはうんうんと頷く。

私は、はっきり言って人間の夢見る気持ちとやらにあきれ果てていた。

このクソまずいコーヒーよりも酷い。

「そこまではいいわ。ただ、本当にそれがどこかにあると信じて探索させる人間が出たのは本末転倒でしょう。

物語の中のアイテムが現実を侵食する形で逆流ってわけ？」

「人は強欲だからねえ。自分の見たい夢を見たいように見るだけで、ただの杯も棒切れも大した聖杯や聖槍にしちまうもんだ。

ただそれだけだ。とはいえ、その欲はらせん状に発展して、惨禍を起こす、それは歴史が証明してんだあ。

ただ、あくまで人の欲にまつわるもの、そのはずだったんだがなあ」

ぼりぼり、と爆発気味の頭をかくアレグザンドラ。だんだん彼女のなまりは酷くなっていく。初対面の緊張感が失せていっているのかもしれない。

「憑りつかれた人間は、何を起こすか分からんものなのよう。
別に魔法だー幽霊だーって話じゃないのんよ。
これって、日常でもよくあるレベルの話。
その物に力があるわけじゃなくて、その物に力があると思い込むだけでも、人間ってのは、正負問わずにがんがるもんよ。
たとえば、護符（おまもり）に力があるわけではなく、護符を有する人間がそれに力があると思って、明るい気持ちで努力する。すると、努力の分だけ暮らし向きがよくなって、それは護符の力だと思うわけ。
それって鶏と卵のどっちが先問題なんね。
護符のおかげなのか、その人自身の力なのか、どっちも理由足りえるのよ。
だけど、因がなんであろうと、果である『効能』『ご利益』という結果は残るわけ。
護符の由来がすごければすごいほど、人間の期待は高まるんよ。
つまり、『イエスを刺し貫いた槍』に多くの人間が夢見たわけよ。
それって大変なことなのよ。
共有された幻想の力は、時に暴発するなのよね。集団パニックとか、あれ、周囲に伝播・感染するでしょ。そんな感じぃ。
その意味で、今回仮想欧州が舞台であるゲームが媒体になったのは納得なわけなのよ」

今かなり間をすっ飛ばして結論に至ったな、こいつ。
何が納得なのか、私にはわからない――わけでもない。
ＶＲはある『感染』の非常に有力な『媒介』になり得る要素がある。

「伝播すべき媒体――近年になってきたのは、マス・コミュニケーションね。伝播するのは情報、記憶、そして『みえない因子』。
本来、伝達されるのは言葉や文字、画像や映像や音、聴覚視覚にうったえる情報よ。

だけど、もっと直接に人間の脳に情報を叩き込む方法が確立されて、それが若い世代に広がっている。ＶＲＭＭＯ。本来感覚器官への刺激を通じて得る五感視覚聴覚嗅覚味覚触覚。ＶＲは感覚器官への入力ではなく、人間の脳を直接に騙してしまうわ。

そして、究極的に、私たちの脳が外界を認識するシステムは『現実』と『仮想』を区別していないとも言える。

極論でいえば、目覚めぬなら、夢だとしてもそれが現実。つまり、仮想現実は現実なの」

「んん、まあ、最終的に、全部中枢系たる脳が処理すっから、そうなんのね」

「情報処理上、『仮想』であろうと脳にとって現実であるという極論においては――あのくそったれな世界も現実と定義できる。あれがこの世界の作ったゲームの世界なのか、それともどこかに存在する異世界とやらなのか、関係なく、現実なの。

そして、そこで『死』ねば、『死』ぬ。

『死』なないのは、『死』ななかったと、システムが脳を騙すからね。

本人が諦めない、納得しない限り延々のループ……」

「システムはアシストしてるんね。ともあれ、貴女のいう世界は、仮想欧州の舞台なん。つまり、とても強固に私たちの現実世界とリンクしているんよ。

いわゆる、『共感魔術』なんよ」

知らぬわけではない。疑問視する声も多いが、十九世紀イギリスの社会人類学・神話学者フレイザーが唱えた理論である。

その代表作『金枝篇（Ｔｈｅ　Ｇｏｌｄｅｎ　Ｂｏｕｇｈ）』を知る人も多いことだろう。

「『接触したもの同士には、なんらかの相互作用がある』、ね」

あの酷い体験を通じて、私はその手の本にも多く目を通した。

「フレイザーはそれを著作の『金枝篇』において「共感呪術（Ｓｙｍｐａｔｈｅｔｉｃ　Ｍａｇｉｃ）」と呼んでるのんね」

『共感魔術』。

この骨子は二つ。

ひとつは、『感染の法則』

ひとつは、『類似の法則』

前者『感染の法則』においては、「以前相互に接触していたり、ひとつであったものは、わかれたあとでもつながりが継続している。よって、現在離れていても、片方に起こったことは、もう一方にも影響を与える」とされる。

この法則を使った呪術を『感染魔術（Ｃｏｎｔａｇｉｏｕｓ　Ｍａｇｉｃ）』という。

たとえば、呪う相手の大切にしているものや、その相手の肉体の一部（以前接触していたもの、ひとつであったもの）を燃やしたり痛めつけることで、相手もまた苦しむ（影響を与える）という術である。

後者『類似の法則』においては、「類似するもの同士においては、なんらかの相互作用がある」とされる。

これは、接触の内容は問わず、物理的接触に限らず、意味的接触においてもよいとする法則である。

つまり、類似する（似た）もの同士の間には、相互作用があるとするものだ。

この法則を使った呪術を『類似魔術（Ｈｏｍｏｅｏｐａｔｈｉｃ Ｍａｇｉｃ）』または『模倣魔術（Ｉｍｉｔａｔｉｖｅ Ｍａｇｉｃ）』という。

例えば、ＡがＢという現象を起こしたい、と思った時、Ｂ現象の模倣をすれば、Ｂという現象が本当に起こるという考えに基づく呪術である。一例として、雨が降るという現象を真似ることで、雷雨を招くと信じる雨乞いの儀式などが考えられる。

逆に、Ｂを真似たＡ自身に影響を及ぼそうとすることもある。ＡがＢの模倣をすることで、同様の性質を獲得しようとするものだ。

具体例としては、誰かのようになりたいと己に施す『メイク』などが考えられるだろう。

非常に広範囲で応用や併用のきく呪術のパターンであり、我々が日常にふるまう行為にちりばめられているとも言える。

「――あの世界が、この世界を模倣する『呪術』だっていうの？」

むしろ笑い出したいような気持ちで、私はカップを手に尋ねた。

あの世界での惨劇は、この世界にも影響を及ぼす。

今回の殺人事件とやらも、『現実』と『ゲーム』の世界の区別のつかない世代が起こしました、とそれが真実国家の見解だとしたら、これこそお笑い種の現実（リアル）というやつだ。

だが、バーロウ家が密かに台頭しているように、この世界も大変リアルなファンタジーと言えるだろう。何しろ国家公認だ。

「逆かもしんねえよ」

「ありえるわね。で、誰が？」

そう、誰が？
術とは、行使するものがいてはじめて成立する。
そして米英が大戦時から、あるいはもっと以前から捜索している『槍』について、どうからむと？
んー、とアレグザンドラは頭をがりがりかいた。
「私が呼ばれた理由の第一は、うちの本家ってば、イギリスの聖槍の管理者なんのね。
アメリカ側も折り込み済みなんなけど、せーじ的なあれこれがあって、本家が出る前に米国籍の私が呼ばれていわゆる架橋的役割を期待されとるん。
その本家の関知せざるところで、『槍』を手に入れた者がいるのんね。そもそも、『聖槍』は魅せるものなん。
人が槍を選ぶのか、槍が人を選ぶのか、分からんのんよ。
本家筋の者は、本来聖杯城に閉じこもるものなん。
危険だからね」
周囲が、と女史は残るコーヒーをがぶ飲みした。
それ、おいしいのか？
「危険って？」
「本家筋は、キャリア――槍の影響力の保因者で発病していないが感染力を持つ者なのよ。槍に耐性を持った連中なのね。
この槍については、不明なところも多いけれど、周囲に低レベルで欲望の発露、高レベルで目に見える異常な怪異を引き起こすというのは、過去に証明されているのね。
ゲームという媒体を通じて、核になっているのは間違いないのよ。
この共有される幻想を、現実に影響を及ぼすほどにする術具とし

て使用された、というべきなのかな。
その辺は不明。
ただ、槍の機能的に、何かと何かを『貫き結び付ける』という概念上、有りうべくして有りうることなのさ」
「――核」

ふと私の頭に浮かんだのは、プロファイリングの検証法の一つである。
犯人が被害者を選ぶ時、そのポイントとなるもの。
――犯人の頭の中には生々しい妄想が現実と不可分になっていて、被害者は犯人のその妄想に最も近い人間が選ばれているはず。
ならば、核＝犯人の妄想ともっとも近いもの、それがあのゲームなのか？

「ゲームはあくまで『感染』媒体なのね。今回の殺人も。仮想と現実の区別がつかなくなった輩が犯人ってオチなわけ？　文字通り、何者かの『殺人衝動』に『感染』したあくまで病気ってことね」
使い古されたマスコミの聖句に、「んだんだ」とクリスティ女史は激しく頷いた。

「あくまで、ゲームは媒体と考えてよ。必ずそこには人の意思と欲望があるのね。今回も、故意に撒き散らした馬鹿がおんのね。それを突き止めないとあかんんてな」
「実地でやるつもりよ――講釈をどうもありがとう。ぜひ本家の方ともお会いしたいわね。いずれお出ましでしょうけれど」
「んん、わがんねけど、貴女は唯一生存者（サヴァイヴァー）だからね」

指摘され、私は笑顔が引きつった。散々日本でも言われた。だから、私は出生地がたまたま米国であったため、二重国籍者であったが、最終的に米国籍を取得したのだ。

日本には、いられなかった。

指先が小刻みに震える。

誰が？

なんのために？

再度問う。

共感呪術。

妄想も現実になり得る。あれは現実だ。

「――『何かに起こることは、似たものにも起こる』」

私はじっとマグカップを睨み、人差指で弾いた。

限られた世界の小さな黒い海は、私の一弾きでさざなみを起こし震えた。

## スタート前柵外上等２（後書き）

フィクションです。嘘八百です。

**せいたん**

――バーロウ家とリンク。侵入第一フェーズ……クリア。転送します。第二フェーズクリア。『Ｔｈｅ　Ｂｏｏｋ』の転送可能です。

暗い箱である礼拝堂に、光が差した。

一瞬そんな錯覚があった。扉は開け放たれている。

八王子夜音。

彼だった。

「ぎゃっはははは！　御大のお出ましってか！」

跳ね回る黒兜を一瞥し、八王子夜音は、周囲をぐるり見渡すと、口元に笑みを浮かべた。

「お出ましはそちらだろう。僕を隔離してくれてどうもありがとう」

「うっとぉおおおおおしいいいいいいいいいいいお前は舞台にふさわしくなあああああああああい！！　その辺で犬畜生とじゃれてろっと魔王陛下は仰せであるうううううう！」

「僕をのけ者にして、さぞ楽しい舞台見物だっただろう？　だけど、罠にかかったのはどちらかな？　絶対に主賓は『見物』にお出ましだと思ったよ」

ざわ、と空気が動き、八王子夜音は、いつの間にか携えていた一

冊の黒い『本』を開いた。
黒兜が「まさか！？」と宙に固まる。
「なぜそれが持ち込まれ――止めろおおおおおおおおおぉぉおおおおおお！」
黒兜は焦ったように絶叫する。しかし、
「ビショップ！」
その声は堂内に鋭く響いた。それからは何もかもがゆっくりと停滞して時間が止まっているかのようだった。
彼は本を右手に持っていた。開いた本から、黒いリボンが何本も螺旋状に虚空へと巻き上がる。
リボンが見えない人物の体を取り巻いていくように徐々に人の形を作った。
「行け、ビショップ」
彼は静かに命じた。
本から現れた非生命体は、漆黒の――いや、鈍い金色の冠帽と暗紅色の法衣を来ており、ビショップという呼び名の通り聖職者の格好をしていた。顔と思しき部分は、マネキンのような白い無地の仮面で覆われている。
その手には錫杖を携え、一気に正面部のステンドグラスまで跳躍した。

頭上を肩にかけた金色の房のついた細長い首掛け（ストール）が彗星となって尾を引く。どうしたわけか、縫い取られた十字のシンボルと、黒と金の対比が鮮やかに目蓋の裏に焼きついた。

ビショップと呼ばれた正体不明の何かは音もなく空中の見えざる舞台に降り立ち、す、と錫杖を構えた。

その時、私は確かに見た。

マギの礼拝。

描かれた三人の賢者たち――それぞれ幼子イエスに、黄金、乳香（燃やすとよい匂いのする樹枝）、没薬（もつやく）（死体を埋葬する際の防腐剤）を贈り物として捧げもつ、老人と壮年と青年。

『死』を暗示、象徴する贈り物を持つ男。

そのステンドグラスの男が、ぎろり、とビショップを睨む。

「――ッ！？」

悲鳴を飲み込む私の前、ビショップは、色とりどりの硝子を――錫杖が正しい者の峻厳さで断罪する。

「そうだ、『没薬』は将来の受難や死を象徴する贈り物だ」

八王子夜音が静かに告げる。

「粉砕しろ――『死』すべき男を」

ステンドグラスにくもの巣状の輝が走り――ぼっと青白い炎に包まれた。
同時にまるで動脈からほとばしる鮮血か、黒いインクに似た闇色が凄まじい勢いで放出し始める。
霧状になったその黒い液体から、一人の青ざめた男が姿を現した。色あせた黒髪の男だ。
途端に、大輔の顔をした『魔王』は、がくん、と膝をつき、まるで人形であるかのように動かなくなる。
いったい何が起こっているのか。
現れた男は、ぼたぼたと黒インクのような液体を拭きこぼしながら、うれしげに顔面を歪めた。
まるで憧れのスターに会えた少女が歓喜するかのように。
『あああああ、お懐かしい。あなたは、バーロウ家のお方。私の憧れ。永遠の生。私はあ、貴方がたになりたかった。そして力を手に入れました』
男はにやりと笑って、その手に没薬ではなく、槍を握っていた。
『懐かしぃのブレッチェリー。色鉛筆、グラフ。ドイツのシャークどもぉおおお。私は、エニグマ暗号を解析しぃいい、後にぃ、ドイツ帝国の財宝を手にいれました』
ロンギヌスの槍ぃ、と男は愛しげに槍の柄に指を何度も滑らせる。
『貴方はきっと私のことなど覚えておられぬでしょう。特別な貴方

がたの特別で長い生の中でぇ、たまたますれ違いぃ、とおりすがった路傍の石とだけしか思っておられぬでしょう。でも私は忘れられなかった。貴方は特別な方だ。貴方がたは、特別なのだ』

凡庸、平凡、何者にもなれぬ生。

そう、男は呪詛した。

『何者でもない、何の力もない、ただ老いて行く。そんな人生など耐えられぬ。私は特別になりたい。私はっ　私は貴方がたになりたいっ　槍の守護者！　選ばれた者ぉおおおお！！！　そして槍は私を選んだのだあああぁあああ！！！』

私には意味がわからなかった。

ただ、男が、凡庸であること呪い、死ぬほど唾棄し、今ここに存在しているということだけを理解していた。

彼は何者なのだろう。

一体この世界にどう関係するのだろう。

ただ、本能だけが、この男が『根源』であろうと警鐘を鳴らす。

いや、正確には――その手に持つ『槍』の形をした何か。

「――憐れな」

八王子夜音は痛ましいものを見るかのように目を眇めた。

違う。

違う。

そう私は直感でしかありえない否定を即座に思い浮かべる。

もっと年老いてもっと叡智に近いもの。

八王子夜音じゃない。

彼は――何？

「槍はお前を選んだのではない。お前は槍の媒介になったに過ぎない。槍はシステムでしかない。その本性（ほんせい）は、長きもの。攪拌するもの。刺し貫かれたイエスの血を受けし聖杯。乳海攪拌によるソーマ、アムリタ。泥を攪拌して大地を形作りし天（あま）のぬぼこ。あるいは蟲毒。世界中に散らばる『接触攪拌し、作り出すもの』の概念形態だ。お前はただ苗床になったに過ぎぬ」

八王子夜音の姿をした何かは呟く。

「槍はただ生み出す、己の果たすべき使命の形、もっとも最適な環境を。お前の願いとこの仮想欧州はとても相性がよかった。この世界は概念世界である。人々の精神が交差する世界。もっとも霊性が高まりやすい世界。槍は攪拌を望んでいる。この多重に交差する世界において、非常に効率的なシステムを確立した。人々の魂を投げ込み、極限状況に置き、生と死を繰り返させ、最も『霊性高いもの』を作り出す。勇者に魔王か。すなわち、どちらでもよい」

槍にとっては――と彼は笑った。

「お前は、ただ槍の『キャリア（運び手）』になっただけ。システムをアシストしたに過ぎない。つまり、交換のきく歯車に過ぎん」

酷く、嘲るように彼はいい、対する男はぽかんとした次の瞬間、

『お、おおおぉおおおおぉｏｏｏＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯｏｏｏｏｏｏｏＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

絶叫した。
否定された怒りと羞恥と原色の感情に翻弄され、己の姿を保てぬほどにねじ切れた。
私は、わからないなりに、八王子夜音の言葉を必死に噛み砕いていた。
このわけのわからない世界。
この酷い世界。
地獄のような世界。
私たちをぶち込んで、チーズを作るようにぐるぐる攪拌して、そして、そして――
勇者を。
魔王を。
つくる？
何？
わたしたち、は。
原材料？
純度の高い液体を作るために、フラスコを火であぶり、何度も何度もろ過させる実験をしたことがある。

ああ、あれか。

あれかよ。

は

ふざ、

っけるなあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！

そんなわけのわからないことのためにぃッ

わたしは、わたしはあああああああああっ

思い出す。封じていた蓋がずれる。マグマのように噴出す。

閉じ込めていた『それら』が生誕の産声を上げる。

にくい。怖い。あいつらを！　あいつらをぐちゃぐちゃにしてやりたいッ

許せないッ

許せるもんかッ

全部嘘っぱちだ！！！！！！

許せるわけがないッ

抑圧して、必死に忘れたふりして、押さえつけて押さえつけて頭を下げて小さくなって、私は無害だというふりをしなければっ

そうしなければ！

あっという間にこの世界に潰されていたんだ！！！！！！！

殴られた。蹴られた。叩き折られた。何度も何度も何度も切り付けられ、笑われ、また切られて、刺し貫かれて。

引きずり倒され、頭髪が抜けるほどに痛めつけられ、悪夢の『沸き』を体験し、腕を切り落とし、歯を何本も折り、

あれをぉおおお、どうして忘れられるんだよおおおおおお！！！

がくがくと身体が震えてきて、私は座り込んだまま痙攣する手指で石畳に爪を立てた。

頬を次々に熱い涙が滑り落ちて来る。

無害な自分、誰も恨まぬ自分、世界に敵対せずに頭（こうべ）を垂れる自分

――役割演技（ロールプレイ）しなければ、生きられなかった。

わたしは、

わたしは、

わたしはぁあああ！！！

こんなわけのわからない理由のためにぃ！！！

凍りついた大輔の姿がぶれる。
黒い鎧が空中に気化するかのように解けていく。
そして、それは。
『わたし』の元へと。

――『沸き』の時、は来(きた)り。

**ほん**

怒りと。
怒りと。
憎悪と。
悲しみを。
絶望に混ぜたら、こんな涙の味がするのだろうか。
こんな色になるのだろうか。

私の中に入り込んでくる『それ』は懐かしく、禍々しく、そして――とても哀しかった。

『おめでとうっ　おめでとうっ　ハッピーバースデー！！』

視界の片隅に、壊れかけた黒兜が飛び跳ね回っているのが見えた。

心も身体も悲鳴と歓喜の声を上げ、やがて『作り変えられる』。
おそらく私は『咆哮』している。とても醜い。美しい。ああ。
気分がいいとか、悪いとかの問題じゃない。

人間性を圧倒的『システム』補助が恐るべき速さで削り、引き剥がし、欠如させて行く。
生まれ変わる。

だから、私は決めた。
そうだ、全部滅ぼそうと。

なぜなら、それが『魔王』であるものの『役割演技（ロールプレイ）』だから。
疑問の余地などない。

そうしなければならない。

そうすれば、私は――

「――いけません」

誰かが、私を背後から引きとめた。

『彼』は、今寝ているはずだった。何故、と思うことも今の私には酷く億劫だった。

その二本の腕は、生まれ落ち行く新たな『魔王』を抱きしめ、不浄の媒介に『感染』していく。

つまり、腕がぼろぼろとすさまじい速度で腐食していく。

それでも、その腕を放そうとせずに、

「いけません。この世界に囚われてはいけません。貴女は戻ってきてしまった――何故」

彼は腐り行く己の体を省みずに言う。

「不浄は私が全て引き受けます。――さつきちゃん、もううちに帰ろう。君だけでも」

私は。

私は。

絶叫していた。

ぱたぱたと、ドミノ倒しのように全てがつながっていく。

大輔。

大輔だったんだ。
ループしている。何度も何度も繰り返す。
だから。

同一人物が。
同じ時間上に。
何度も繰り返し、年経た『彼』が、私を助けてくれたのだ。

――イベント発生。『愛する者の自己犠牲』。佐々木さつき、『統合』されます。
――『佐々木青光石（らぴすらずり）』が『佐々木さつき』に上書きされました。

止めて。
私は叫ぶ。
心底願う。

これは『二度目』。
私は、初回じゃなかった。

同じことが、同じことがあったの。

初回、『佐々木青光石』だけが、帰って来た。
この世界での出来事は、現実に影響を及ぼし、当時の日本では異常な殺人事件や事故が多発していた。
それは目に見える氷山の一角でしかなく、ほかにも多くの『怪異』があったのだろう。
有体に言えば、私のクラスは、私以外死亡した。
修学旅行中のバスの事故。唯一生存者の女子高生。
しかも、その事故があまりにも異常だった。
バスは、突然ひしゃげた。ぐちゃぐちゃになった。まるで無邪気

な子供が、粘土で出来たバスの模型を笑いながら丸めたように、原型がなくなるほどに破壊された。
その異常な『怪異』の唯一の生存者、それが私だった。
世間は面白がり、揶揄し、同情し、怒り、あざ笑い、『一人だけ生き残った現在の心境はいかがですか？　哀しいですよね？　亡くなったお友達に何か言いたいことはありますか？』とマイクを差し向けた。
言いたいことってなに？
何を言えばあなたたちはまんぞく？
私も死にたかった。
（わたしだけが――）
酷い精神状態で放った一言が、私の意図を越えて、あちこちに飛び火し、同情すべき存在から今度は不謹慎で自分勝手、命の大切さの分からない、残った遺族の気持ちを考えぬ発言と、その『祭り上げるべき存在』に塗り替えた。
『今どんなお気持ちですか？』
『この前の発言、恥ずかしいと思わないんですか？』
『残った遺族の気持ちを考えたら、とうてい口に出来ない台詞ですよね？』
『佐々木さん、性格わるっ』
『普通ああいうこと、いえる？』
『××が死んで、何であいつが――佐々木が死ねば良かったんだ！』
『辛いんですね、分かります。ところで、あの日一体何が――』
『天国のお友達に伝えたいことは？』
お前ら、全員地獄に落ちろ――
その顔は。
その多くの顔は。
まるで真っ白な仮面に三日月の形にゆがむ目と口元が大量に湧き出たようにしか見えず、私は日本にいられなかった。
遺族は糾弾した。

何故、自分の子供達が死に、私だけが生き残ったのかと、涙ながらに責められた。
私は返す言葉がなかった。
全員死亡すれば、皆悲しんだだろうが、こんな思いに苦しめられることもなかっただろう。
たったひとりの、不自然な生存者の存在は、彼らの『何故』という思いに火を点けてしまった。
大輔は、帰ってこなかった。
それから、私は――『佐々木さつき』に改名し、米国に渡った。
時が経ち、米国でも恐ろしい事件が起こり、過去の『あれ』が関わっていると知って、私は再び身を投じることを決めた。

ヨーロピアン・オンライン。

私は自ら志願して、再び、この世界に来た。私以外、誰にもその役目を譲るつもりはなかった。上司の強固なプッシュで、私は唯一背生存者として、再びこの世界に帰って来た。
プロジェクト・チームは、私をアシストしてくれるはずだった。

だが、この世界に再び取り込まれた私は――あの悪夢の日に生きた『佐々木青光石』を役割演技（ロールプレイ）していた。

何故なら、この世界は――まだ、『あの日』を。まだ、『あの日』の『彼ら』が繰り返していたのだ。
終わりのない世界を――
そして、多分、私も終わらないあの日の登場人物として、外部侵入した瞬間、取り込まれたのだと、そう理解して。

私は、『彼』を、

また、『彼』を犠牲に、自分だけ、助かるの？

八王子夜音――だったもの。おそらく、今『バーロウ家』が彼をジャックしている――

彼が、その手に『黒い本』を開く。

あれは、『バーロウ家』の切り札だ。古今東西、『魔』の封じの『壷』や『ランプ』や『鏡』である、うつろなるものが存在する。バーロウ家はそれを所持している。多くの『怪異』を生み出すもの、あるいは『怪異』を封じるものを蒐集する一族。

それがバーロウ家なのだ。

本が燃え上がる。

青色の燐が八王子夜音の腕を伝い、吹きこぼし、真っ黒な触手のような手が何本も何本も沸いて出る。

「物語は閉じなければならぬ。この不自然な世界もまた」

闇の触手は確かに『男』と『彼』を捕食すべきものとして認識し、その矛先を一斉に向けた。

『AAAaaaaAAAAAAAAAAAAAAAooooo
oooOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!

！！』

まずは、槍の不当な所持者である青ざめた男を。

『嫌、嫌だあああああああああああああああぁああああああああああ！　私は、特別になるのだっ　貴方がたになるのだっ　私はあああああっ！！！』

ごうごうと風は逆巻きながら黄泉路へと続く暗黒の穴に吸い込まれていく。

『男』の次は、『彼』を、闇の触手は捕らえる。
魔王は、この世界のゆがみと不浄の集大成だ。
ある意味核そのものといってもいい。
これを残して、世界は閉じられない。

私が背負うべき不浄を一身に引き受けて、腐り行く『彼』。
ずるり、とその片方腕が床にもげ落ちる。
私は必死に彼の残った指を握る。背後から抱きしめられて、顔が見えない。

止めて。

動けない。
私は、動けない。
その場から、動くことができない。
がらがらと引きつれて、声が出ない。

「――て」

止めて。お願い、抵抗して。

い、や、だ。

闇はしとどに私の手を濡らし、なお溢れ出して床を黒く染め、体中黒く汚染された。目頭が熱くてたまらない。何が起こるのか自分は知っている。口を開いた本から突風が吹き付け、私の髪と衣服をばたつかせる。

塵は塵に。闇は闇に。炎の浄化で還るのだといわんばかりに。

闇の触手は確かに『彼』を捕らえ、歓喜に身を震わせながら生贄となるものを本の中に引きずり込まんとする。

必死に握っていた筈の指は、不浄に触れてもげ落ち、すり抜けて行った。

「――めて」

溢れ出た闇が早巻きで逆流を始める。止めることが出来ない。

『彼』のかけらをすくってもすくっても闇は本の中に戻って行く。その間も本は燃え続け、燐光に青く輝いている。燃え尽きてしまう。

ロトの妻は、背徳の町を振り返ってはならぬという神の言葉を破り、背後を振り返った。

そのために、塩の柱になったという。

私は、塩の柱になってもいいと思った。

彼は――ジャンは、笑っていた。

裾と前髪が逆巻く風と闇の中、煽られ、一片も残さず覆い隠されて行きながら、それでも笑っていた。ぞっとするような冷酷な笑みでも、目の奥の笑っていない三日月型に孤を描く笑みでもなく、悪戯でも思いついたみたいに、嬉しそうに。

さようなら

「い、や、だあああああああああああああああぁぁああああああああああああ！」

――出口のない闇の世界に逆戻りだ。もう出て来られないんだよ！
またさよならするの！？　もう嫌だっ　嫌だあああっ

ごおっと風が最後の唸り声を上げた。魂切る絶叫とともに、開かれた『本』は最後の一滴も残さず、凄まじい勢いで闇を――そして風を吸い込むと、ばたんと閉じてしまった。
あれだけ堂内を荒れ狂っていた豪風は一切掻き消え、もはや塵一

つ舞い上がることなく、しんしんと沈黙だけが痛いほど辺りに張りつめていた。

「終わった」

八王子夜音だったものが、私の傍までつかつかと歩いてくると、そっと私に本を差し出した。

私は本をひったくるようにして奪った。

火傷するのも構わず本を無理矢理開こうとしたが、ぴったりと合わさったそれは貝の口のようにだんまりを決め込んでうんともすんとも言わなかった。そうして端の方からぼろぼろと崩れ始め、新品同然だった装丁が見る間に数百年を経たかのように劣化して行き、

「ああ、あああああああぁぁぁあああああ」

ただの炭の塊になってしまった。本の形があっけなく崩れ、指の隙間を灰が滑り落ちる。もう『死』のけはいはどこにもなく、泣き濡れて地べたに座り、咆哮した。

まだ火の粉が赤く燻る熱い灰の塊を、倍の太さに火ぶくれした十指で掻き集め、必死に元の形に戻そうとしたが、無駄だった。

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉおおおおお

おおおおお！」

――返せよ。返せよ。ジャンを、大輔を返せよ！

かえしてよおおおおおぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！

無力な自分自身に激昂し、床に何度も拳を叩きつける。火ぶくれの出来た皮膚は気泡が爆ぜて中の赤い果肉を晒した。

ぼだぼだと血と鼻水の混じった涙が滴り落ち、石を黒と赤に汚した。

私は血塗れになった拳を何度も何度も叩きつけた。冷気渦巻く礼拝堂に、ただ絶叫だけが空しく反響するばかりだった。



「――佐々木さん」

## 挿話：『彼』の本音（前書き）

Ｒ１５程度の性的表現を匂わす文があります。
時系列は吐血して倒れれるより前、適当に挿入願います。

## 挿話：『彼』の本音

とって引き返す道は、風がうなりを上げている。弱まるけはいは微塵もない。

ジャンは、大口を開けて笑い出したい気持ちだった。

――名乗ることもできない！！

ジャンは、大声で叫びたかった。

私はここにいるぞ！

私はここにいるんだぞ！

ちゃんと見ろ！

見てくれ――

暴風の中、ジャンは庭に根を下ろしたように立ち尽くして動けなくなった。

彼女は、自分を見ても、当然ながら『誰』なのかわかってはくれなかった。

今度こそ、あるいは気づくかもしれないと、期待をかけては、裏切られたと感じる自分がいる。

なんという未練がましさだろう。

当たり前だ。

容姿が違う。

性格も、演技する必要性すら感じられないほどに、その根底から激変してしまった。

最早、彼女の知る『元』の人格など、繰り返す人生の中に擦り切れて後方に置き去りにしてしまった。

もう、別人なのだ。
自分は一度この世界に屈してしまった。
だが、唯一『名』を惨めに抱え込んで、『自我』を守り抜き、それでもだんだん失われていく『自分』に必死にすがり付いている。
自分を保つことは、あまりにも困難だ。
世界に同化する方が、よほど楽だと、皆諦めていく。
中でも、重要なライフパスを振られた『ユリア姫』は、かつてクラスメイトだった少女だが、次第に『自我』が磨耗し、ループのタイミングによっては、完全に発狂している。

――私は何を期待していたのだろう。当たり前じゃないか。

分かるはずもない。分かれというのが、土台間違っている。
そう思えば思い込むほどに、ジャンは気鬱になった。
こんなはずじゃ、なかった。
私が思い描いていたのは。私が、本当に望む形は。
それを口にしたら、たちまちジャンは、もはや自分を唯一支柱にして支えている何かが、無残にぽっきり折れてしまう気がした。
尊い自己犠牲を、呪わしく思う自分がいる。叫び出して恨みを吐き出しかねない自分がいる。
彼らを、封じなければ、生きていけない。
それほどに、忌まわしい、抑え付けて、重石をして、自分でも決して取り出せないくらい奥深く、水底に沈めてしまわねばならないほどの。
誰にも言えない。
決して、決して、誰にも言ってはならない。
この唇は、女王の下、間違ったことすら捻じ曲げて、正しいことだけを、正しいのだと指し示し、迷いを口にしてはならない。
過去を振り返ってそれが惜しいと嘆いてはならない。
何故なら、私は選んだ。私は望んだ。魔王。勇者。かつて敵味方

分かれ、私は彼女を殴った。私は彼女を殺そうとした。私は彼女を、私は、
ああ、見よ。彼女との殺し合いの果て、無残に横たわるこの永遠の繰り返しを！
彼女が救われるならと、一度納得したはずではないか！　私は敗北を受け入れた。彼女はこの狂ったゲームをクリアし、一人世界を脱出した。
それ以上どうして求められる。
最早望みは果たされた。
どうして言えるんだ。言えないだろう。
苦しいなんて、言えるはずもないだろう。
私はジャン。
私が守るべきレジーナ。
ここはすでに自分の故郷だ。女王には返しきれないほどの恩がある。偉大な方だった。決して人格者ではなかったが、間違いなく、偉大な方だった。大いに救われた自分を自覚している。
それでも、ジャンは満足などできない。後悔がいつもその臓腑に沈んで、彼を放さない。
どうして、会いたいと、あの選択が間違いだったと、そんな恐ろしい本音を吐き出せる。
私のさつきに！
言えない。絶対。絶対だ。口が裂けても言えない。ジャンは顔面を覆う。衝動で喉が焼け付く。神様。耐えようもなく溢れ出した。
――彼女に口付けたい。
触れたい。
自分の正体が、仁王大輔だと名乗りたい。
自分が彼女を救ったのだと打ち明けたい。
感謝されたい。
辛かったね、とねぎらってほしい。
抱きしめてほしい。

心を向け、柔らかな身体を全部捧げてほしい。
唇をなぞりたい。髪に触れたい。全身に指を這わせたい。
痛々しいほどに張りつめた彼女の眉目を解き、自分の手指と舌で子猫のような声を上げさせたい。
欲望を全て注ぎたい。
あふれるほどに見返りがほしい。
無償の愛など、嘘でしかない。
彼女の幸福な外での人生など、許せない。
他の男に指一本だって触れさせたくない。彼女は私のものだ。
まだ見ぬ彼女を幸せにする男によって、その身体が開かれ、やがて子供を生んで、私を過去にしてしまう彼女の人生を許容できない。
私はここに取り残されている。
彼女は、未来に向かい、私は取り残される――
到底自分の犠牲と代価が釣り合わない。

私のものだ。
私のものだ。
彼女は、私のものだ。

誰にも、誰にも渡したく、ない。

（おろかな。なんて惨めな。未練がましい。酷い。醜い。気持ちが悪い。知られたくない）
それは絶望だった。ジャンは、そんなことを必死に隠し立てるほどに望んでいるのだ。
あの日、敵味方に分かれて殺しあったあの初回の最中、苦しくて、恐る恐る代償行為に彼女の残したリボンに口付けた（それしか残らなかった）。
恥ずかしかった。ただ惨めだった。そんな自分が気持ち悪くて仕方なく、罪悪感でのた打ち回った。

だが、今度は、何に口付けたらいい。何を代償にしたらいい。本当は、あの日、剣を向け、別人のように冷たい目をした彼女に口付けたかった。
抱きしめて、額をすりつけたかった。肩口に鼻を埋めたかった。
もう十分だと。もういいのだと。
そう言いたかった。冷たい氷が抱きしめてキスするごとに溶けていけば、どんなにかいいかと。
全部これは夢だったと、そうすればどんなにかすばらしいだろうと。
そして、それは絶対に現実にありえないことだった。

かつて最初の死を迎えたあの日のように、ジャンは天を仰ぎ、唇に雫を受けた。
さつき。私のさつき。ああ、もう。
稲光に照らされ、自分の青い目玉が溶け落ちてしまうのではないかと思い、呆然と唇が吐き出した。
「――もう、限界だ」
世界は束の間無音になる。一瞬の空白の後、稲妻が空を切り裂き、かつてない落雷が轟音を立てた。
忘我に浚われたジャンは、それが何ものをも凌ぐ真実だと気づく。足は勝手に再び元来た道を引き返しはじめていた。ぬかるみはもはや液状化している。
限界だった。
彼女はかつての『自分』を悼んでいる。
こっちを見てくれ。
私はそこにはいない。
私はここにいる。

――もうすぐ、本当の嵐が来るだろう。

風に『あの怖ろしいもの』のけはいが混じっている。

――全て、嵐のせいだ。

何かのせいにせねば、動くことのできない自分は、本質が何も変わっていないのだ。

だが、それが的を射ていると気づいたのはすぐだ。

嵐があまりも凄いから、ジャンは窓を開けたくなったのだ。

真夜中に窓を開けて、自ら嵐を招き入れようと、そんな風に自分は引き返したのだ。

ごうごうと風は咆哮している。

もう何もかも無茶苦茶になってしまえばいい。プライドも、葛藤も、嵐が全て壊し、あるいは連れ去ってくれる。

そう、限界だ。私は限界なのだ。

どうなってもいい、ぶちまけてしまいたい。例え死んでも、また次がある。きっと、数日の内に自分は告げてしまうだろう。

嵐はすぐそこだった。

**ああ、そろもんよ**

「――佐々木さん」

礼拝堂に、もう一人の少女の声が響いた。

桐島聖涙だった。

灰を十指で掻き集め、どうにもならぬと拳を叩きつけていた私は、呆然と彼女を見上げる。

彼女も、酷い姿だった。

文字通り、はり付けにされたのだ。

あちこち負傷した状態で、よろよろと歩いて来たのだろう、気がつけば私のすぐ傍にいた。

彼女は、八王子夜音の方に視線を巡らせ、再び私の手元を見た。

「終わった、んだ」

ぽつり、とこぼした言葉は、冷気の満ちる礼拝堂に拡散した。わけの分からない状況だろうに、彼女なりに悟るものがあったようだ。

「なんか、多分、分かってた。私、もう死んでいるのね」

私は悲鳴を飲み込む。彼女は、諦めなかった。諦めなかったけれど、あまりにも『長すぎた』。

「身体、もう現実にはないんだよね。なんだろう、そうか」

彼女は、負傷した腕をもう片方の手で握り締めていた。

その腕に、青白い燐光が浮かぶ。
いや、腕だけじゃない。
身体中が、燃えていた。
あまりにも冷たく、青く、静かに、燃え上がる。
死者の炎――

「エミリオがさ、いってた。あいつ、おっかしいんだよ。佐々木さんに多分酷いことしたんだよね。あいつが悪い。でもさ。あいつさ、私の前で泣くの。こんなの嫌だ、消えたくない、消えたくないって。だんだん薄れていく、どちらが自分か分からなくなるって。自分が誰で、家族も友達も分からなくなる、記憶も飛ぶ、なかったことになる。消えたくないって、ぶるぶる震えながら泣いてた。傲慢男で売ってますって感じだったくせに、ぼろぼろ泣くからさ、最初ドン引いた。でも、ほっとけなかった。ほっとけなかったの。――だけど、結局消えちゃった」

消えた、とは、『死んだ』という意味と同義ではない。
恐らく、元の人格の消失を指すのだろう。

「私、ムキになってがんばったんだよ。がんばったけれど――正直しんどかった。疲れたな」

視線を伏せて、桐島聖涙は、笑おうとしたのだろう、でもそれも不恰好に口の端が歪んだだけだった。

「私、消えるんだね。今度こそ、本当に消えるのか。もう休んでもいいんだね」

だけど、とつなぐその顔面がくしゃりと歪む。

「やっぱり、消えたくないよぉ。おかあさんに、会いたいっ」

手のひらを眼前に掲げ、青く燃え尽きていく己の指に、絶望の色をその瞳に宿して、彼女は悲鳴のような叫びを最期に、あっという間に、それこそ本当にあっけなく消えてしまった。

私は、空中に行き場のない指先をさまよわせ、結局彼女の衣服の端をつかむことすらできなかった。

「――何これ」

何なのだ、これは。

酷い。

惨い。

もはや言葉にできない。

これでは救いがない。

何の救いもないではないか。

ああ、分かってた。

失われたものは、戻ってこない。

失われたものが、あり続けたことこそが、悲劇だったのだ。

だが、理性が納得しても、感情はついてこない。

どうして、何故、と問わずにはいられない。

統合前の私であれば、思考することはできなかっただろう。

しかし、現在の私は、それを放棄できるほど無垢ではいられなかった。

多分、許容範囲を超えてしまった。

振り切れてしまったのだ。

振り切れた人間に訪れるのは、喜怒哀楽の感情の麻痺だ。

もう、苦しい、辛いと思うことさえ、私のコップは溢れてしまい、

これ以上の感情の注ぎ足しは不可能だった。

八王子夜音――バーロウ家の『何者か』を見やる。

彼は頷いた。

「間もなく、この世界と我々の世界はリンクを切るだろう。槍が二つの世界をつないでいたが、すでに回収した。我々も、引き戻されることになる」

「教えて。この世界は、偽物？　それとも本物なの？」

何の意味もない問いだ。

しかし、問わずにはいられなかった。

「君は、すでに答えを出しただろう。究極、我々には、本物も偽物も区別などつかないと」

はっと息を呑んだ私に、彼は告げた。

「それはそれのみによって存在するのではない。それがあるから、かれがある。かれがありて、それがある。どちらが実像で虚像か、あるいはどちらも更に存在する『実像』の虚像か。己を真とする者ですら、全てイデア（真理）の影かも知れぬ。あるいは、たゆたうスープに実在など存在せぬかもしれぬ。ただそこに可能性が揺らいでいるに過ぎぬかもしれぬ。一体、誰の視点によれば何が真で何が偽かね。真偽の区別がつくものがいるとしたら、それこそ『神』以外にありえぬ。――時間だ」

詭弁だ、となじる前に、私は揺らいだ。

揺らぎ、この世界から消えた。

私は、概念としての『槍』の姿を見た。

宇宙に浮かぶ、二つの地球。
槍が、いいえ、紐？　何かが二つをつないでいる。
でも、その『長いもの』は、途切れた。二つの地球は互いに離れていく。

どちらが真でどちらが偽か。
あの世界を、どうして偽物と断じることができよう。
あるいは、どちらも影かもしれぬというのに。
そう、究極私たちは、誰も本物と偽物を区別などできない。あの世界はきっと続いていく。私たちの世界が続く限りは、あの世界もまた、終末に向けて疾走していくよりないのだ。

自分がどこにいるのかも分からない浮遊感とともに、宇宙を見下ろすなどというとても信じがたい光景を目にしながら、そこにはもう一人の私以外の人物がいた。

「ようこそ。石の名前を持つものよ。君がここ――『蜂の腰』に来るのは二回目だな」

気がつけば、私は赤と黒と金の色調で統一された部屋にいた。
世界は一瞬にして摩り替わった。
グランドファーザーロックが正面で鈍い金色の振り子を規則正しく揺らしている。

シノワズリ趣味のテーブルに、白い陶磁器の茶器が準備され、温かな湯気で大気を湿らせている。
私はもはや何が起きても驚かぬと腹をくくった。
「ずいぶん長いことお会いしていないかのようね。アレグザンドラ・『バーロウ』」
皮肉を込めて強調した姓を彼女は優雅に苦笑してかわし、否定することもなく、「さあ、席についてくれ」と促した。
私は誘いを断らなかった。
「まずは、おめでとう。君はやり遂げた。パーフェクトだ。実にすばらしい。バーロウ家一同、君に惜しみない賞賛を贈るよ」
それこそ皮肉か。
まずはこの熱いお茶を、彼女にぶっかけたらどうなるか。
妄想だけで、私は三杯の米をおかわりできそうだった。
「『蜂の腰』に一度偶然彷徨い込む者はいても、二回目来るとなると、これはもう『意図的』なもの以外何ものでもない」
さあ、と彼女は笑った。
まるで悪魔のような笑みだった。
アレグザンドラ・バーロウ。
恐らく、末端であるはずもない。この口ぶり、本家の者か？　あるいは、当主とやらか。
「さあ、取引だ。
バベルの塔が、一番上の階層に通じていた。

ソロモンの王は逆階層まで降りていって、それを逆回転させようと思った。

しかし、サン・ジェルマンは失敗した。

悪魔の中には全ての叡智を授けてくれるものがいる。

世界の境目、中庸である『蜂の腰』にいる者が、神の待ちたもう上の階層へ行くか、それとも悪魔の待つ下へ降りて行くか……

おめでとう、君は選択する権利を勝ち取った。

さあ、選ぶといい」

わけわかんねえよ、と私は本気で茶をぶっかけるべく戦闘準備に入った。

## ああ、そろもんよ（後書き）

あと数話で終わります。

## しすてむ

意味が分からない。
わけが分からない。
理不尽である。

それは、私の生涯を通しての怒りの根底であったかもしれない。
親のエゴでつけられたとしか思えないふざけた名前。
周囲への攻撃的カウンター。
その果ての、地獄――

私は攻撃性をあらわにし、しかしぬるま湯の人権を守られる環境下においては言論の自由に保護された。
でも、この『世界』は違った。

正しい者も、間違った者もない。
強い者、それが圧倒的に正しいのだ。

これを間違いであるとすれば、更なる力『武』をもって覆さなければならない。
私には世界を変える力などなかった。

だから、本来言論の剣の恩恵にあずかっていた私は、たちまち保守的な『盾』を欲し、隠れた。

頭を低く垂れ、正しい『力』に屈したのである。

それを退化とは呼ばない。

ゆえに、私は攻撃性を表面化しない。
私は世界に守られてなどいない。
この世界が地獄であるならば、剣（権利）などなんの役にもたたない。
振りかざせば、同じだけの、それ以上の剣が返ってくる。

紅茶をアレグザンドラ・バーロウにぶっかける。

夢想してみる。
そう、何にもならない。
私は弱い。
私は無知。
知っているつもりで、何もわかっていなかった。
その結果が、今だ。

私は嘆息し、仮想の剣を抜くこともなくおさめた。

「教えて。いいえ、教えてください。私には、何も分からない。もし貴女が知るというのなら、どうか教えてください」

全てを――少しでも、よき結果をもたらすように、その思考の欠片となるものを、与えてほしい。
選択せよ、というならば、説明を。

アレグザンドラは、笑った。

「そう、いきなり選択せよ、とは意地が悪かったな。君は二回目だ。しかし、記憶は引き継がれていない。まず、我々は共通の理解をもつべきだろう。前提となる共有の理解を」

私は頷き、無知を曝け出して願う。

「あの世界は、結局なんだったの？　それすらも私は分からない」

あれほどの惨禍、果たして何の意味があったのか？　意味などないのか。

この問い自体無意味である。

なぜなら、誰も『お前自身の存在に意味はあるのか？』という問いに完璧な答えを有する者などいないからだ。

存在の意味など、誰も知りえない。

差し向かいに座ったアレグザンドラは、ゆっくりと足を組み替えた。

「そうだな。例えば、この議論については、まずこの紅茶が役に立つだろう」

目の前に湯気をくゆらせる紅茶が用意されている。

それを指差し、アレグザンドラは私に問いかけた。

「この紅茶は、今後どうなる？」

「ほうっておけば、冷めていくわ。この内部のエネルギーは、やがてカップや室内温度のエネルギーに拡散していく。これが自発的に勝手にまた再沸騰するということはない。熱は常に高きから低きに流れる。熱力学なの？」

「そのとおり。

この観測する対象を『系（システム）』と名づけよう。『系』以外のものは、『外界』とする。

『系』と『外界』を隔てている境界が物質や熱を通すか通さないかによって、『系』は『開放系』と『閉鎖系』に区別することができる。

例えば、この紅茶は典型的『開放系』だな。物体も熱も通す。
この開放系たる紅茶は、エネルギー拡散を起こし、やがて室温と同程度にぬるくなるだろう。
閉鎖系で考えられるのは、断熱材を境界とするものだな。例えば魔法瓶などが考えられる。これは熱も物体も通さない『孤立系』だ。
さて、ハイスクール卒業程度の講義で恐縮だが、共通理解のためにイメージとしての『系』を提示しよう」

空中に円筒の箱が浮かび上がる。
やがて箱は透過していき、辺を残して中にピンポン玉のような球体を詰め込んでいることが分かる。
ピンポン玉は、円筒内部をゆっくりとでたらめに動いている。

「この円筒を、『系A』とする。
中にある球体は、系Aの内部にある理想気体の原子分子モデルだ。
さて、この系Aは、内部エネルギーを持っている。
内部エネルギーは、この原子が持つ運動エネルギーと原子や分子間に働く位置エネルギーの和のことだとしよう。
運動エネルギーが高いほど、この原子モデルは活発に動く。
ここでクエスチョンだ。
この系Aの内部エネルギーUの増加分ΔU、これはどのような方法で増加させることができるだろうか？
系へエネルギーを移動させる方法はいろいろ考えられるが、どうだろう？」

高校程度の知識であるが、私は教養程度にしかかじっておらず、ゆっくりと思い出しながら回答した。

ΔU＝Q（熱の吸収）＋W（された（した）仕事）

すなわち、内部エネルギーの増加分は、熱と仕事によってもたらされる。

非常に俗な例えだが、貯金で考えるとよいだろう。
今いくら貯金をもっているか、そして最終的な貯金の総額を考える必要はない。
どれだけ貯金が増えたか、という出入りの話をしている。
こづかい（熱）を1万もらい、アルバイト（仕事）で4万稼いだのなら、

5＝1＋4

これが、貯金の増加分5である。最初いくらもっていたかは関係ない。5万円増えた。これが変化分だ。
あるいは、遊びすぎて浪費が激しく、7万使ってしまったのなら、

－2＝5－7

このような時もあるだろう。

「エクセレント。そう、熱と仕事によって内部エネルギーへの搬入は可能だ。
しかし、最終的にこれは熱によるものか、仕事によるものか、区別しない。
では、まず、熱により、系Aの一部を透熱壁とし、内部エネルギーに変化を起こそう」

円筒の下部に、炎が押し当てられる。
すると、下部にある原子モデルは次第にランダムな動きを速めてゆき、その原子がぶつかったほかの原子も動きを加速させていく。

「物を熱すると、原子の振動が激しくなる。そして、熱は、ランダムにエネルギーを移動させる」

ピンポン玉サイズの原子の動きは、ランダムに内部変化を起こしているのを見れば、一目瞭然だ。

アレグザンドラは、「次に」と人差し指を振った。

「では、今度は円筒の可動壁を動かして、仕事によりエネルギー変化を起こす」

円筒の下部が『可動壁（ピストン）』状となり、ぐっと上に押し上げられる。

すると、円筒下部の原子モデルは一斉に同じ方向――上部へと動き出した。

「全原子が同じ方向に移動する。

下部の原子は他の原子にぶつかって、振動を激しくしていく。

だが、しばらくすると円筒内部の原子は、ぶつかり合ううちに、結局ランダムに動き出す。

熱によろうが、仕事によろうが、ランダム運動へと収束していくわけだ。

系へ注入された熱も仕事も内部エネルギーという状態量に変化していく。

一度系に入ったエネルギーは、熱によってもたらされたものか、仕事によってもたらされたものかを区別しない。

そして偏りは是正され、平衡状態となる」

激しく動き回る原子は、次第にランダムに、やがて同程度の速さへと落ち着いていく。

次に、ともうひとつ円筒が空中に浮かぶ。

「これは『系B』とする。先の『系A』と『系B』を棒で連結させよう。これは今物体も熱も通さない棒だ。棒の面積はCとでもするかな。

『系A』には、高温の気体が入っている。『系B』は低温の気体が入っている」

原子は、熱が高いほど振動する。運動エネルギーが高いということであり、つまり系Aの原子は活発であるが、系Bの原子は緩慢に動いている。

「ふむ、分かりにくいので、高熱の系Aの原子は赤にカラーリング。低温の系Bは青にカラーリングした。さて、二つの系をしきる棒に穴を通すと、どうなるかな?」

言うまでもない。

「熱は自然には、高温から低温へと移動するわ」

アレグザンドラがぱちんと指をならすと、系Aと系Bは各内部の原子が移動可能状態に連結した。

すると、系Aの赤い原子が系Bへ動いていく。

時間とともに、系Aと系Bの温度は差を埋めていく。

両者は混じり合い、平均速度の高い系Aの分子と系Bの分子が衝突を繰り返すうちに、両者の平均速度へと落ち着いていったのだ。

「これが熱平衡状態だ。熱エネルギー（内部エネルギー）の発生を伴う変化は、不可逆変化だ。

完全に元に戻すことはできない」

さて、次に、とアレグザンドラは再び指を振る。

「連結部分を、可動壁（ピストン）とした。

系Ａから見て、△Ｕ内部エネルギーが△Ｕ＞０であれば、系Ａの内部エネルギーは増加し、温度が上がる。気体は熱膨張し、ピストンは系Ｂに向かって動くだろう。これは系Ａが系Ｂに仕事をしたといえる。

逆に、系Ｂから圧力を受けて、△Ｕ＜０であれば、系Ａの内部エネルギーは減少し、温度は下がる。ピストンは系Ｂから系Ａに向けて押し込まれる。気体は圧縮され、系Ａは系Ｂから仕事をされたといえる」

だんだんと、私はぼんやりした形をつかみはじめていた。

系（システム）。

内部エネルギー。

系へのエネルギーの注入経路。

熱。

仕事。

原子の運動エネルギー。

振動。

熱平衡状態。

不可逆変化。

可動壁（ピストン）。

気づくと、勝手に私はつぶやいていた。

「――熱機関」

## しすてむ（後書き）

小説の要素として、俗な解釈とでたらめな味付けをしていますので、学問上の熱力学ではありません。

## そうてんい

熱機関。

高温の物体が持つエネルギーの一部を仕事W、つまり力学的エネルギーに変える装置を熱機関という。

初期の熱機関といえば、蒸気機関が考えられるだろう。

ただし、高温の物体から熱量Qを与えた場合、Qが全て仕事になるわけではない。

$Q \neq W$

必ず、低温源に一部の熱量Q′が捨てられる。

熱量Qは一部を仕事に変え、一部の熱を捨てることとなる。

これが、エネルギーを失うことなく永遠に仕事をするのであれば、それを第一永久機関という。

あるいは、熱を全て仕事に変えることができるのであれば、それを第二永久機関という。

無論、これらは熱力学の法則の見地から実在不可能な機関である。

つぶやいてはみたものの、与えられたピースから次の話が組み立てられただけで、私はこの話題が示唆するものが果たして何なのか分からずにいた。

「アレグザンドラ。ハイスクール程度の講義をどうもありがとう。なんとなく、言いたいことはおぼろげに見えてきた気がするけれど、よく分からない――というより、認めたくないのかもしれない」

アレグザンドラは紅茶を啜った。

「で、あるならば、すでに理解しているに等しい。私は比ゆとして熱力学の上澄みを提示した。

共感魔術の話を覚えているかね？」

私の喉が嫌な音を立てる。

「ええ。もし比ゆとして、推測するなら。

あの世界は閉鎖系A。

私たちの世界を閉鎖系Bと考えれば、二つの世界をつなぐ『境界』が槍であり、同時に私たち自身。そしてあのゲームね」

「ふむ。続けて」

「系と系を隔てる境界について考えるわ。

面積Cを持つ仮想の境界（ボーダー）であり、同時に断熱壁と透熱壁の性質を持つ。そして、可動壁（ピストン）でもある。

あの世界にぶち込まれた私たちは、あの世界において、高速に動く原子だったと考えればよいのかしら？」

ふと、『相転移』について考える。

「私たち自身については、私たち自身が、一つの開放系であると考えられる。

『相転移』の現象が比ゆとして分かりやすいと思う。

系の温度が変われば、系の状態、性質は変わるわ。

例えば水。

系のパラメータ温度や圧力によって、その各状態である相は、氷である固相、水である液相、気体である気相に変化する」

この系の状態変化を『相転移』というわけだが、アレグザンドラ

はにやにやとしている。腹立たしさを超えて、私はむしろ底なし沼に落ちていくような気がした。

「相転移は、パラメータによりどう変化するか、Y軸に圧力、X軸に温度を取り、相図を描けるわ。それぞれの相である水、蒸気、氷が共存することの可能なパラメータ……境界が交わるところを『三重点』というけれど、これを過ぎれば、各相に相転移してしまう」

例えば、と私は唇を舌でなぞった。

急速に唇が乾いていって、ひび割れそうだった。

「心霊主義では、人間は『魂』『肉体』『霊体』の三つの部分から成り立っているというわね。

魂は人間を人間足らしめる思考する部分であり、非物質とされる。これは不死であり、人は何度も転生（ループ）するというわね。

肉体は、まあそのままね。魂をおさめる物質とされるわ。

霊体は、魂と肉体をつなぐものとされる。

生きている人間は、この三つがぴったり重なりあっている状態とされるわ。

つまり、霊体は、肉体と同じ形をしていると考えられている。

肉体が滅ぶ――死ねば、魂を霊体が包み、これを視認した場合、『霊』と呼称するわね」

指を組み替えた。何度も何度も、意味もなく組み替えた。

「生きているということは、三つの相が重なっているということ。

私たちは、B系においては三重点にあった。

A系にぶちこまれても、三重点にあった。

肉体ごと転送されたのか、それとも魂と霊体だけによる転送なのか。

これが、非物質のみによる転送であるとすれば、魂と霊体が投げ込まれ、現地である系Ａで文字通り受肉したのかな。
でも、系Ａで得た肉体が滅べば、そこで『死』ぬ。
そして、問われる。

系Ｂに属したまま、新たに受肉して繰り返すか。
あるいは、系Ａの一部になるか。

名前を失わなければ、系Ｂとはつながりが途切れない」

推理というより、妄想としかいいようがない。

「あの世界で、私たちは高速の平均速度を持つ原子であり、系Ｂへの境界でもあったと考えれば――系Ａへの内部エネルギーの増加分だけ、私たちの元の世界に仕事がなされた――つまり、魔王や勇者の発生によって、その結果は、私たちの元の世界に影響を及ぼした――」

そろそろ顔面を覆ってもいいころだ。
アレグザンドラはミルクと砂糖を紅茶に落とす。

「このミルクと砂糖の分子は、今紅茶に拡散内部に拡散している。
そしてこの紅茶は開放系だ。
温度は室温に拡散していく。
この香り高いフレーバーも、室内に分子が拡散していく。
これは、不可逆変化だ。
決して元には戻らない。
もし、拡散した分子をひとつひとつポンプで戻したとしても。
ポンプの状態は以前の状態と異なる。
元には戻らない。

いいかね、エネルギーの永久機関など存在しえぬ。
これが、『彼ら』に起きて、君に起こらなかったことだよ」

私は、耐え切れず右手で顔面を覆った。
左腕は動かない。
なぜなら、私の左腕は――もはや、ない。代わりに、私は『盾』を得て、自らを孤立系とした。

「戻らない。はっきり言うのね。では、貴女は私に何の選択を迫ったの？　それは私に有利なもの？
私の望みは、ひとつしかない。
大輔を返してほしい。
ジャンに会いたい。
八王子君は？
桐島さんは？
皆、は？
それしかない。
それしか望まない。
何故。
どうして。
何故私たちだったの？
槍とは何なの？
どうして？」

どうして、何故、と問うて、答えが得られるのか。
そもそも、バーロウ家とは、何なのか。
分からない。
どうしようもない。
ただ、返してほしい。その選択以外、私にとって『無意味』でしかない。

アレグザンドラは頭をふった。

「『蜂の腰』は世界の中庸だ。どこでもあり、どこでもない。系の境界。

だが、神も悪魔も、系を観測するものだ。

彼らは外にいる。彼らは永久機関であると考えられる。

ゆえに、計算できない。そして我々の世界では実在不可能ゆえに、この世界に存在しない。

知ることもできない。

ただし、近づくことはできるかもしれない。

かつてソロモンという男が、神へいたる小径（パス）と逆の階層に下りていき、悪魔の叡智を得たという。

逆セフィロトを辿り、砂時計をひっくり返すという『ずる』をして、神の階層へと近づいたのだ。

しかし、彼は人のままであった。

あるいは、神へいたる最初の相は、彼より剥離したのかもしれぬ。ならば、その影は現世に残り、我々には観測できない『何か』が外界へ至ったのかもしれぬ。

その時、我々はもはやそれを観測できないゆえに知ることはできない。

貴女が望むのであれば、その最初の一歩の扉が、この『蜂の腰』からは伸びている。

ただし、私はその先を知らぬ。

なぜなら、私は留まった者だからね」

「クーリングオフのきかない怪しい商品の押し売りね。効果も効用も知らないけれど、選べって？　それこそ今度は帰ってこれないかもしれないじゃない」

私はばかばかしさに笑った。

「ならば、影であるソロモン程度の叡智をちょうだいな。私はもうこれ以上どこにも行かない。『私』は『私』であることを選択する。だから、どこにも行かなかった『留まった』貴方たち程度の叡智を要求するわ。

バーロウ家。槍の守護者、つまり――現世に散逸する叡智の番人といったところ？」

取り扱い注意の槍、得たいの知れぬ本。

それらを所持しているのは『バーロウ家』だ。

何より、私はひとつの希望を持っていた。

もしかすると、いいえ、きっと。

**おわり**

そう。
システムの提示する選択に対し、『諦めなかった』者がいる。
あるいは、『名前』を失わずにいた者がいる。
彼らは、紅茶に落とされたミルクであり、砂糖だ。
ただし、包装されたままの状態だったら、全ては決して拡散しない。
更には――

私は、すっとアレクサンドラの手元を指差した。

「八王子夜音をジャックしたのは貴女？　あの時――ジャンは、『本』に吸い込まれたわ」

もし、室内に拡散した分子を、エネルギーを、見えざる何かを、ひとつひとつポンプで戻せたとしたら？

不可逆変化。

元のとおりにはならない。
でも、
ああ、でも。
私はたった一つの希望に縋ってもいいはずだ。
そうしなければ、何のために――何のために、ここに二度目に来た／繰り返したのか分からない？

本にまつわる貴方たちのノウハウを教えてとの流れになるはずが、己の不可解な思考に瞠目した私に、アレグザンドラはやはり笑った。

「そのとおり！　貴女は以前、同じような結論にいたり、取引した。この『本』は、怪異を収めておく蔵のようなものだ。我々は、槍やこういった本を、『ギフト』と呼んでいる。本は複数あり、いずれにも『番人』がついている」

いつの間にか、彼女の手には一冊の黒い革表紙の本が握られており、ぱらりと風もないのにめくれた。

「――ビショップ」

彼女の背後に、暗紅色の法衣を着た『何か』が現れる。

「これが『番人』だ。貴女の国でいう、式のようなものだね。使い魔と翻訳してもいい。この『本』を、実は仁王大輔も『持っていた』」

ひゅっと息を呑んだ私に、アレグザンドラは畳み掛ける。

「今回、前回含め、事態がややこしくなったのは、二つの『ギフト』とそれにまつわる『怪異』が絡んだためだ。仁王大輔の所持していた『本』を、前回貴女は継承した――はずだった」

さて、説明が長くなるが、と彼女は断り、ビショップに給仕させる。熱い紅茶を飲み、一息つくと話を続けた。

「貴女が今所持している『本』は、『主殺しの番人』がついている特殊なものだ。つまり、ありていに言ってだね。その番人は、『前所有者』が『補填』される」

ビショップは私にも給仕するが、私は茶を啜る余裕もなかった。
「ちょっと――待って。なんで大輔が？　え？」
「『ギフト』は近親者で継承されることが多いが、消失した場合、無作為に投下されることがある。彼の継承は後者だね。仁王大輔が選ばれた理由は分からない。エネルギーの乱雑さは、『不確定』だとだけいっておこう」
「そ、う。ええと、つまり、え？　その、『本』の所有者（オーナー）は、死んだら、その本に――閉じ込められ、『番人』に補填される？」
「そうだ。『本』の前所有者である仁王大輔は、その死亡に伴い、番人として補填され、新たに『本』は次の所有者に継承されるはずだった。
しかし、ここに『槍』が絡んだ。
B系における彼は『死んだ』。しかしA系で、彼は『生きていた』。不完全ながらね。
所有権は宙ぶらりん、補填も宙ぶらりん、『本』のイベントは強制的に『主殺し』の儀式を引き起こすはずが、無期限凍結だ。
事態は複雑化した」

ふとアレグザンドラは嘆息した。

「貴女は、前回、『本』の所有者になるべくしてなった。いつか、必ず前所有者を取り戻すと決意して、B系に帰還した。
前所有者にして、本来『番人』にスライドしていなければならなかった仁王大輔がどこにいるか、その行方は分からなかった」
「そして、今回事件が起きた――」
「我々は目標を捕捉した。貴女は再びA系に戻り、儀式をやり遂げた。
つまり、『主殺しの番人』を調伏したのだ。
あれは便宜上『メフィスト』と呼ばれている。

本来の形ではないかもしれないが、『槍』の世界において、擬似的に、『主殺しの番人』とのデュエルは決行され、貴女は勝利した。制限時間内に、滅ぼせば勝ち、負ければ貴女は代わりに『番人』として補填されるはずだった」

ぞっとした。

私は、『槍』と同時に、『本』のデスゲームを同時進行していたというのだ。

「さて。私は、貴女に『本』を渡した。貴女は、すでに得ているはずだ。ただし、本質は変容する。元のままではない。不可逆変化ゆえに、それは納得済みとは思うがね」

動かぬはずの左腕、その先に本がある。

私は気がつくと泣いていた。

本を抱きしめた。

『名』を呼んだ。

＊＊＊＊＊＊＊

## ep. 現実世界

中庸の世界はやがて緩やかに崩壊しながら、私はやがて白い病室で目を覚ました。
あの世界で受けた暴力の跡は、私の身体に深刻なダメージを与えていた。B系世界に、私はA系世界で得た姿のままに戻ってきてしまったのだ。
正直大変スプラッタなことになり、リハビリだけでかなりの月日を費やすこととなった。
バーロウ家からの後押しもあり、FBIは円満に退職した。
もはや、元のままではいられなかった。
連続殺人事件については、非常にやるせない結末だった。
犯人は『複数人』によるものだった。
『槍』の想念――あの青白い顔をしたステンドグラスの男の複製

コピーのような思想に感染した近親者の犯行だったのだ。死体に描かれていた象形文字の署名（サイン）は、A系世界で見た文字でもあり、あの男の署名でもあった。

私は、後に彼の履歴を手にし、非常に驚くことになる。

世界大戦の折、イギリス軍がブレッチェリーに本拠を置いた暗号解読機関の一員であったのだ。

当時ドイツ軍がUボートで国外に運び出した『槍』の行方を、彼がどうやってつきとめたのか詳細は不明である。

だが、イギリス海軍が当時傍受したドイツ軍の暗号を元に、その潜水艦を待ち伏せの上、撃沈させたことは記録で明らかになっている。

その潜水艦が、何を運んでいたのか、イギリス海軍は知らなかった。

男も知る由もなかった筈だが、彼はレックダイブ（難破船潜水）により、沈んだ槍を引き上げた。

槍が男を呼んだのか。男が槍を執念で見つけ出したのか。

それは誰にも分からない。

分からなくても、構わない。

多くを失ったが、構わない。

私は、本当に大事なものは取り戻せた。

私の『本』には、『番人』が三体いる。メフィストフェレス、ファウストゥス、グレートヒェン。バーロウ家が便宜的にそう呼び習わしているものだ。

メフィストフェレスはさることながら、ファウストゥス、グレートヒェンに補填された人物は、私の知る人だった。

驚きとともに、私は涙の再会と怒りの鉄拳を食らわすことになるが、それはまた機会があれば話そう。

これで私の話は終わりだ。

＊＊＊＊＊＊＊

## ep.　バーロウ家

「これでよかったのかね？」
「ああ。世話をかけたね」
「しかし、名乗らずじまいかね？　お前は別に『私』にジャックされていたわけでもあるまいに。内部から内部へ侵入しただけだろう」
「締め出されていたからね。僕は彼女に嫌われているし、まあ、指揮系統上、バーロウは誰がバーロウか、互いに知る必要もない」
「ずいぶん不義理な男だな。しかし、これが最初でもないし、最後でもない。ギフトは投下され続ける。まったく、宇宙の贈り物という奴は実に厄介極まりない」
「ロンギヌス。長きもの。攪拌するもの。槍は宇宙から飛来した。隕鉄を含んでいる。あれは多様性を攪拌するものだというのが我々の解釈だ。バーロウもまた、その多様性のひとつに過ぎない。――いずれ、来るべき『対話』に備えて」

我々は回収し、管理し、そして進んでいくだけなのだ。

そう、彼は呟き、『蜂の腰』を辞去した。

＊＊＊＊＊＊＊

ｅｐ.　蜂の腰へ再び回想

動かぬはずの左腕、その先に本がある。
私は気がつくと泣いていた。

本を抱きしめた。
『名』を呼んだ。

そうしたら、奇跡が起きた。

『彼』は戸惑ったような、呆れたような、微妙な顔つきをしていた。

「――馬鹿な人だ。所有権など放棄しておけばよかった。そうすれば逃げられたのに」

何かいおうと思った。
でも、声が出なかった。
堤防は決壊した。目の前が見えない。
ぬぐってもぬぐっても後から後から熱い滴がこぼれて来て、視界がよく見通せない。
喉が痛い。
声が出せない。
地面はぐにゃぐにゃして、立ち上がることもできない。
ちゃんと、そこにいるんだよね？
もう、消えたりしないよね？

大輔じゃないのかもしれない。彼はもうジャンだ。
お願い、もう、二度と。
二度と、失いたくない。

「さて、申し訳ないが、そろそろ時間だ。新たな『所有者（オーナー）』よ、貴女はその資質を我々に問われていた。貴女は神にも悪魔にもならぬといった。我々の叡智をよこせといった。ゆえに我々は歓迎しよう。

新たなバーロウの一員として」

それから、とアレグザンドラは付け足す。

「そこのへたれ、泣いている女がいたら、抱きしめるくらいしたらどうかね？　別に触れても罪ではあるまいに」

息を呑む音がして、本当におずおずと、おっかなびっくり様子を伺うように、その手が私に触れた。

「――さつきさん。すみません。もう私は元の私じゃないし、貴女が取り戻そうとしてくれたものじゃない。こんなこと、本来巻き込むべきじゃなかった。貴女の口癖が『ごめんなさい』になってしまって、見ていて辛かった。私には、なんの自由もなくて、助けることもできなかった。私は、何も望むべきじゃなかった」

でも、と強い力で抱きすくめられる。

「――でも、それ以上に会いたかった」

ずっと、ずっと、名乗りたかった。そう言い彼は万力のような力で抱き締めた。

多分彼は静かに泣いていた。

私は、子供にかえったみたいに、大声で泣いた。

ごめんなさい、と頭を垂れた。暴力が怖かった。痛みが怖かった。殺されそうになって、裏切られて、もうこれ以上は耐えられなくて。

そのことを、彼は知っていてくれた。私が悲鳴を上げていたのを知っていてくれた。

怖かった。辛かった。憎かった。二度目は耐えられないと思った。

でも、もっと怖かった。もっと耐えられなかった。

二度と会えないことが怖かった。耐えられるはずもなかった。
置いてきぼりになんてしない。絶対取り戻す。そう、一人だけ生還した十八歳の私は決意した。
全部捧げてもいいと思った。
私は――ようやく取り戻したのだ。
とても、言葉にできない。言葉にならない。
好きだ。彼が好きだ。貴方がとても好きだ。これが愛でなければ、私は他に愛など知らない。
無論、きれいな気持ちのままだけではいられなかった。
多くの苦しみを思い出す。私を打ち据えた人々の顔を思い出す。
彼らを憎んだこともあった。
憎悪で身を滅ぼすかとも思った。
あるいは、恐怖に己が保たないとすら、私は自らを押さえつけた。
いつか来るやもしれない終焉を畏れないでもない。彼と同じように人ではなくなる日が来るのかもしれない。
でも今は。
愚にもつかない、と思いながら願わずにいられない。

この一瞬の時よ。
どうか、今だけは。

私は言葉にならず、静かに魂を震わせ続けた。

## おわり（後書き）

終わりました。
ありがとうございました。

尻切れトンボ感が否めませんが、完結です。

この作品が未熟ながらも完結マークをつけられましたのは、ご感想くださった皆さんのおかげです。
返信恐怖症になっておりますため、全てへの返信は控えさせていただいていますが、一件一件大切に拝見させていただき、ところどころ物語を修正させていただきました。

作者一人の力では、とても完結まで気力がもたなかったと思います。
お気に入りしてくださった方、評価をつけてくださった方、皆さんのおかげです。
本当にありがとうございました。

少し休んで、色々考えてみたいと思います。

最後に、ここまでお付き合いくださった方へ、もう一度御礼言わせてください。

ありがとうございました！

よろしければ、ご感想お待ちしております。

なお、続きは補足事項の設定集です。裏設定やおふざけ満載なので、興味のある方だけご覧いただければ幸甚です。

蛇足：大変恐れ多いのですが、ふんばりどころの執筆中ＢＧＭ、イメージソングはナ○ムジカ　ｔａ－ｌ／ｉｌａでした。本当にいい曲ですね。

蛇足２　ジャン×さつきの１５禁か１８禁か作者も判断がつかない後日やまなしいみなしおちなしの性描写あり話の外部サイトＵＲＬを貼っておきます。
不快になる可能性がありますので、各自ご判断の上閲覧願います。
ストーリーはないです。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ９．ｏｃｎ．ｎｅ．ｊｐ／~ｋｉｎｇｉｎ／ｒｏｌｅｐ／ｒｏｌｅｐｌ．ｈｔｍ

## 巻末付録のようなもの（ネタバレ）

巻末付録のようなもの。
補足事項。盛大なネタバレのため、本作「ろーるぷれいしてください」の「おわり」まで未読の場合は迂回ください。
なお、イメージが壊れる設定もあります。後半からだんだん崩れています。本作中出てこない裏設定もてんこ盛りです。本作とは切り離して考えてください。色々ご注意ください。

○バーロウ家
ギフトにまつわる怪異、惨禍に巻き込まれた人々の相互扶助組織であったが、後にギフト関連の管理者として暗躍するようになった。
アリマタヤのヨセフの子孫、『災いの一撃』による聖杯城の崩壊をシンボルとする。
血縁者だけではなく、ギフトによる【絆】により、ファミリーを形成する。
当主は一族内でも誰なのか不明。また、一族内でも誰がバーロウなのか、把握していないことがある。
指揮系統は怪異にて行う。彼ら自身がすでに怪異でもある。

○仁王家
本作では出ないが、東の大当家、弓納持（ゆみなもち）家の分家。弓納持は日本版バーロウ家である。
権威失墜中、事態収拾ができなかった。
西の大当家は鈴木家。一族内でのっぴきならぬ事態が起こってい

たため、本件については沈黙。

○Ｔｈｅ　Ｂｏｏｋ
　ギフトの一種。怪異を保管することができる蔵。巻数は十二とも十三とも言われる。バーロウ家が所持しているのは、数冊。所有者が死亡した場合、近親者に贈与されるケースが多い。消失しても、再度世界に投下される。誰が手にするかは、『不確定』。なお、誰が投下しているかについては触れない。

○番人
　Ｔｈｅ　Ｂｏｏｋの番人のこと。使い魔、式。一冊につき一体。ただし、三体の番人を所有できる希少本がある。三体については、東方三賢者の名前がつけられていたが、十九世紀、バーロウ家の前身クインシー家がゲーテの長編戯曲登場人物の名前に変えた（第二次世界大戦時はまた別の名前）。
　メフィストフェレス、ファウストゥス、グレートヒェン。メフィストフェレスのみが主殺しを行い、メフィストフェレスより劣る二体は時に空席となることがある。メフィスト以外の番人は、悲惨な死に方をしたものがその意思を問われ、自動的に補填される。
　所有者を助けるが、継承において『主殺し』の儀式を行う。番人が勝てば、所有者が新たな番人として補填される。

○所有者（オーナー）
　Ｔｈｅ　Ｂｏｏｋの所有者のこと。死亡すると、次の番人として補填される。

○蜂の腰
　辞書的には、砂時計のくびれた部分のことを指す。形状が似ているため。
　転じて、『中庸』、セフィロトと逆セフィロトのどちらにも分岐

できる場所の意で本作中使用。

○災いの一撃
アーサー王物語より。
聖杯城を崩壊させた一撃を指す。

○盾
防御するもの。
紋章を刻めば、身の証となる。
失われない守るべき『自己』、孤立系の象徴として使用した。

○黒騎士
身元を明かさない明かすことのできない罪の象徴

○兄弟の悲劇
紋章を刻むべき盾が失われたため、互いの正体が分からず、兄弟で殺しあった。
ステンドグラスの男は、アーサー王物語における兄弟の悲劇を再現し、悦に入った上、見物に来ていた。

○ステンドグラスの男
槍に魅入られた者。あるいはその逆。面白い見世物として、クライマックスに見物に来ていた。

○ブレッチェリー・パーク
世界大戦時におけるイギリスの暗号解析所施設
ドイツ軍の暗号機エニグマによる暗号を傍受解析するも、深刻なブラックアウトに悩まされていた。

○シャーク通信網

ドイツの通信網。別名トリトン。

○エニグマ
ドイツの暗号機。

○系
観測対象のこと。開放系と閉鎖系がある。閉鎖系のうち、孤立系は熱も物質も通さない。系以外のものを外界あるいは環境という。

○境界
系と外界の仮想の境のこと。共感魔術においては、この境界の構築を『接触』と独自解釈した。

○共感魔術
金枝篇より。接触したもの同士には、何らかの相互作用があるとする。接触は、物質的な接触ではなく、意味的接触でも構わない。感染魔術、模倣魔術がある。
本作においては、系と境界の項目参照。

○仮想現実
本作においては、怪異の感染媒体であり、境界となった。境界の項目参照。

○ロンギヌスの槍
聖書外典より。イエスを刺し貫いた槍。長きもの。攪拌するもの。中核に触れる項目のため、本作参照。

○聖杯
アーサー王物語より。
本作においては、系の象徴。あるいは、ソーマ、アムリタ、エリ

クシエール、賢者の石などを精製する器の隠喩。
原材料をぶち込んで似る釜。
ふこ呪術の意。
誰が術を施していたかについては本作参照。究極、『誰』でもないとも言える。
キーワードは多様性。

○対話
バーロウ家が考えるエックスデイ。
いつの日か、接触する『彼ら』が音声による意思疎通が可能とは限らない。
キーワードは多様性。

○勇者と魔王
究極には区別されない。
熱と圧力の比ゆである。どちらの経路でも、内部エネルギーは増加する。
共感魔術においては、彼らによる改変『災いの一撃』は現実世界に『仕事』という結果をもたらす。

○八王子夜音
バーロウ家の一員。仁王大輔の所持する本の番人、ファウストゥス。本作開始前に死亡していた。悲惨な死に方をしたため、補填された。こんなところで説明申し訳ない。非常に老獪なバーロウであり、番人でもある。
なお、蛇足ではあるが、本作の原点となった『仲の悪い男女が一緒に異世界に放り込まれたら、殺しあうか？　協力し合うか？　それとも？』というテーマの話の片割れだった。本来なら、準主役であった。
彼の物語におけるヒロインは、さつきの十倍くらい本当に性格が

悪い。このヒロインは、『王女に左腕を切られる』という点で、さつきと同じ運命を辿る。暗黒に目覚めたさつきともいうべき鏡像存在である。

この話は、短編か中篇で書くかもしれない。書かないかもしれない。

補足の補足：彼だけ説明が多いのは、八王子が一番興味深いとおっしゃってくださった方への御礼とお詫びです。活躍させられずにすみません。見せ場はない予定でしたが、作中彼の出番をちょっと増やしました。

○仁王大輔

使用前

顔は鬼でも心は乙女だった。

しかし、前回さつきと殺しあった。

現実には死んでいるのに、別の世界では生きているという中途半端な状態に置かれた。ギフトも混乱したため、凍結した。なお、ギフトはまったく使いこなせていなかった。さつきを巻き込む気はなかったが、結果的に渦中の人にしてしまった。ギフトを手に入れた際、初撃で生き残ったのは、優秀なファウストゥスのお陰。

○ジャン

使用後

レジーナの外交官は表向き、間諜統括組織の長官

道化→へたれ→覚醒☆

おっさん

証明完了。

○桐島聖涙

漢

最期は、素の口調だった。

○エミリオ王太子
本作参照
泣き虫

○ユリア姫
本作参照
善悪は砂時計のように、主観によって上下がさかさまになる。ただし、彼女の主観でも悪であったため、終わらない世界に発狂した。

○復讐
本作のテーマではない。しかし興味深いテーマだと思う。

○性格が悪い
前完結作で、初期に主人公の性格について問題視する指摘が多かったため、成長を視野に入れるにしても、事前にタグで注意喚起することとした。どの作品も、人は変わる、正負に成長する、が大体サブテーマではあるが、当然作者の未熟さにより書ききれていない。よくもなるし悪くもなるし、一歩進んで二歩下がることもある。その後下がったことにより躍進することもある、というのを表現できていない、申し訳ない。
スタート前欄外上等においては、鼻持ちならない性格で武装する主人公の後退を描いたつもりだったが、描写は困難だった。重ねて申し訳ない。

○時系列
サブタイトルで仕込んだ。主人公のおおよその「年齢」により、過去と未来の錯覚を起こそうとした。本当は時系列が逆。作者力量不足にて、ご理解いただけないかもしれない。痛恨の一撃。

○名前
本作のキーワード。
とても大切なもの。

○さつきの身体
捻くれて四回転半ひねりのおっさんと女子高生の組み合わせのために、現実世界でも、そのままＡ系を適用してもらうこととなった。
また代償のない奇跡はない。

○愛
いわせんな、恥ずかしい。申し訳ございませんでした。

お粗末様でした。

巻末付録いかがでしたか？　作者の悪ふざけ９０％ですので、石を投げないでいただけると助かります。
ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございました！
最大限の感謝を込めて、またお会いできるとうれしいです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6577u/

ろーるぷれいしてください

2011年9月30日13時17分発行